

直した。「それは一體何う云ふ譯でせう？ 昔は慘酷などと云ふ事に縁のない、偉大な皇帝が澤山あつたぢやありませんか。例へばアントニヌスとか、マルクス・アウレリウス皇帝などは何うです？ その外年代記に載つてゐる古い國民や、又近代の國民の中にもそんなのは幾らもありま

すよ……」

「君何うか忘れないで下さい」とニコロは抗辯した。「私が今言つてゐるのは、征服した國家の事で祖先から繼承した國家の事ではありません。權力の保持ではなくて、獲得の話をしてゐるのです。勿論アントニヌスやマルクス・アウレリウス帝は、別に國家に對して害を加へることなしに、仁惠を施す事が出来ました。それは過去に於ては兇猛な、血腥い行爲が餘り多過ぎたからです。羅馬建設の際に牝狼に育てられた兄弟の一人が、現在の弟を手に懸けて殺した事を想ひ出して下さい。無論これは恐しい悪行ですが、併し一方から見ると、若し獨裁權の樹立に必要なく可からざる、此の弟殺しが行はれなかつたら、羅馬帝國が存在し得たか何うか疑はしいです。或は避くべからざる主權の分裂の爲めに、亡びて了つたかも知れません。此の弟殺しを衡の一方の皿へ入れ、今一方の皿に永遠の都市のありと有らゆる善行睿智を載せて見たら、果して何方の皿が下へ下るか、~~之~~を輕々に論斷し得るものがあるでせうか？ 勿論、かうした悪行に基礎を置いた皇帝の光榮よりも、寧ろ暗闇の中に生死する名も無い人々の存在を選まなければな

りません。併し一旦善の道を抛つた者は、若し自滅に終り度くないと思ふならば、最後まで行き盡す覺悟を以て、斷然此の運命的な道を進まなければなりません。何故と言つて、人間は只些細な侮辱や中位の侮辱に對して復讐するのみで、大なる侮辱を受けた時は復讐の力が無くなつて了ふからです。それ故君主たるものは自分の臣民に、無限大の侮辱を加へるべきであつて、些細な侮辱中位の侮辱を慎まなければなりません。併し多數の人間は、善と惡との中間の道を選ぶものだから——最も危険な道を選ぶものだから、徹底した善人にも徹底した惡人にもなる事が出来ないのです。惡行が偉大なる精神を要求するようになると、彼等はもう尻込みをして

了つて、自然な安易な態度で只有り觸れた卑劣な行をするに留るのです」

「あなたのお話を聞くと、髪の毛が逆立つ様です、ニコロさん！」ルチオは、ぞつとした様にかう言つた。併し社交的な本能が心の中で、此の場合冗談で誤魔化して了ふのが一番穩當だと囁いたので、彼は強ひて微笑し乍ら言ひ足した。「まあ何とでも勝手な熱をお吹きなさい。併しそれは到底有り得べからざる物のやうな氣がします……」

「純粹の眞理は常に有り得べからざる物の様に思はれるのです」と、マキアゾリは素氣ない調子で遮つた。

レオナルドは注意深く聴いてゐたが、ニコロが虚心平氣を粧ひながら、そつと試験する様な視線を自分の方へ投げてゐるのに、もう疾うから氣が付いてゐた。それはかうした思想がレオナルドに何んな印象を與へるか——警拔斬新な説が彼を驚かすか脅やかすか、それを見て取らうとする物の様であつた。此の自信に缺けた横目の中には虚榮心が隠れて居た。其の時レオナルドは、「マキアエリは未だ十分自己を支配してゐない、犀利で繊細な頭腦を有つてゐるけれど、一切を征服する様な落着いた力を持つてゐない」とかう直覺した。皆と同じ様に考へ度くない、共通の思想が厭で堪らないと云つた心持の爲めに、彼は誇張と云ふ反對の弊に陥つたのである。それは假令完全なものでなくても、兎に角人をあつと言はせる様な、新奇な眞理を追ひ求める心持であつた。彼は丁度手品師が何の恐れ氣もなく、巧みに拔身の刀を弄ぶ様に、前代未聞の大膽を以て、「善行」と「兇暴」と云つた様な、相反した言葉を結び合すのであつた。彼はかう云ふ様な磨ぎ澄した、晃々と輝く、人の心を魅する様な、恐しい半眞理を納めた大きな武器庫を有つてゐた。その中から此の半眞理を取出して、凡俗的な儀禮を固執する、ルチオ氏の如き常識主義の群集を目覓けて、毒矢か何ぞの様に投げ付けた。それは彼等の物々しい卑劣さを懲す爲めに、又自分の譯の分らない優越を證明する爲めに復讐するものであつたが、只一寸々々刺したり突いたりする丈で、殺しもしなければ傷さへ付けないのであつた。

ふと畫家は自分自身の創り出した怪物を想ひ出した。それは嘗て父ビエロ・ダギンチの註文に依つて、様々な忌はしい毒蟲の部分々々を組み合せて、木楯の上に描いたものである。事に依つたらニコロ氏が、超自然な魅力を持つたメドゥサの首とも云ふべき、現實に存在しない比類なき惡逆の君主を創造したのも、矢張り單に群集を脅さうが爲めのみであつて、其處に何等の目的も私慾も無いのではあるまいか？

併しそれと同時に此の暢氣な空想の氣紛れと惡戯の下に——藝術家としての冷靜無私な心持の下に、眞に偉大なる苦痛が潜んでゐるのを、レオナルドは察したのである。それは手品師が拔身の刀を玩びながら、わざと自分の手を切つて血を流す様な心持であつた。他人の殘忍を讚美する言葉の中に、自分自身に對する殘忍があつた。

「此の人は自分で自分の傷を突つついて、僅かに苦痛を紛らす慰れた病人の一人ではないかしらん？」とレオナルドは考へた。

が、それでも自分に取つて恐しく縁遠い、と同時に近しい、不思議に複雑な心の藏してゐる最後の祕密は、未だ知る事が出来なかつたのである。

彼が深い好奇心を以てマキアエリを觀察してゐる中に、ルチオ氏はまるで馬鹿げた夢でも見て居る様に、幻のメドゥサの首と力無げに戦つてゐた。

「いや、私も敢て議論しません」常識と云ふ最後の城塞へ退却しながら、彼はかう言つた。「あなたの主張される君主に殘虐が必要だと云ふ議論は、古代の偉人に當て箝めて見たら、幾分の眞理を含んでゐるかも知れません。彼等には多くの行爲を許す事が出来ます。何故なれば彼等の善行や功績が、あらゆる尺度を超越して居るからです。併しまあ考へても御覽なまうニッコロさん、それがローマニヤ王に一體何んな關係があるのでせう？ Quob licet Jovi, non licet bovi (ヨブに許された事)ですからね。亞歴山大帝やジュリウス・ツェーザルに許された事が、果して其の儘亞歴山六世や、ツェーザル・ボルジャに許されるでせうか？ ボルジャ公は果して何者であるか——皇帝であるか又は無であるか、今の所未だ分らないのですからね。少くとも皆私の意見に同意してゐます……」

「おゝ勿論、みんな君の意見に同意してゐますとも——もう明かに自制心を失ひ乍ら、ニッコロは遮つた。「併しそれは未だ本當の證明と言はれませんよ。眞理と云ふ者は皆の歩く本通りに住んでゐないのですからね。所で此の議論を打切る爲めに、私は最後に一言これ文の事を云つて置きます。ツェーザル・ボルジャの行爲を觀察した結果、私はそれを完全なものと認めます。そして武力の成功に依つて權力を得んとする人々に對しては、十分模倣に價する優れた龜鑑として、彼を薦め度いと思ひます。思ひ切つた兇猛と立派な善行とが彼の一身に結合されて、彼は人々

を愛撫し且つ誅戮する術を心得てゐます。そして彼があゝの短日月の間に築き上げた權力の基礎は、牢乎として抜くべからざるものがあります。それ故既に今日に於ても彼は伊太利全土を通じて、唯一絶對の獨裁君主の觀があります。或は歐羅巴全土の獨裁君主となるのかも知れません。未來に於て何んな成功が彼を待ち設けてゐるか、殆ど想像する事が出来ない位です……」

彼の聲は慄へて、赤い斑點がこけた頬に現れ目は熱病やみの様に燃えた。此の時彼はまるで豫言者のやうに見えた。冷笑的な犬儒の假面の下から、以前のサプナローラの弟子の顔が覗いたのである。

併し議論に疲れたルチオが和睦の印に、隣にある地下室の酒場で、二三本倒さうではないかと申入れた時、豫言者の顔は忽ち消えて了つた。

「何うでせう」と、ニッコロが異議を立てた。「それより一つ他の所へ行かうちやありませんか。その方に掛けたら私は犬の様に鋭敏な嗅覺を有つてゐますからね！ 此處には屹度素敵な娘がゐるに相違ないですよ……」

「何の、こんなやくざな町に碌な娘が居る筈はありませんよ」とルチオは本當にしなかつた。「君よくお聞きなさい」フロレンスの祕書官は物々しげに遮つた。「決してやくざな町を輕蔑するものぢやありません。飛んでもない事だ！ かうした思切つて汚らしい町端れや暗い横町で、

時々涎の垂れさうな素敵な奴を掘出す事があるもんですよー」

ルチオは打解けた様子でマキアエリの肩を叩き乍ら、悪戯者と呼んだ。

「暗いですよ」と彼は尻込みした。「それに寒いですからね、凍えて了ひますよ……」

「提灯を持つて行きませう」と、ニコロは何處までも主張した。「毛皮外套を着て頭巾を顔へ被せたらいいですよ。少くとも誰にも分りやしません、かう云ふ探険は秘密にすればするほど愉快なものですよ——レオナルドさん、あなたも一緒にいらつしやいますか？」

畫家は斷つた。

彼はよく男が集つてする猥褻な女の話が好きになつたので、押へ切れない羞恥の念を抱き乍ら逃げる様に逃げる様にして居た。人間の顔に表れる臨終の恐怖の表情を研究する爲めに、死刑囚を刑場へ見送りに行く、自然の秘密の冷靜な探究者たる此の五十男が、時とすると輕はずみな冗談口にすつかり、開誤ついて了つて、目のやり場に困りながら、子供の様に眞赤になる事があつた。

ニコロはルチオを引つ張つて行つた。

九

次の日早に宮中から侍従官がやつて来て、宮廷附の建築技師長が用意の宿舎に満足してゐられるか、外國人の一杯うよくしてゐる此の町で、別に不自由を感じてはゐられないと訊ねた上、王の祝辭と共に下賜品を差出した。それは當時の接待好きな習慣に従つて、粉の入つた大袋と、酒樽と、丸の儘の羊肉と、雌雄番の雞八羽づゝと、大把火二本と、蜂蠟燭三包と菓子二箱と——すべて臺所向きの食料品であつた。レオナルドに對するツェーザルの心遣ひを見て、ニコロは何うか自分の爲めに一言口を利いて、謁見の許可を得てくれと頼んだ。

夜の十一時に（これがいつもツェーザルの謁見時刻になつてゐたので）、二人は宮中へ赴いた。ツェーザルの生活状態は奇妙なものであつた。ある時フュララの使臣が法王に向つて、ツェーザルの謁見を得るのが容易でないと訴へたとき、法王はそれに答へて、自分も我子の行ひに不満足に感じてゐる、ツェーザルは夜を晝に變へて了つて、國務的性質を帯びた謁見を、二月も三月も延して居るのだと言つた位である。

彼は一日を次の様に分けてゐた。夏と冬には朝の四時か五時に床に就いて、午後の三時は彼に取つて、やつと空が白み始めた頃で、四時になつてやつと日が昇るのであつた。晩の五時に彼は着替へをして、直ぐに食事をした。何うかすると床の中に寝ながら食を取る事もあつた。そして食事中と食後とが執務時間となつてゐたのである。彼は自分の生活全體を厚い秘密の壁

で包んでゐたが、それは自然の隠蔽癖ばかりでなく、打算の念からも起るのであつた。宮殿から外へ出る事は非常に稀で、出る時には大抵假面を被つてゐた。人民に姿を見せるのは大祭日の時で、軍隊の前へ現れるのは戦闘中危機一髪と云ふ瞬間であつた。その代り彼の出現はまるで半神半人の出現の様に、非常な震撼を惹き起すのであつた。彼は人を驚かすのが好きでもあり、上手でもあつた。

彼が金銭上寛大な事については、本當と思へない様な噂が傳へられて居た。羅馬教會軍司令官として體面を持って行くのに、全世界の基督教徒から絶えず聖ペテロの金庫へ流れ込む黄金が、不足を告げる位であつた。外國使臣は自分の君主に向つて、彼が毎日少くとも千八百ドッカートの金を費ふ様に報告した。彼が町の往來を通行する時、人々は群をなして彼の後を追つて駈け出した。それは彼が人民へ贈物にする積りで、特に落ち易く造つた銀の蹄鐵を、自分の馬に附けてゐる事を知つてゐたからである。

人々は又彼の腕力についても奇蹟の様な話を傳へてゐた。嘗て羅馬で闘牛の催しがあつた時、當時ブレンチイの大僧正であつた若いツューザルは、廣刃の劍の一撃で牡牛の頭を、眞二つに割つて了つたとか云ふ事である。最近佛蘭西病に罹つて以來、彼の健康に少し虧隙が入つたけれど、全然破壊されて了ふ様な事は無かつた。細く美しい女の様な手で蹄鐵を曲げたり、鐵棒を

くるく／＼振り廻したり、船の帆綱を引き千切つたりした。諸大國の使臣や自國の高官貴族などにも容易に謁見しない彼が、よくチェゼナ市郊外の丘の上で、ローマニヤの野に育つた牧夫達の、拳闘の仕合ひに交つてゐるのを見掛ける事があつた。何うかすると彼は自分で此の勝負に加つた。

それと同時に彼は一點非の打ち處のない雅男で、社交界の流行の支配者であつた。ある時妹ルクレチヤの結婚の當夜、彼は敵の要塞の包圍を抛つて、陣中から眞直に花婿なるフェラテ公アルフォンソ・デステの宮殿へ馬を飛ばした。黒天鷲絨の服に黒い假面を被つて、誰にも顔を見知られない様に、群がる客の間を押分けて會釋した。人々が彼の爲めに道を開いた時、彼は唯一人音楽の響に合せて踊を始めた。廣間の中を二三度くるく／＼と廻つた身振が餘り鮮かで優美だつたので、一同は直ぐにそれと氣がついた。「ツューザル！ ツューザル！ 類と眞似手の無いツューザル」と云ふ感激の囁きが廣間を走つた。彼は客にも主人にも一顧の注意すら拂はず、花嫁を小傍へ連れて行つて、屈み掛りながら其の耳に何やら囁き始めた。ルクレチヤは目を伏せて、かつと顔を赤くしたが、直ぐに又麻布の様に眞蒼になつたが、その爲めに顔が眞珠の様な優しさと言さを帯びて、一層美しく思はれるのであつた。事に依つたら彼女は無邪氣な少女であつたかも知れないけれど、併し無限に従順な弱い女性であつた。彼女は兄の恐しい意志に従順で

あつた爲めに、兄妹相姦の罪さへ犯したと人々は噂し合つた。

彼は明白な證據の上らぬようと、そのみ心配して居た。事に依つたら、人の噂がツューザルの悪逆を誇大したのかも知れないけれど、又事に依つたら、現實の方が風説よりもつと恐しかつたかも知れない。兎に角彼は巧みに罪跡を隠蔽したのである。

10

ツューザルの宮殿は古いゴチック式のフノ城であつた。

一段階級の低い伺候者の接見に當てられた、大きな淋しい寒い廣間を通り抜けて、レオナルドとマキアゾリは小さな内部の室へ入つた。それは以前禮拜堂になつてゐたらしく、矢車形をした窓には花硝子が嵌めてあつたり、教會の唱歌隊に宛てられた高い棧敷があつたりした。其處には細かい椽の木彫細工で十二使徒や、原始基督教の高僧などが現してあつた。色の褪めた天井の壁畫には、叢雲や天使などの間を鳩の形をした精靈が飛んでゐた。近侍の人々は此處に控へてゐて、小さな聲で話し合つてゐた。全體に主君の近くと云ふ事が壁越しに察しられた。

リミニの公使は頭の禿げた老人であつたが、仕合せが悪くてもう三月も王の謁見を待つてゐたので、幾晩も寝られぬ夜が續いて疲れたのであらう、片隅にある教會用の椅子で假睡ん

でゐた。

時々戸が開いて、心配さうな顔付をした秘書官のアガピトが、鼻の上に眼鏡を載せ、耳にペンを挟んだ首を突き出して、其處にゐる人々の中誰かを王の所へ呼ぶのであつた。

彼が姿を現はす度にリミニの公使は、病的に身慄ひして體を起したが、未だ自分の番が來ないのを見ると、重々しく吐息をついた。そして銅の乳鉢で藥を磨る音を聞き乍ら、又もや眠りに落ちて行くのであつた。

狭い城の中には外に便利な室が無い爲めに、此の禮拜堂が行軍用の調劑室に宛てられたのである。以前祭壇のあつた窓の前では、聖ジュスタ寺院の主教であると同時に、法王とツューザルの侍醫頭であるガスパレ・トレラが、壺や曲頸壺や、醫療用の壺などを一杯載せた卓の上で、此の頃流行し始めた「佛蘭西病」——微毒の藥を調合してゐた。それはコロムブスが新たに發見した正午島から渡つて來る、所謂神木の浸劑であつた。脂っこい塊のやうになる、鋭い匂を放散する。泊夫藍の様に黄色い神木の心を、美しい手に一杯くつつけながら、主教の醫師は愛想のいゝ微笑を浮べて、靈驗著き神木の性質特色を説明してゐた。

一同は好奇の色を浮べ乍ら聽いてゐた。其處に居合す人々の多數は、經驗に依つて此の恐しい病氣を知つてゐたのである。

「併し一體何處から出て来たものだらう？」愁はしげな疑惑の色を浮べつゝ、聖バルビナの僧正が頭を振つた。

「西班牙の猶太人やムーア人が持つて来たと言ふ事ですよ」主教のエルナがかう言つた。「でも今では神を譏る奴等に對して法律が發布されてから以來、有難い事に少し下火になりました。五六年前などは人間ばかりでなくて、馬や豚や犬の様な動物まで此の病氣に罹つたものです。立木や畑の穀類さへ……」

醫師は小麥や燕麥までが佛蘭西病に罹り得るものだらうか、と疑をさし挟んだ。

「神様が罰をお下しなされたのです」主教のトラニが惱ましげに溜息をついた。「人間の罪業に對して神の怒りの鞭をお下しなされたのです！」

人々は口を噤んで、唯規則正しい乳鉢の音が聞えるのみであつた。只唱歌隊席の壁に描かれてゐる原始基督教の高僧達は、神の教會を司る末世の人々の、かうした奇怪な會話を呆れた様に聞き澄ましてゐた。藥木の發散する息の望りさうなカムフルの匂が、僅かにそれと感じられる以前の香の薫りに混じてゐる、藥局ラムプの覺束ない瞬きに照らされた此の禮拜堂の中では、羅馬教會の主教達が集つて、何か有難い祕法でも行つて居る様であつた。

「時に」と宮廷附の占星術師アルグリオが、醫師に向つてかう訊いた。「此の病氣は空氣に依つ

て傳染するとか云ふ事ですが、それは本當ですか」

醫師は疑はしげに肩を竦めた。

「勿論空氣傳染ですよ」とマキアエリが狡さうな微笑を浮べ乍らかう斷言した。「若しさうでなかつたら此の病氣が男僧の修道院ばかりでなく、尼僧の修道院にまで擴る譯がありませんよ」一同は薄笑を浮べた。

宮廷詩人の一人バチスト・オルフィノは、トレラ主教の新たに著した佛蘭西病に關する書物の中から、ツューザル王に獻ぐる詩と云ふのを、まるで祈禱か何ぞの様に物々しく朗讀した。その詩の中にかう云ふ一節があつた。ツューザルは自分の善行を以て往時の偉人の光芒を奪つた。即ちブルトッスを正義に依つて、デシウスを持久力に依つて、スシピオを自制に依つて、マルクス・レグルスを忠實に依つて、パウロ・エミリヤを寛大に依つてそれ／＼凌駕したが、尙その上に水銀療法を創始したと云つて、羅馬教會の旗手たるボルジャを讚美したものである。

かうした會話の間に、フロレンス共和國の祕書官は、廷臣を交る／＼傍へ引つ張つて行つて、巧みにツューザルの將來の外交政策を訊ねた。彼は録を懸けたり、探りを入れたりして、まるで警察犬が空氣を嗅ぎ廻す様であつた。やがてレオナルドの傍へ近寄つて、首を胸の上へ垂れ、人差指を脣へ當てがって、額越しに對手を眺めながら、幾度か物思はしげに繰返した。

「朝鮮菊を食はう……朝鮮菊を食はう……」

「何んな朝鮮菊ですか？」レオナルドは吃驚した。

「そこです、何んな朝鮮菊かと云ふ事が問題なのです……實は此の間ツェーザル公がフェララの使者のバンドルフオ・コレヌチオに謎々を懸けたのです。外でもない、俺は朝鮮菊を食はう、一枚々葉を食つて行かうと言つたのです。事に依つたらこれは敵の同盟を指してゐるのかも知れません。同盟を分離して、一人づゝ亡ぼして行かう、と云ふ事かも知れませんが、事に依つたら又外の事かも知らないです。私はもう一時間もこれで頭を痛めてゐるのです！」

それからレオナルドの耳許へ屈み込んで、彼はかう囁いた。

「此處では一切が謎と畏で充たされてゐるのです！ 馬鹿々々しい事ばかり喋つてゐますが、一寸でも實際問題に觸れると、まるで食事をしてゐる坊さんが、魚のやうに黙り込んで了ふんですからね。併し私はその手に乗りやしません！ 私は彼等が何やら企らんでゐるのを、ちやんと感付いて居ます。だが一體それは何でせう？ 何を企らんでゐるのだらう。全くですよレオナルドさん、私は靈を惡魔に質入れしても構ひません、何でも彼でもそれが知り度いのです！」

彼の目はまるで捨身になつた賭博者のやうに輝いた。細目に開けられた戸の陰から、アガピトの頭が差し覗いた。彼は畫家を手招きした。

王の護身兵たるアルバノ地方の傭兵が居並んだ、長い薄暗い廊下を返つて、レオナルドはツェーザルの寢室へ入つた。それは一角獸狩を織り出してある、絹の壁掛を懸け連ねた居心地のいい室で、天井には化粧漆食で王女パシフューと、牡牛との戀物語を現はしてあつた。ホルジア家の紋章たる此の牡牛は、眞紅か黄金の色に塗られて、聖ベテロの三重冠と鍵と共に、室内のあらゆる裝飾に繰返されて居た。

室の中は暑い程暖めてあつた。それは醫師が水銀塗擦をして後では、必ず日向か焚火で體を暖めて、隙間風を引込まぬやうにと勧めたからである。大理石の煖爐では芳香馥郁たる柏楨が燃えてゐるし、燈明には薰香水を交ぜた油が入れてあつた。ツェーザルは香類が好きなのであつた。

何時もの習はしで彼は着物をつけた儘、室の眞中にある低い、天蓋のない寢臺に横たはつてゐた。彼は床の中に臥つてゐるのと、馬に跨つてゐるのと、此の二つの體の置き方が一番工合がよかつたのである。虚心平氣の表情で、彼は枕の上へ肘突きし乍ら身動きもせず、二人の廷臣が寢臺の傍にある碧玉の小卓で、將棋を闘はすのを眺めてゐた。そして祕書官の報告を聞くのであつた。ツェーザルは同時に幾つかの事柄に、注意を分割する特別の能力を有してゐた。彼は物思ひに沈みながら、ゆるやかに單調な手付で、芳香の入つた黄金の玉を手から手へ持ち變

へてゐた。此の玉とグマスコ製の匕首とは、彼が片時も肌身放さず持つてゐる品であつた。

一一

彼は持前の人を魅する様な愛嬌のいゝ調子で、レオナルドを迎へた。畫家が膝を突かうとするのを制止して、隔てない態度で其の手を握りしめ、肘椅子に坐らせるのであつた。

王が彼を召し寄せたのは、新しくイモラの町へ建設すべき僧院に對する、ブラマンテの設計について相談し度い爲めであつた。此の僧院はヴレンチナと呼ばれて、贅を極めた禮拜堂や、病院や、巡禮者の宿泊所などが附屬してゐた。ツニーザルはかうした慈善的な建物を、自分の基督教徒としての仁愛の記念とし度かつたのである。

ブラマンテの設計圖の次に、彼はフノ町のイエロニモ・ソッチノの發明した印刷機械に使用する、新しい只今出来て来たばかりの活字を出して見せた。ローマニヤに於ける藝術科學の隆盛を願ふ彼は、此のソッチノに保護を與へてゐるのであつた。

アガビトは宮廷詩人フランチェスコ・ウベルチの作つた、王に對する頌歌の集を差出した。王は機嫌よくそれを受納して、詩人に十分賞與を取らすように命じた。それから頌歌ばかりでなく、諷刺詩も見度いと云ふ王の要求に依つて、秘書官は羅馬で捕へ

られて今聖天使の牢獄に投じられてゐるナポリの詩人マンチオニの諷刺詩を手渡した。それは手厳しい罵詈に充ちた短詩で、ツニーザルの事を驢馬だの、土耳古人だの、猶太人だの、破門された大僧正だの、妹を姦した男だの、神に背いた人間だの、嘗て基督の坐してゐた玉座の上に坐つてゐる、サタンの如き法王と淫婦の間に出来た落胤だのと呼んでゐた。

「忍耐深き大神よ、何を汝は待ち給ふ」と詩人は叫んでゐる。「彼が聖なる教會を、既に娼家と化したるを、汝は認め給はざるにや？」

「此の悪人を何と處分致しませうか、殿下？」とアガビトは訊ねた。

「わしの歸る迄打つ棄つて置け」と王は靜かに言つた。「わしが自分で成敗してやる」それから又一層小さな聲で、「わしは文士共に禮儀を教へる術を知つてゐるから」

ツニーザルの「文士共に禮儀を教へる術」と云ふのは、當時廣く知れ渡つて居た。比較的輕い侮辱を加へた文士は兩手を斬落して、焼けた鐵で舌に穴を明けられるのであつた。

報告を終へて秘書官は退出した。

宮廷附占星術の長官ブルグリオが、新しい天宮圖を持つてツニーザルの所へ近づいた。王は注意深く、敬虔の色さへ浮べ乍ら彼の説明を聽き取つた。ツニーザルは不可避の宿命、星の偉力といふ事を深く信じてゐたからである。ブルグリオの説明に依ると、最近王の佛蘭西病が再發し

たのは、乾いた火星が水氣を含んだ嫩宮へ入つた爲めに悪い影響を及ぼしたので、金牛宮の昇つて来る頃に火星が金星と合したならば、病は自然と癒るに相違ないとの事であつた。それから若し殿下が何か重大な行動を取らうと思ひになるならば、十二月の三十一日の午後をお選びになるが宜しい。何故ならば此の日の星合ひが殿下の幸福を現してゐるからであると忠告した。そして人差指を立て乍ら王の耳許へ屈み込んで、神祕めかしい聲で三度囁いた。

「さうなさいまし！ さうなさいまし！ さうなさいまし！」

ツェーザルは目を伏せた儘何も答へなかつた。併し畫家は彼の顔に、暗い陰が掠めて通つたのに氣付いたのである。手眞似で占星術師を下らせると、彼は再び建築技師の方へ向つた。

レオナルドは彼の前に軍事上の繪圖や、地圖などを擴げて見せた。それは地質の構造や水流や、山脈に依つて自然に構成された境界や、溪谷に依つて展開された水脈などを明かにした學者の研究である許りでなく、又同時に大畫家の製作に係る、各地方の鳥瞰圖的寫生であつた。海は青色に、山は鶯色に、川は淺黄色に、町は暗紅色に、草場は薄綠色に塗られて、一つ一つの廣場、往來、哨樓などの細部が、驚くばかり完成された技巧を以て描き出してあつたので、傍に書いてある名前を讀まないでも、直ぐに何町と云ふ事が分る位であつた。此の地圖に對すると、自分が地上を飛び翔り乍ら、目眩めくやうな高みから無限の遠景を、足下に眺めてゐる様

な心持がした。ツェーザルは或一枚の地圖を特に注意深く檢閲した。それはボルセナ湖に依つて南方を、アルノ川へ落ちるヴル・デマ川の溪谷に依つて北方を、アレツツ、及ベルジャに依つて西方を、シエナ及沿海州に依つて東方を境してゐる地方で、伊太利の心臓とも言ふべき、レオナルドの故郷フロレンスであつた。王は此の土地を美味な獲物か何ぞの様に、久しい以前から空想してゐたのである。

深い瞑想に耽りながらツェーザルは、かうした飛翔の感覺を味ひ楽しんでゐた。彼は自分の感覺を言葉で言ひ表はす事が出来なかつたが、併し自分とレオナルドは互に理解し合つてゐる。二人は一味同腹である、といつた様な氣持がするのであつた。彼は科學の與へ得る新しい偉大な權力を、臚げながら察したので、目醒しい飛翔の翼とも云ふべき此の權力を、我物にし度いと思つたのである。やがて彼は目を上げて畫家を眺め、對手を魅惑する様な愛想のいゝ微笑を浮べ乍ら、その手を握りしめた。

「有難う、レオナルド！ 何うか今迄通りに變りなく奉公して呉れ。さうすれば私も禮のし方位知つて居るから。所でお前工合は良いかね？」と彼は心配さうに言ひ足した。「今の俸給で満足かね？ 何か希望は無いかね。わしはお前の願ひなら何でも悦んで叶へてやるよ」

レオナルドは此の機會を利用して、ニココロに謁見の榮を賜るようにと口添へしてやつた。

ツェーザルは人の好きさうな薄笑を浮べ乍ら肩を竦めた。

「あのニコロは實に妙な男だ！ 切りに謁見を求めるので會つて見ると、別に何も話をする事が無いのだ。何だつてあんな變人を使者に寄越したのだらう？」

それから暫く無言の後レオナルドに向つて、マキアエリの事を何う思ふかと訊いた。

「殿下、私の考へますには、あの人は私がこれ迄會つた人達の中で、一番賢い人物の一人でございます」

「さう、賢い人間だ」と王は同意を表した。「政治の事も何うやら分つてゐる様だが、併しそれでも……あの男を頼りにする譯に行かない。空想家で輕率で、何事につけても適度と云ふ事を知らないのだ。尤も私は始終あの男の爲めよかれと思つてゐたが、お前の友人だと聞けば猶更だ。あの男は實際お人好しなんだよ！ まるで自分が此上なく狡猾な人間か何ぞの様に思つて、骨折つて私を欺さうとしてゐるけれど、あの男にはそんな狡猾な所が微塵もないのだ。マキアエリは私をフローレンス共和國の敵の様に考へてゐるが、併しわしは腹なぞ立てはしない。あの男がさう云ふ事をするのは、つまり祖國を自分の魂以上に愛してゐるからだ。それはわしにもよく分つて居る——まあ兎に角そんなに會ひ度がつて居るのなら、やつて來るが……わしは悦んで會ふと云つて呉れ。所で此の間誰からだつたか、ニコロが政治とか兵學とかの著述を

思ひ立つた、と云ふ話を聞いたよ」

ツェーザルは急に何か面白い事を想ひ出した様に、又例の靜かな薄笑ひを浮べた。

「お前はあの男からマケドニヤの方陣の話を聞いた事があるかね？ 無い？ それぢや教へて上げよう。或時此の兵學論の一節となつてゐる軍隊配置の法則を、わしの軍司令官バルトロメオ・カブラニカや其の他の隊長連に向つて説明した事がある。それは古のマケドニヤの方陣に似た、秩序整然たる配置方法で、而も其の説明が實に見事だつたので、皆それを實驗して見度くなつた譯だ。そこで一同郊外の陣營の前へ出て、ニコロが號令を懸け始めた。ところが先生、散散もがいて、三時間ばかりも二千人の兵隊を雨風の烈しい寒氣の中に立たせたけれど、御自慢の方陣を作り出す事が出来なかつた。到頭バルトロメオが我慢し切れなくなつて、軍隊の前へ出て行つた。そして生れてから兵學の本なぞ一冊も讀んだ事がないけれど、瞬く間に太鼓の響きにつれて、その歩兵隊を美しい秩序整然たる陣形に並べて了つた。其の時皆の者は今更の様に、議論と實行の間に何れ位大きな相違があるか、といふ事を悟つた次第だ「只レオナルド、あの男に此の話をしないように氣を付けなさい。ニコロはマケドニヤの方陣を持ち出されるのが厭なんだから」

もう遅かつた。朝の三時頃であつた。王の所へ野菜と鱈に白葡萄酒少量を添へた軽い夜食が

運ばれた。彼は純粹の西班牙人の常として、食事に控へ目なのであつた。

畫家は暇を告げた。ツューザルはもう一度魅力に充ちた愛想のいゝ調子で、彼に軍用地圖の繪を述べ、三人の小姓に把火を持つて見送らした。それは名譽待遇の徴であつた。

レオナルドはマキアエリに謁見の模様を話して聞かせた。ツューザルの爲めにフロレンス近郊の地圖を作製した話を聞くと、ニコロは思はず慄然として、

「え？ フロレンス共和国民たるあなたが——最も兇惡な祖國の敵の爲めに？」

「私はツューザルを我國の同盟者だと思つたのです」と畫家は抗辯した。

「思つたのですつて？」とフロレンスの祕書官は叫んだ。その目には憤懣の光が輝いてゐた。

「ねえレオナルドさん、若しこの事が元老達の耳に入つたら、あなたは叛逆人の罪名を受けるかも知れませんよ……」

「へえさうですか？」レオナルドは正直に驚いた。「尤もニコロさん、これに何か考へがあつた様に思はないで下さい——私は全く政治の事が少しも分らないので、まるで盲目なんですから……」

彼等は無言の儘互に目と目を見合はせた。そして二人共忽如として悟つた——此の點に關しては彼等は心底から永久に異つてゐて、互に縁のない他人であり、決して意見の一致を見る事は出来ないのであつた。一人は殆ど故郷を持つてゐない人であり、今一人はツューザルの言葉に従ふと、「自分の魂以上に」祖國を愛する人だからであつた。

一一一

其の夜ニコロは何處へとも、何の爲めとも言はずに出て行つた。

翌日午過ぎ寒さに慄へ乍ら、疲れ切つて歸つて來た。そしてレオナルドの室へ入つて、注意深く戸を閉めながら、自分は大分前から極めて祕密を要する事件に就いて、話をし度いと思つてゐたのだと前置きをして、大分昔の事から話を始めた。

三年前のとある黄昏時に、チルギヤとポルト・チゼナチコと、此の二つの町の間で當るローマニヤの淋しい野中で、幾人かの武装した假面の騎士が、ゼニス共和国の歩兵隊長バチスト・カラチオロの妻ドロテヤを、ウルピノからゼニスへ送つて行く護衛隊に襲ひ掛つた。そしてドロテヤとその従妹のマリヤ——ウルピノ修道院の聽法者たる十五歳の少女——を奪ひ取つて馬に乗せ、一目散に駈け去つたのである。その日からドロテヤとマリヤの消息は杳として知れなかつた。

ゼニスの議會及び元老院は、隊長の侮辱は引いて共和国の侮辱だと云ふので、ルイ十二世や、

西班牙王や、羅馬法王などに向つて、ドロテヤ掠奪の犯行者としてローマニヤ王を訴へたのである。けれど確たる證據が無かつたので、ツェーザルは嘲笑的な態度で、別に女に不自由はしないから、大道で掠奪などする必要を感じないと答へた。

世上の噂に依ると、ドロテヤは直ぐ綺麗に諦めて了つて、餘り良人の事をくよくよ思はずに、ツェーザルのあらゆる出征に隨いて行つたとの事である。

マリヤにはチオニジオと云ふ兄があつた。フロレンスのピザ陣に勤めてゐる若い隊長であつたが、フロレンスの元老達の運動も、エニス共和國の訴へも一向役に立たないのを見て、自ら幸福を試さうと決心して、名前を變へてローマニヤへ赴き、王に謁見して其の信任を得、チゼナの城塞へ入込んで、マリヤを少年の姿に扮装させ、共に牢屋を逃れ出たのである。けれどもベルジャの國境で捕手に追付かれ、兄は殺され、マリヤは城塞へ引戻された。

マキアゾリはフロレンス共和國の祕書官として、此の事件に關係してゐた。チオニジオ氏は彼と親しい間柄になつて、自分の大膽な祕密の計畫を打明け、牢番から妹について知り得た事を残らず彼に話して聞かしたのである。牢番達はマリヤを聖人だと信じ切つて、彼女は靈驗あらたかな治療を行つたり、豫言をしたりする、そして彼女の手足には、丁度シエナの聖カテリナの聖痕スニグイに似た、血の痕の生々しい、十字架の形をした傷が印せられてゐると、眞面目に

なつて言ひ張るのであつた。

ツェーザルはドロテヤに倦きると、今度はマリヤの方へ注意を向けた。有名な女性征服者たる彼は、自分の魅力に懸つたら、何んなに純潔な女でも到底抵抗出来ないと云ふ事を知つてゐるので、マリヤも晩かれ早かれ、すべての女と同じ様に、自分の意に従ふものと信じ切つてゐた、併しそれは間違ひであつた。彼の意志は此の子供の様な少女の胸に、打克つ事の出来ない抵抗を發見したのである。世間の噂に依ると、最近王は度々彼女の監房を訪れて、長い間彼女と差向ひでゐるとの事であるが、此の會見で何う云ふ事が起つたかも、すべての人に取つて祕密の謎であつた。

此の物語の結論として、ニココロはマリヤを救ひ出さうと云ふ意志を打明けた。

「レオナルドさん若しあなたが」と彼は言ひ足した。「私に賛成して助力して下さるなら、私はあなたの關係してゐると云ふ事を、誰にも知らさないように事を運びます。尤も私があなたにお願いし度いのは、只マリヤの拘禁されてゐるサン・ミケレ要塞の、内部の構造と案内を調べて貰ふ丈けの事です。あなたは宮廷附建築師の資格を以て、比較的容易にあの中へ入り込んで、色んな事を知る事が出来るでせうからね」

レオナルドは無言の儘驚いた様に彼を見詰めた。此の試験する様な視線に會ふと、ニココロ氏

は突然不自然な、険しい、殆ど毒々しい位な聲でからく／＼と笑つた。

「まさかあなたは」と彼は叫んだ。「私が餘計な感傷主義や騎士的な義侠心の爲めに、こんな事を考へ付いたなどと思ひにならないでせう！ ツェーザルがあんな娘を誘惑しようとしまいと、私に取つては勿論風馬牛です。では何の爲めにこんな骨を折るかとお訊ねなんですな？ それにフロレンスの元老達に、私だつて道化者の役廻り以外に、何か役に立つ事があると云ふ事を、證明する爲めだと思ひになつても構ひませんよ。それに第一何か氣の紛れる事がなくちや仕方がありませんよ。人生と云ふものは、時々わざと馬鹿な事をしなければ、退屈の餘り不具になつて了ひますよ。私だつてべちやくちやく喋つたり、骰子勝負をしたり、女郎屋へ通つたり、フロレンスの羊毛商人共に、要もない報告を書いたりするのは飽き／＼しましたからね！

そこで私は此の事件を考へ付いた譯なんです。これだつて單なる言葉ではなくつて、實行ですからねえ！……それに機會を逸するのも残念です。實際此の計畫は此の上ない巧妙な策略に充ちてるんですよ！

彼は何か言ひ譯でもする様に、急ぎ込んでかう言つた。併しレオナルドにはもう分つてゐた——ニココロはいつもの癖として、恐しく自分の善良な性質を恥ぢて、皮肉の假面でそれを隠さうとしてゐるのであつた。

「ニココロさん」と畫家は對手を押し止めた。「何うか此の事件に就いて、私をもあなた御自身と同じ様に當にして下さい——但し一つ條件があります。それは失敗の場合には私もあなたと同様に責任を持つと云ふ事です」

ニココロは感動したらしい様子で彼の握手に答へた。そして自分の計畫を述べ始めた。

レオナルドは別に異議を挟まなかつたが、心の底では此の計畫が餘りに微妙で狡智に充ちて、殆ど現實と思はれない位なので、果して實行に於ても言葉の上と同じく容易だらうかと、危惧の念を抱かずに居られなかつた。

マリヤの救助は十二月の三十日、即ちツェーザルのファノ町出立の日と定められた。

丁度その二日ばかり前、夜遅くなつて買収された牢番の一人が駈けつけて、密告の恐れがあると云ふ事を知らせた。ニココロは家に居なかつたので、レオナルドは彼を探しに町へ出掛け

た。

長い事方々探した後とある賭博者の巢窟で、彼はフロレンス共和國の祕書官を探し當てた。それは主にツェーザルの軍隊に勤めてゐる西班牙の破戸漢の團體が、初心な賭博者の金を巻上げる處であつた。

若い放蕩者や暴れ者などのサークルで、マキアエリは有名なベトラルカの短詩を説明してゐ

た。

ラウラの爲めに心臓の眞中を打たれし彼は――

そして一語々々に猥雑な意味を發見して、ラウラはペトラルカに佛蘭西病を感染させたなどと主張し乍ら、聽手を笑ひ轉げさすのである。

隣の室から男の叫び聲や、女の魂切る様な悲鳴や、卓の顛覆る音や、劍の憂々と鳴る響や、皿が破れたり金が散亂する音などが聞えた。不正師が見付かつたのである。人々はニココロを棄て、物音のする方へ駆け出した。レオナルドはマリヤの事件について、重大な報知を傳へ度いと彼に囁いた。二人は外へ出た。

それは静かな星月夜であつた。たつた今降つたばかりの處女の様な雪は、足許でぎし／＼と鳴つた。息苦しい賭博室から出たレオナルドは、香ばしい様に思はれる凍つた空気を、さも氣持よさうに吸つた。

密告の話を聞くとニココロ氏は、思ひ掛けなく暢氣さうな調子で、當分何も心配する事はないと極めて了つた。

「私をあゝ恐しい巢窟で見付けた時、あなたは嚇吃驚したでせうね？」と、彼は畫家に向つてかう言つた。「フローレンス共和國の祕書官が、宮廷附の有象無象の爲めに、殆ど道化の役を勤めいゝですからね！」

ニココロのかうした言葉の中には、自己に對する極度の残忍さが響いてゐたので、レオナルドは堪らなくなつて彼を押留めた。

「それは間違つてゐます！ 何故あなたは自分の事をそんなに仰有るんですか、ニココロさん？ 私はあなたの親友で、世間の人と同じやうな批判はしないんです。それがあなたに分らないのですか？」

マキアゾリは顔を背けた。そして暫く無言の後、急に變つた聲で靜かに言葉を續けた。

「分つてゐます……何うか怒らないで下さいレオナルドさん！ 何うかすると餘り胸の中が苦しい時は、泣く代りに冗談を言つたり笑つたりするんです……」

彼の聲は途切れた。彼は首を垂れ乍ら一層小さな聲でかう言つた。

「それが私の運命なのです。私は不幸な星の下に生れました。私と同年輩の思ひ切つて下らない連中が、あらゆる方面で成功して、豐滿と名譽の中に暮し乍ら、金と權力を獲てゐるのに、私は一人馬鹿者共に磨り耗らされて、一番びりつこに取殘されて了ひました。皆は私を輕率な人

間だと思つてゐます。或はその通りかも知れません。さう、私は大なる勞苦や、缺乏や、危険を恐れませんが、併し一生涯下らない陋劣な侮辱を忍んだり、其の場々の首尾を繕つたり、端錢の爲めに心配したりする事は、全く私の性に合はないのです。併しこんな事を言つたつて仕方がない！……」彼は諦めた様に手を振つた。彼の聲の中には涙が慄へてゐた。

「忌々しい世の中だ！ 若し神様が私を懲れんで呉れなかつたら、私は今に何も彼も——仕事も、妻のマリエッタも、子供もみんな捨て、了つて（だつて）私はあれ達を苦しめるばかりなんですから、私を死んだ者と思つたらいいのです。世界の端へ逃げて行きます。そして何處か人の知らない穴の様な處へ隠れて、市役所の書記にでも傭はれるか、それとも田舎の學校で子供にアルファベットでも教へませうよ。何故と云つて老耄れて意識が無くならない中は、餓死しない爲めにそんな事でもしなきゃなりませんからね。ねえレオナルドさん、自分は力もあるし、又何かする事も出来ると感じ乍ら、遂に何一つ仕出來さないで、無意味に亡びて了ふだらうと自覺する位、恐しい事はありませんよ！……」

一三

時は過ぎて行つた。所がマリヤ救助の日が近づくに従つて、ニココロは自信ありげな口振りに

も拘らず、妙に意氣地がなくなつて、不注意に躊躇したり、無意味に周章てたりした。それはレオナルドの目に付く程であつた。畫家は自分の經驗から推して、マキアエリの心中を察する事が出來た。それは決して臆氣がさしたのではない。愈々狐疑逡巡する事なく斷乎として決行しなければならぬと云ふ最後の瞬間に當つて、實行家として生れて居ない人の心に生じ易い、不可解な弱々しい不決斷と意志の叛逆である。かうした心持はレオナルド自身にもよく覺えがあらるのであつた。

愈々と云ふ日の前夜ニココロは、マリヤ逃亡の準備を終へる爲めに、サン・ミケレ城の隣村へ赴いた。レオナルドは翌朝其處へ行く手筈になつてゐた。

一人切りになると、彼は今か今かと悲しい報知を待つてゐた。今は此の計畫が子供の惡戯と同じ様に、馬鹿々々しい失敗で終ると云ふ事を、彼は少しも疑はなかつたのである。

冷たい冬の曉は窓に白んでゐた。戸を叩く音がした。畫家が扉を開けると、ニココロは蒼白い顔をしてがっかりした様に入つて來た。

「駄目になつて了つた！ 疲れた様子で椅子に腰を下ろし乍ら、彼はかう言つた。

「私もさうだらうと思つてゐました」レオナルドは驚きもせずにかう言つた。「何れ捕まるだらうと、私は前から言つてたぢやありませんか」

マキアゼリは放心した様に彼を眺め乍ら、

「さうぢやないのです」と彼は言葉をついだ。「我々は捕りやしません、鳥が籠から逃げ出しちやつたのです。遅れたんです……」

「逃げ出したとは？」

「かうなんです。今日夜明前にマリヤが喉を斬られて、牢屋の床の上に倒れて居るのが見付かつたのです」

「下手人は誰ですか？」と畫家は訊いた。

「分らないのです。併し傷口の工合から見ると、何うもツェーザルぢやなささうです。他の事は兎に角として、かう云ふ事に懸けては王や部下の首斬人共は名人ですからね、あんな子供の喉を切る位もつと上手に出来た筈です。人の話ではマリヤは處女として死んださうですから、私の考では自分で……」

「そんな事がある筈は無いです！ マリヤの様な女が……だつてあの女は聖者と言はれてゐたのぢやありませんか……」

「何んな事だつて有り得ますよ」と、ニコロは語を次いだ。「あなたはあの連中をよく御存知ないのです！ あの悪黨は……」彼は一寸言葉を切つて顔を眞蒼にしたが、やがて押へ切れぬ

憤激の發作に驅られてかう言ひ切つた。「あの悪黨は何んな事だつてやり兼ねませんよ！ 屹度あの聖人の様な娘さへ、自殺せずにおられない様な目に會はせたのでせう……以前」と彼は言ひ足した。「未だそれ程監督が嚴重でなかつた頃、私は二度ばかりあの女を見た事があります、まるで草の葉の様に瘠せて細りして、顔など子供の様でした。疎い髪は亞麻の様に明るい色をして、丁度ベルナルド聖者の前に出現したと云ふ、フロレーンスのパヂヤに在るフリッピーノ・リッピの描いた聖母の髪にそっくりなんです。併し格別これと云ふ程美しくはなかつたですよ。一體何う云ふ譯でツェーザルが夢中になつたのでせう……あゝレオナルドさん、あの女が何んなに憐れな愛すべき子供だつたか、それがあなたに分つたなら……」ニコロは顔を背けた。畫家は彼の睫に涙が光つた様に感じられた。

けれど直ぐ我に返つて、鋭く高い聲で言葉を結んだ。

「私は何時もさう言つてたのですが、正直な人間が宮廷に仕へるのは、魚がフライ鍋の中へ入るのも同じ事です。私はもう澤山です！ 私は暴君の奴隸となる様に出てないんですから、愈々此處で元老院に運動して、何處か外の國へ使者にやつて貰ひます——なに何處だつて構ひません、只此處から少し離れてさへ居ればいゝのです！」

レオナルドはマリヤを憐れんで、彼女を救ふ爲めには何んな犠牲を拂ふのも厭はなかつたも

のを、と云ふ様な心持がした。けれどそれと同時に深い／＼心の奥底では、やれ／＼もう今後直接行動の必要はなくなつたと云ふ風な、解放されたやうな心持が潜んでゐた。彼は何れニッコロ氏も、同じ心持を経験してゐるに相違ないと想像した。

一四

十二月三十一日の拂曉、ツェーザルの主力たる約一萬の歩兵隊と二千の騎兵隊とは、フッノの町を出發した。そしてシニガリヤ街道に沿うて、メタヴル川の岸に陣を敷いて王を待設けた。ツェーザルは占星術師ブルグリオに定められた、翌三十一日に出發する筈になつて居た。

ツェーザルと和を結んだマジオネの同盟諸侯は、ブレンチノ王との協約に依つて、直ちに協力してシニガリヤの町を攻撃した。町は間もなく降伏したが、城塞司令官はツェーザル以外の者には、決して城門を開かないと宣言した。ツェーザルの元の敵で今の同盟者たる諸侯は、最近何となく良からぬ事が起りさうに感じられたので、彼との會見を避ける様にしてゐた。けれどツェーザルは今一度彼等を欺いて安心させた。其の後マキアエリの言つた言葉を借りると、「丁度美しい歌で餌食を招き寄せる怪龍ワウリスグの様に、愛撫を以て彼等を魅了した」のである。

好奇の念に燃えるニッコロはレオナルドを待ち切れないで、直ぐ王の後を追つて出發した。幾

時間かの後、畫家は唯一人宿を出た。

道路は先日ペザロを出た時と同じ様に、海の直ぐ傍を通つて居た。左側は山であつたが、何うかすると山裾が近々と海に迫つて、やつと通り道だけの狭い空地が残つてゐるのみであつた。

それは灰色をした静かな日で、海も空と同じ様に灰色に澄んでゐた。そよとも動かぬ空気が睡たげに凍つて、鴉の啼聲は雪溶けを豫報してゐた。あるか無きかに落ちる雨粒や、溶けた雪の滴と共に、早くも黄昏が降りて來た。

やがてシニガリヤの赤黒い煉瓦の城塞が現れた。まるで良の様に、水と山と二つの障壁に押し狭められた町は、平坦な海岸から一哩、アベニ山の麓から弩弓いしやの射距離ほどの處にあつた。道路はミザ川に達すると急に左へ曲つて、此處には一つの橋が斜はひに川に懸つてゐて、その眞向ひが町の城門であつた。門の前には小さな廣場があつて、如何にも町端らしい低い小さな家が並んでゐた——それは主にゼニス商人の倉庫であつた。

當時シニガリヤは半亞細亞風の大市場で、伊太利の商人が土耳古人や、アルメニヤ人や、希臘人や、波斯人や、黒山モンテネグロ地方やアルバニヤ邊のスラヴ人と貨物の交換をする所であつた。併し今ではキブラ、ザンテ、カンデイ、ケフ、フロニヤなどと云ふ一番繁華な通りさへも、がらんとしてゐた。レオナルドは兵士より外に、何者の姿をも認めなかつた。町の兩側には丸天井造り

の商店や、倉庫などが果しもなく長い單調な列を作つてゐたが、その中には掠奪の跡が見受けられた——窓の硝子は壊され、錠前や門は扨ち切られ、戸は碎かれ、商品の箱はそこら中に投げ散らされて居た。邊りにはききな臭い匂ひが漂つて、半ば焼け失せた建物は未だぶす／＼煙を立てゝゐた。そして方々の古い煉瓦建の宮殿の角々には、把火を立てる太い鐵の環に、絞首になつた者の死骸がぶら下つてゐた。

もう暗くなり掛つた頃、深い濠に圍まれた、銃眼嚴めしい頑丈な圓いシニガリヤ城と、ドッカレ宮殿の間に挟まれた町の中央廣場で、レオナルドは把火の光に透して、軍隊に取巻かれたツェーザルの姿を見た。彼は掠奪の罪を犯した兵士を死刑に處してゐる所であつた。祕書官のアガピトが宣告文を読み上げてゐた。やがてツェーザルの合圖に依つて、被告達は絞首臺の方に曳いて行かれた。

畫家が群衆の間に目を配り乍ら、此處で何事が起つたかを訊くのには都合のいゝ、宮廷付の人が誰か居ないかと探してゐる中に、ふとフローレンスの祕書官が目に入つた。

「あなた知つて居ますか？ 聞きましたか？」ニッコロ氏が彼に向つてかう訊ねた。

「いや何も知りません、だからあなたに會つたのを悦んでるのです。話して聞せて下さる」マキアエリは彼を隣の町へ連れて行つた。それから雪が山の様に積み上げられた、狭くて暗

い横町を幾つか通り抜けた後、町外れの海岸へ出た。其處の造船場に近い、櫓の曲つた、淋しい一軒家に住んで居る船大工の後家から、ニッコロは小さな室を二つ借りた——一つは自分の爲め、今一つはレオナルドの爲めであつた。彼は今朝散々探し廻つた擧句、やつと此處に空間が一つ目付かつたのである。

ニッコロは無言の儘忙しげに蠟燭に火を點けて、行軍用の食器箱から葡萄酒の壘を取出し、燧爐に薪をくべて、燃える様な視線をちつと對手に注ぎながら、レオナルドの眞向ひに座を占めた。

「ちや、あなたは未だ知らないんですか？」と彼は物々しい調子で口を切つた。「お聴きなさい、實に容易ならぬ記憶すべき事件が起つたのです！ ツェーザルは自分の仇敵に對して立派に復讐しました。陰謀者の群は全部捕まつて、オリゼロットも、オルシニも、ギッテリも今は死を待つばかりなのです」

彼は椅子の背にぐつと凭れ懸り乍ら、對手の驚きを楽しむ様に、ちつと無言にレオナルドの顔を見詰めた。やがて遠い昔の出來事を述べる年代記者か、それとも自然の現象を記す學者のやうに、冷靜無私の様子を装はうと、一生懸命自己を抑制し乍ら、有名な「シニガリヤの係蹄」と稱せられる事件を物語り始めた。

朝早くメタヴル河畔の陣地へ到着すると、ツューザルは先づ二百人の騎兵と歩兵隊を先へ遣つて置いて、その跡から残りの騎兵を引率^{ひきつ}れて出發した。彼は同盟諸侯が自分を迎へに出ると云ふ事と、諸侯の主力軍はツューザルの軍の入り場^{はひ}場所を空ける爲めに、市外の城塞へ遠だけられて居ると云ふ事を、ちやんと承知してゐたのである。

道路が左へ外れてミザ河の岸に沿うて走り始める、シニガリヤ門の傍まで近付いた時、彼は騎兵隊に止めと命令して彼等を二列に並べて、その間に歩兵の爲めに狭い道路を残した。歩兵は立止る事なしに橋を渡つて、シニガリヤ門の中へ入つて行つた。

ギテロツツォ・ギッテリ、グラニナ・オルシニ、バゴロ・オルシニの同盟諸侯は多くの騎士を引率^{ひきつ}れて、驟馬に跨り乍ら迎へに出た。ギテロツツォは自分の滅亡を豫感した様に、妙に打沈んだ顔付をして、以前彼の幸福な境遇と勇敢な氣象を知つてゐた人々は、彼を見て驚いた程である。其の後人々の噂に依ると彼はシニガリヤへ出發すると言つて家族の者に別れを告げた時、蟲が知らせたと云ふのか、まるで死に行く様な工合だつたとの事である。

同盟諸侯は妙に臆氣づいて帽子を外り、ローマニヤ王を迎へた。彼は同様に馬から下り、自分の方から先きに手を出して順々に握手し、それから「愛すべき友」などと呼び乍ら、彼等を抱きしめて接吻した。此の時ツューザルの將軍達は兼ての手筈通り、オルシニとギッテリを取圍ん

で、彼等の一人々々が王の近臣二人宛に差挟まれる様にした。ツューザルはオリゴロットの不在に氣が付いて、部下の隊長ドン・ミケル・コレラに合圖をした。此方は直ぐに駈け出して、オリゴロットをボルゴで見付け出した。やがて彼も一行に加つて、一同は戦争の事など親しげに語り合ひながら、城塞の前なる宮殿さして赴いた。

同盟諸侯は正面玄關で暇を告げようとしたが、ツューザルは持前の人を魅する様な愛想のいゝ調子で引留めて、彼等を宮殿の中へ誘^{いざな}ひ入れた。一行が控室へ入るや否や扉はぱたりと閉つて、武装した八人の武士が四人の者に跳り蒐つて、二人掛りで一人宛の敵を捕へ、武器を奪つて縛り上げて了つた。不幸な人達は驚きの餘り、殆ど少しも抵抗しなかつたのである。噂に依るとツューザルは、其の夜の中に宮殿内の密室で彼等を絞め殺して、敵を片付けて了はうとして居るとの事であつた。

「あゝレオナルドさん」と、マキアゾリは自分の物語を結んだ。「ツューザルが諸侯を抱いて接吻する様子を、本當にあなたに見せ度かつたですよ！一寸でも怪しげな目付や舉動^{きよら}を見せたら、王の身は破滅だつたでせう、所が其の顔にも聲にも誠實の色が溢れて居るので、全く私は誓つて言ひますが、王が假面を被つてゐるのだとは、最後の一瞬間まで夢にも疑はなかつたですよ。私の考へでは、これは外交術が始まつて以來、世界ちうに行はれたありと有らゆる權謀の中で、

最も見事な物だと思ひます！」

レオナルドは薄笑を洩した。

「勿論」と彼は言つた。王の大膽さと巧妙さとは否定する譯に行きませんが、併しそれでも正直な所、私は政治の方に殆ど無關係なので、一體何う云ふ譯でああなたが此の裏切りに、さう迄感心なさるか、合點が行かないですよ」

「裏切ですつて？」とマキアゾリが遮つた。「だつて事が國家の死活に關する様の場合、裏切だの誠實だの、善だの惡だの、慈悲だの残酷だのと云ふ事は、全然問題にならないぢやありませんか。方法は何うであらうと同じです、只目的さへ達しければいゝんですよ」

「何うしてこれが國家の死活問題でせうニ、コロさん？ 私に言はせれば、王は單に自己一身の利益を慮つたに過ぎない様ですが……」

「え？ あなたも——あなた迄もそれが分らないのですか。これは火を踏む様に明瞭な事ぢやありませんか！ ツーザルは未來の伊太利統一者です、獨裁君主です。あなたには分らないのですか……今の様に英雄の出現に都合のいゝ時は、外に決してありません。モーゼが奮起する爲めには、イスラエルの民は埃及の奴隸として苦しまねばならなかつたし、キルス王の偉大ならしめる爲めには、波斯人はミチヤの桎梏の下に悩む事が必要であり、テゼヴスの譽れを上げ

る爲めに、雅典は内亂に内亂を重ねて、滅亡の淵に瀕しなければならなかつたとすれば、丁度それと同様今日我國に於ても、祖國の救済者たる新しい英雄の出現を見る爲めには、伊太利は目下の如き汚辱の淵に沈んで、猶太人にも劣つた奴隸状態を忍び、波斯人にも優つた桎梏を受け、雅典人より恐しい不和内訌を経験すべきでないでせうか？ 元首も無く、指導者もなく、政府もなく、夷狄の爲めに國土を蹂躪され荒廢されて、國民として忍び得る、有りとあらゆる災禍を、忍ぶべきではないのでせうか！ 以前にも幾度か希望の光が閃めいて、神に選ばれたかと思はれる様な人々が現れたけれど、運命は常に光榮の絶頂で、偉大なる功業を成就しようと思ふ間に彼等に裏切りました。かうして半ば死んだ様に氣息奄々たる伊太利は、自分の傷を醫して呉れる人を待つて居るので——ロムベルヂヤに於ける暴行や、トスカナ、ナポリに於ける掠奪や苛斂誅求を絶滅し、古くなつて化膿した惡臭鼻を突く様な傷口を治療して呉れる人を待ち兼ねてゐるので。日となく夜となく神に祈つて、救ひ主の到來を願つてゐるので……」

彼の聲は丁度張り過ぎた絃の様に響いたが、急にぶつりと切れて了つた。彼は蒼い顔をして、聲は慄へ、目はぎらりと輝いた。併しそれと同時に此の思ひ掛けない興奮の中には、何となく病的發作に似た痙攣的な、弱々しい所が感じられた。レオナルドは、彼が二三日前マリヤの死に關して、ツーザルを「惡黨」と呼んだ事を想ひ出した。畫家は此の矛盾を彼に指摘しな

つた。それは今ニコロはマリヤに對する哀憐の情を、恥づべき心弱さとして否定するに相違ない、と云ふ事を承知してゐたからである。

「長生きをすれば分るでせうよ、ニコロさん」とレオナルドは言つた。「併し一つお訊ねし度いのは、何うして今日に限つてツューザルが神に選ばれた人だといふ事を、さうはつきり信じたのですか？ それともシニガリヤの係蹄がすべての彼の過去に於ける行爲に優つて、明瞭に彼が英雄だといふ事を證明したのですか？」

「さうです」もうすつかり自制力を恢復して、再び冷靜を装ひ乍らニコロは答へた。「此の奸計の手際の鮮かさは、ツューザルの過去に於ける一切の行爲より雄辯に、彼が人間として珍しく偉大な相反せる二つの性質を、一致させてゐる事を證明して呉れます。お断りして置きますが、私は讚美してゐるのでも非難してゐるのでもありません、只研究してゐるんですよ。私の思想はかうなのです——如何なる目的にもせよ、これを貫徹するには、合法的と強壓的と二つの實行方法があります。第一の方法は人間的で、第二の物は野獸的です。他に君臨せんと欲する者は、此の二つの方法を會得しなければなりません——つまり自分の望みに依つて、人間になつたり獸になつたりする能力が要るのです。アキレス王や其の他の英雄が半神半獸の半人半馬ヘミタウロス、キロンに養はれたと云ふ古い譬へ話には、かう云ふ隠れた意味があるのです。キロンの養ひ兒たる王達は、

で、親と同じ様に獸と神の兩性を、自分の一身に結合させてゐるのです。普通の人間は自由を堪へ忍ぶ事が出来ないで、死以上にそれを恐れるものだから、罪を犯すと、悔悟の重荷の下に倒れて了ひます。たゞ運命に選ばれたる英雄のみは、自由を堪へ忍ぶ丈けの力を有つて居るから、神や獸と同じ様に惡の中に無垢を保ち乍ら、良心の苛責も恐怖も無しに、法律を踏み越える事が出来るのです。今日私は始めてツューザルの中に、此の最後の自由を見ました——選ばれた人の印しるしを見ました！」

「さうですか。ニコロさん、今こそあなたの言はれる事が分りました。」深い物思ひに沈みながら畫家は口を開いた。「併し私の考へでは、自由な人と云ふのは、ツューザルの様に何物をも知らず且つ愛しない爲めに、あらゆる事を敢行する人間ではなくて、知り且つ愛するが故に敢行する人だと思ひます。只かうした自由な愛に依つてのみ、人間は善も惡も天も地も、一切の障壁も、地上の限界も、一切の重みも征服して、神の如くなり得るのです……飛び得るのです……」

「飛ぶんですつて？」とマキアエリは驚いた。

「人間が完全なる知識を獲た時には」とレオナルドは説明した。「彼等は翼を創造します、飛行の機械を發明します。私は随分長い間此の事を考へました。或は何等の結果も生じないかも知れませんが、ナニ同じ事です。私が駄目なら他の人がやります——人間の翼は出來ますよ！」

「いやお目出度う」と、ニコロはからりと笑つた。「到頭翼の生えた人間の話まで喋り着きましたよ。私の半神半獣の皇帝も、鳥の様な翼が出来たら嚇面白いでせうね。それこそ本當の怪物だ？」

隣の哨樓で鳴る時計の音に耳を澄し乍ら、彼は飛び上つて周章て出した。彼は目前に迫つた陰謀者達の死刑の模様を訊く爲めに、宮殿へ駆け付けねばならなかつたのである。

一五

伊太利の君主達はツューザルに「見事な奸計」の祝辭を述べた。ルイ十二世はシニガリヤの係蹄の報知を聞いて、「古羅馬人にも匹儔すべき功績」と稱した。マンチュア公妃イザベラ・ゴンザガは、間近に迫つた謝肉祭用として、色様な絹で作つた假面百個をツューザルに贈つて來た。「淑徳隠れなき妃殿下よ、敬愛する姉妹よ」と王は彼女に答へた。「御惠贈下され候假面百個正に落掌、世に珍しき美しさ形の面白さは何よりも嬉しく存じ奉り候。殊に此の上なく好都合なる時と場所に到着致し候は、さながら妃殿下が子の行動の意味と順序とを、豫め御承知有之かの如く、洵に有難く存じ候。余は神の御恵みに依り一日の中に、シニガリヤの町と地方一圓並に城塞全部を占領し、予の敵にして奸譎なる反逆者全部に正當なる刑罰を下し、カステロ、フエ

ルモ、チステルナ、モンテネ、ベルジオの諸州を暴君の桎梏より解放して、基督の太守たる法王に信服せしめ申候、是等の假面は予に對する妃殿下の隔てなき好意の偽りならぬ證明として、何よりも快く存ぜられ候」

ニコロは笑ひながら、あらゆる欺瞞と虚飾の名人たるボルジアの狐に、ゴンガザの狐から贈るものとしては、此の假面百個に勝るものを想像する事が出来ないと云つた。

一六

千五百三年三月上旬、ツューザルは羅馬へ歸つた。法王は此の稀世の英雄に對して、教會が其の守護者に與へる最高の勳章たる、黄金薔薇章を授けようと内閣員に提議した。内閣員達もこれに同意したので、二日の後式を舉行する事に定められた。

グチカン宮殿の第一階、エリゴデレの庭に向つて窓を附けた大僧正の廣間に、羅馬法王宮の廷臣一同并に諸大國の使臣が集つた。

高價な寶石を輝かせ、三重の王冠を頭に戴き、孔雀の羽毛の扇で左右から煽ぎ立てられ乍ら、法王アレックスサンド六世は玉座の階段を昇つて行つた——人の好ささうな美しい、莊重な顔付をした、よく肥つて元氣のいふ七十歳の老人であつた。

先觸れの喇叭が鳴り響くと、侍従長たる獨逸人ヨハン・ブルクハルドの合圖に依つて、ツューザルの武器持ちや、小姓や、扈從や、護身兵などが廣間へ入つて來た。最後に軍司令官のバルトロメオ・カプラニカが、羅馬教會の聖旗手の徽たる拔身の劍を、双先を上へ向け乍ら捧げて來た。

劍は下の方三分の一ばかり金鍍金になつてゐて、様々な模様が細かく彫り付けられてあつた——誠實の女神が「誠實は武器より強し」と云ふ題銘を録した臺の上に坐つてゐる所や、ジュリウス・シーザアが「ケーザルか無か」の銘を録した凱旋車に乗つてゐる所や、「賽は投げられたり」と云ふ題銘のあるルビコン渡河の圖などで、最後にボルジア家の表徴たる神牛アピスに、犠牲を捧げてゐる所であつた。若い裸の祭司達は、たつた今殺されたばかりの人間の犠牲に香を焚いてゐる。祭壇には「最も善にして偉なる神に捧ぐる犠牲」、それから少し下の方には「ケーザルの名はケーザルの幸福なり」と云ふ銘が彫つてあつた。此等の繪と題銘とは、丁度ツューザルが羅馬教會神聖軍指揮官、及び聖旗手の劍を奪ひ取る爲めに、兄ジオヴァンニ・ボルジアの殺害を企らんでゐる時に注文された事を聯想すると、野獸の神に人間の犠牲を供へるといふ事實が、一層恐しい意味を帯びて來るのであつた。

此の劍の後からツューザルが続いて進んだ。彼の頭には眞珠で作つた聖靈の鳩を飾りとした、高い王冠が載つて居た。彼は法王に近付き、冠を取つて跪き、法王の上靴についた紅玉の十字架を接吻した。

内閣員のモンレアレは彼に黄金の薔薇を渡した。それは寶石細工の奇蹟とも云ふべもので、眞中にある一番大きな花の黄金の花弁の中に、小さな壘が隠されて居て、その中から香膏が滴り出して、丁度無數の薔薇の呼吸のやうな香りを邊りへ放つのであつた。法王は立上つて、感激に慄へる聲でかう言つた。

「愛する我子よ、天地二つのエルサレム、戦へる教會と勝誇れる教會の悦を表徴する、此の薔薇を受取るがよい。これは正しき者の幸福と、朽ちざる冠の美を示す言葉に盡し難い花である。四方の岸に生ひ立つ薔薇の花の如く、おん身の徳も基督の中に咲匂ふ事を望む、アーメン」

ツューザルは神祕の薔薇を受取つた。此の時法王は遂に堪らなくなつた。實見者の言葉に依ると「肉身の情が彼に打勝つた」のである。彼は屈み込んで慄へる手を息子の方へ差し伸べ乍ら、儀式の順序を亂して了つて、虚飾家の獨逸人ブルクハルトを憤慨させたのである。彼の顔には皺が寄つて、肥えた體はゆらくと揺いだ。厚い唇を突き出して、老人らしく咽せ返りながら彼はかう呟いた。

「可愛い子……ツューザル……ツューザル……」

王は神聖なる薔薇を、傍に立つてゐた内閣員クレメン^テに渡さなければならなかつた。法王は突發的に息子を自分の胸に抱きしめて、泣いたり笑つたりするのであつた。再び先觸れの喇叭が響いて、聖ペテロ寺院の鐘が鳴り出した——と羅馬中の教會の鐘が一齊にこれに和して、聖天使の要塞からは祝砲の音が轟き渡つた。

「ツューザル萬歳——エルエデレの庭に立つてゐる、ローマニヤ師團が歡呼の聲を揚げた。王はバルコンへ出て軍隊に姿を見せた。

瑠璃色の空の下に旭日の光を受けて、金や緋の王服に身を包まれ、眞珠で作つた聖靈の鳩を頭上に戴き、二つのエルサレムの悦びを表はす神祕な薔薇を手にした彼は、群集の目に人間でなくて神の様に映つた。

一七

夜は聖旗手の劍の畫に象つて、ジュリアス・シーザアの凱旋を表はした壯麗な假面行列が催された。

「神の如きツューザル」と録した戦車の上には、棕櫚の枝を手にし月桂樹を頭に卷いた、ローマニヤ王が悠然と坐してゐた。古代羅馬兵の服裝をした兵士等が、鐵の鷲や槍の束を持つて戦車

を取巻いてゐる。すべては書物や、記念碑や、浮彫や、メダルなどに基いて、正確無比に象られてあつた。

戦車の前には埃及の僧侶の様な、長い白い着物をつけた男が、手に聖旗を捧げ乍ら進んだ。その旗には純金で張つたボルジャ家の表徴たる神牛、法王アレクサンドル六世の守護神たる牡牛が描かれてあつた。銀の上衣を纏つた少年等は鼓を鳴らし乍ら唱つた。

牡牛に榮あれ！ 牡牛に榮あれ！ ボルジャの家に榮あれ！

それから又群集の上を高く星空に擡で乍ら、さながら旭日の如く赤い獸の巨像が、把火の光に照らされてゆらくと揺いでゐた。

群集の中にはたつた今フロレンスから羅馬へ着いたばかりの、レオナルドの弟子チオヴンニ・ベルトラフィオが交つてゐた。彼は眞紅の牛を見乍ら、黙示録の言葉を想ひ出した。

「又其獸を拜し曰ひけるは、誰か此獸の如き者あらんや、誰か之と戦ひをなし得るものあらんや。

「われ絳き色の獸に乗る婦を見たり、此獸あまねく體に僭妄の名あり。又七つの首と十の角あり。

「その額に名を記せり。云く奥義、大いなるベビロン、地の淫婦と憎むべき者との母。」

チオヴンニは嘗て是等の言葉を記した豫言者と同じ様に、此獸を見乍ら「偉大なる駭きを驚いた」のである。

二六二

第十三編 眞紅の獸

一

レオナルドはフロレンスに近いフィエゾレの丘に、一つの葡萄園を有つてゐた。その僅かな地所を横領しようと思つて、近隣の地主が訴訟を起した。當時ローマニヤに住んで居た畫家は、此事件を弟子のチオヴンニ・ベルトラフィオに一任したが、千五百三年三月の終りに羅馬へ呼び寄せた。

途中チオヴンニはオルギエットへ立寄つて、つい近頃出来上つたばかりの有名なルカ・シニオレリの壁畫を、中央寺院で見物したが、その中の一つは反基督の到來を描いた物であつた。

反基督の顔はチオヴンニを驚かした。始めは凶惡な顔に思はれたが、ちつと見詰めてゐる中に、それは決して凶惡な顔ではなくて、たゞ無限の苦惱を湛へてゐる許りであつた。重々しい而もつつまじげな表情を帯びたその明らかな目には、神を否定した知識の深刻な絶望が浮んでゐた。サタイヤの様な尖つた醜い耳や、獸の爪の様に曲つた指を持つてゐるにも拘らず、彼は

猶美しかつた。ふと此顔の陰から、恐しい程よく似通つた神の顔が、デオヴンニの目前に現れた。それは嘗て熱に浮されてゐる、彼の夢に現れたものと同じであつたけれど、彼はそれをはつきり、さうと言ひ切る勇氣がなかつた。

同じ繪の左側には反基督の最後が描かれてあつた。自分が「人の子」であつて、生者死者を審判く爲めに雲に乗つて來たものだ、と云ふ事を證明しようと思つて、神の敵は目に見えぬ翼に乗つて天へ翔け上つたが、天使の爲めに打破られて、無限の淵へ墮ちて行く處であつた。此の不成功に終つた飛行、人間の翼などと云ふ事がデオヴンニの心に、又何時ものレオナルドに關する想念を呼び起したのである。

デオヴンニと一緒に壁畫を眺めてゐる人が未だ二人あつた。一人は五十ばかりの肥つた僧侶で、今一人はその伴侶であつた。年の頃幾つ位とも判然しない瘠せたひよろ長い男で、空腹じさうな癖に愉快さうな顔付をしてゐた。その服装から見ると、昔ゾガントともゴリヤルドとも呼ばれた放浪の書生らしかつた。

彼等はデオヴンニと近付になつて、一緒に旅を始めた。僧侶は名をトマス・シュヰイニツと云ふ、ニューレンベルク生れの獨逸人で、アウグステン派の僧院で圖書掛りを務めてゐる學者であつたが、寺祿に關する争ひを解決する爲めに、羅馬へ出掛けて行く所であつた。伴侶の男も矢張

リザルツブルク市生れの獨逸人で、名をハンス・プラーテルと云ひ、彼の爲めに書記ともつかず、道化とも付かず馬丁ともつかぬ役目を務めてゐた。

途々三人は教會の事を話し合つた。シュヰイニツは科學的に明晰な落着き拂つた論法で、法王の神聖不可侵を強ひる獨斷の無意味さを論證し乍ら、今後二十年と經たぬ中に獨逸全國が奮ひ起つて、羅馬教會の鞭を抛つに相違ないと斷言した。

「此男は決して信仰の爲めに死ぬ様な事はない」ニューレンベルグの僧の食ひ肥つた、圓々した顔を眺め乍ら、デオヴンニはかう考へた。「あのサブナローラのように火の中に飛び込んだりなぞしやしない。併し事に依つたら、此の方が教會に取つてもつと危険かも知れない」

羅馬へ着いた後、ある晩デオヴンニは聖ピエトロの廣場で、ハンス・プラーテルに出會つた。放浪の學生は近所のシニバルデイ横町へ彼を引つ張つて行つた。其處には外國から來た巡禮者を目當てに商賣してゐる、獨逸人の宿屋が澤山あつたが、その中に一軒銀の針鼠の看板を出した、小さな地下室の酒場があつた。その亭主のヤン跛足と云ふチニク人は、好んで自分の一味同腹の者を歓迎して、上等な酒を振舞ふのであつた。一味同腹といふのは外でもない羅馬法王の祕密の敵で、教會の大改革を翹望し乍ら日に／＼數を増して行く自由思想家であつた。

ヤンの店では一般の來客に宛てられた第一の室の次に、特別の祕密室があつて、そこへは選

ばれた人のみが通される事になつて居た。今此室では一大會議でも催されてゐる様な光景を呈してゐた。トマス・シュヰイニツツは卓の上座に坐つて、太い手を肥えた腹の上に組合せながら、樽に背を凭せ掛けて居た。むく／＼と二重顎になつた彼の顔はちつと据つて、小さな目はしよぼ／＼して居た。屹度飲み過ぎたのであらう。時々彼はコツプを蠟燭の焔の邊まで差上げて、切籠の硝子に盛つた淡い黄金色のライン酒に見惚れて居た。

旅の僧のマルチノは單調な不平を並べ乍ら、頻りに法王廳の苛斂誅求を攻撃してゐた。

「まあ一度や二度の事なら我慢もしようが、いゝ加減恥と云ふものも知らなきやなりませんよ。一體あれは何事です？ 本當に此處の僧正達の餌食となる位なら、強盜の手に掛つた方が未だましですよ！ まるで白晝の強盜です！ 牢番にもやらなければならず、書記にもやらなければならず、お寝間掛りにも、馬丁にも、料理人にも、失禮な話ですが、大僧正のお妾の家の肥取りにまでやらなきやならないんですからね！ 丁度あの歌に言つてある通りですよ——

新しきユダよ、彼等は基督を賣すものなり。

ハンス・プラーテルは立上つて莊重な顔付をした。そして一同が沈黙して視線を彼の方へ注いだとき、彼は教會の讀經を眞似て聲を引き乍ら言ひ出した。

「ある時法王の所へ弟子の僧正達が参りまして、自分等が救はれる爲めには何うしたらよいか

と訊きました。するとアレクサンドルの答へますには、「わしに其様な事を訊いて何になる。それは聖典にちやんと書いてあるではないか。つまり心の底から、靈の底から金銀を愛し、己れ自らの如く富める者を愛するのだ。さうすればお前達は生を得る事が出来る」それから法王は玉座に着いて更にかう言つたのであります。「財を有する者は幸なり。何となれば我顔を見得ればなり。喜捨を捧ぐる者は幸なり。何となれば我子と呼べるべければなり。金銀の名に於て來る者は幸なり。何となれば法王廳の一員たり得べければなり。されど空手を以て來るものは禍なる哉。彼等は須く頸に挽臼を着けて、海へ投ぜらるるに如かず」すると僧正達は「仰せの如く致します」と答へた。法王は更に言葉を次いで、「我子等よ、わしは一つお前達に模範を示す爲めに、死者生者の區別なく搾り取つてやらう。お前等もよく見習ふがよい」と言つたのであります。」

一同はどつと笑つた。オルガン職工のオット・マルブルグと云ふ、始終子供らしい微笑を浮べた上品な胡麻鹽髪の老人は、今迄黙り込んで片隅に坐り込んでゐたが、此時衣囊から丁寧に疊んだ紙切れを取出して、人々に讀んで見ると差出した。それは最近羅馬へ着いたばかりのアレクサンドル六世に當つた諷刺詩で、もう既に多數の筆寫が手から手へ渡つて居た。それは羅馬法王の迫害を避けて、マクシミリアヌス皇帝の許へ逃げ込んだ、バオロ・サエリと云ふ貴族へ宛

てた書翰體になつて居た。その中には僧位の賣買を始めとして、ツェーザルの兄殺しや、法王の娘ルクレチヤに對する親子相姦に到るまで、羅馬法王の宮廷内で生じた一切の惡逆非道が、長い目錄のやうな工合に數へ上げられて居た。此諷刺文は歐羅巴中の皇帝君主全部に向つて、「人間の形をした是等の惡むべき野獸」を剿滅する爲めに、一致糾合する事を勧めた檄文と云ふ體裁で終つて居た。

「反基督は來れり。何となれば法王アレクサンドル六世、及び其子ツェーザルの如く兇惡なる敵が、基督の教會と其信仰の前に現れたる事嘗てなければなり」

朗讀が終つた後一同は、果して法王が反基督か何うか、と云ふ議論をし始めた。

人々の意見は區々であつた。風琴師オット・マルブルクの自白する所に依ると、此疑問は大分以前から彼に安心を與へなかつたのであるが、併し本當の反基督は法王でなくて、世間の噂通り父の死後法王となるべき、息子のツェーザルに相違ないとの事であつた。僧のマルチノは、「イエスの昇天」と云ふ本の一節を引用して、反基督は人間の姿をしてゐるけれど、實際は人間でなくて、肉體を持たぬ單なる幻に過ぎないと論證した。何故と云つてアレクサンドリアの聖者キリールの言葉に依ると、「暗の中に来りて反基督と呼ばれる滅亡の子は、サタン自らに外ならず。即ち世界に來れる此世の主天使ブリアルドなり、偉大なる蛇なり」と云ふのであつた。

トマス・シュエインツは首を振つて、

「マルチノさん、それはあなたの考へ違ひだ。ヨアン・ズロトウストも言つて居るではないか。『こは何者なりや？ サタンなるか？ 否、決して然らず。只サタンの力を悉く受け納れたる人間なり。何となれば其中に惡魔的、并に人間的の二元性存在するが爲めなり。』併し法王もツェーザルも反基督になる事は出來ない。反基督となるべき者は「處女」の子なのだ……」

シュエインツは「世の終り」と云ふイポリトの著書の一節と、「惡魔はダン族(メレスチナの)の處女に影を投ぜん。而して淫佚なる蛇はその胎に入りて、彼女は妊娠分娩すべし」と云ふエフレム・シリンの言葉を引用した。

一同は疑念を抱き乍らシュエインツを取圍んで、様々な問を發するのであつた。彼は聖イエロニム、キプリアン、イレネウス、其他多くの長老達の言葉を引用して、反基督の出現を一同に物語つた。

「或人の説に依ると、反基督は基督と同じ様にガリラヤで生れると言ふ事だが、又或人は精神的に巴比倫とか、ソドムとか、ゴモラとか呼ばれる偉大な町で生れると主張してゐる。彼の顔は狼憑きの様であるが、多くの人の目には基督の顔の様に映るであらう。さうして彼は偉大な徴を行ふのだ。海に静まれと言へば静まり、太陽に晦くなれと言へば晦くなり、山は動き、

石はパンと化すだらう。彼は饑乏たる者の腹を充し、病者、啞者、盲者、跛者を療すであらうが、併し死者を甦らすか何うか分らない。何故と云つて、第三豫言書には「甦らさむ」と書いてあるけれど、聖者達はそれに對して、疑を挾んで居られるからである。現にエフレムも「靈魂に對して權力を有せず」と言つて居る。兎に角、彼の許をさして有りと有らゆる民族が——ゴグもマゴグも（イスラエルの仇）一様に、風に吹かれて流れ集つて、陸は天幕海は帆の爲めに白くなつて了ふであらう。彼は是等の族を集めて、エルサレムなる神の殿に坐して、我こそは宇宙の實體なり、子なり父なりと宣するのだ。

「えゝ忌々しい犬畜生め！」僧のマルチノは怵へ切れないでかう叫び乍ら、拳を固めて卓を叩いた。「誰がそんな奴を信じるものか？ トマス長老、無智な幼兒でもそんな奴に欺かれはしますまい！」

シュエイニッツは又首を振つた。

「信じるよマルチノさん、多くの者が聖者の假面に迷はされて、信仰するに相違ない。何故と云つて、彼は自分の肉を殺して純潔を保ち、婦女と穢れた行ひをせず、肉食を絶ち、單に人間のみならず、ありとあらゆる生物を憐むからである。丁度森の中の鷓鴣の様に、偽りの聲を發して他人の子を誘き寄せらるだらう。「すべて重荷を負ひて勞する者よ我に來れ、我汝等に休息を

與へん」とかう彼は言ふのだ……」

「若しさうとすれば」とチオヴンニが言ひ出した。「一體誰がそれを見分けるのでせう、誰が反基督だと氣付くのでせう？」

僧正は人の心の底へ滲み入る様な深い目付で、ちつと彼を見詰めた後かう答へた。

「それは人間には不可能だ——只神のみ成し得る所だ。偉大なる聖者達でさへ見分ける事は出來ない。何故なれば彼等の睿智は濁つて思想は分裂し、光と闇の區別さへ出來ない様になるからである。かうして地上には世界創つて以來會て無い様な、人類一般の悒悶と疑惑が襲うて來るであらう。彼等は山に向つて『倒れて我等を蔽ひ盡せよ』と言ふ様になる。そして此世界に到らんとする災厄を豫想して、恐怖の爲めに斃れ始めるであらう。何故ならば天なる力が動搖して來たからである。其時天帝の殿なる玉座に坐つてゐる反基督が、『汝等は何を騒ぎ何を求めるか？ 羊の群は牧者の聲を聞分け得ないのか？ おゝ信仰なき奸譎なる人類よ！ 汝等は奇蹟を欲するのか——さらば奇蹟を與へよう。今汝等は生者死者を裁くべく、雲に乗つて來れる人の子を見得るであらう』かう言ひ乍ら、惡魔の狡智を以て作つた大きな翼を取つて、天使の姿をした弟子共に圍まれながら、雷鳴電光の中に天をさして翔けるであらう……」

チオヴンニは恐怖に充ちた、ちつと動かない目を睜つて、眞蒼な顔をし乍ら聽いてゐた。彼

はルカ・シニオレリの壁畫に描かれた、天使に追ひ落される反基督アンチクリストの着物の廣い襞を想ひ出した。それと同時に荒寥たるアルパノ山の頂きなる斷崖の縁縁に立つた、レオナルド・ダヴィンチの肩に翻る、巨大なる鳥の翼のやうな着物の襞が想ひ出された。

此時扉越しに店の間の方から（放浪の學生は餘り長たらしい學問上の議論を好かなかつたので、何時の間にか其方へ逃げて行つたのである）、叫び聲や、娘の笑ひ聲や、どろ／＼駈出す足音や、椅子の倒れる響きや、コップの破れる音などが聞えた。それは酒の廻つたハンスが、可愛い酒場の小娘に悪戯をしたのである。突然邊りがひつそりとした——屹度彼は小娘を捉へて接吻した上、自分の膝の上へ載せたのであらう。

水のせゝらぎの様な絃の響に合せて、古い歌が聞え始めた。

地下の酒場の少女子は

甘く香れる薔薇の花

Ave, ave, virgo gloriosa （光榮ある處女）

とかう私は唱ひ度い！

酒場の亭主は狐つ面の

冷酷無残な詐欺師だけれど、

それでも私は此酒場をば

教會よりもつと愛する

頭巾も珠數も刺つた頭も、

アフロディーテの愛の良、

キューピットの投矢など、

防ぐ力は無いものを。

たつた一度の接吻の爲めなら

首斬臺へも悦んで上つて行かう。

善き僧侶たる此のわしに

酒をば酌んで給らぬか。

僧正達なんか可怕くない

わしは法則そとてが何う云ふものか知つてゐる。

羅馬では黄金こがねが一度鳴りさへすれば

すべての法は、口を噤んで了ふのだ。

つまり羅馬は、追剝の巢窟なのだ。

地獄へ向ふ荆の道だ。

法王は教會の柱であるが

實は曝し者の柱だ！

さあ娘、接吻しやれ

Dum vinum potamus (お酒を飲む
でゐる中は)

ベツカス神を讃へよう。

Te Deum laudamus (神よ汝を讃へ
よなんの聖)

トマス・シュミイニツはちつと耳を傾けてゐたが、其脂ぎつた顔はさも愉快げな微笑で溶けさうになつた。彼は淡い黄金色のライン酒が火花を散らしてゐるコップを舉げて、羅馬教會に反抗して立つた最初の不平見たる、放浪の學生の古い歌に和して、黄色い虧隙の入つた様な聲で唱ひ出した。

ベツカス神を讃へよう

Te Deum laudamus !

レオナルドは聖スピリトの病院で解剖學の研究をしてゐた。ペルトラフィオはその助手であつた。

或時彼はデオヴンニが始終快々として楽しまないのに氣が付いて、何とかして其氣を紛らしてやり度いと云ふ心持から、一緒に法王の宮殿へ行つて見ようと言出した。

此時西班牙と葡萄牙とがアレクサンドル六世に向つて、最近クリストフォ・コロムブスの發見した、新領土新島嶼に関する紛擾の解決を乞うたので、法王は十年前始めて亞米利加發見の報に接した時、自分の設定した國境線を、いよ／＼明確に決定しなければならなかつた。レオナルドは此會議に招聘されてゐた。法王は多くの學者達の意見を叩くことにしたのである。

デオヴンニは最初斷つたけれど、やがて好奇心が勝利を占めた。彼は常々噂にのみ聞いてゐた事を、實地に見ようと思つたのである。

翌朝二人はプチカ宮殿へ赴いた。そして例のアレクサンドル六世がツェーザルに、黄金の薔薇を授けた大僧正の間を通抜けて、基督と聖母の間と稱せらるる謁見室へ入り、續いて法王の仕事部屋へ入つた。圓天井や迫持と迫持の間にある半圓形の明り取りは、新約聖書や聖徒傳に材を取つた、ピントリッキオの壁畫で飾られて居た。

それと並んで同じ丸天井に、畫家は異教の神話を描いて居る。ジュピターの息子で太陽の神た

るオシリスが天から降りて、地の女神たるインドと契を結び、人間に土を耕す事や、果實を集める事や、葡萄の木を植ゑる事など教へてたが、人間共は彼を殺して了つた。其後彼は甦つて地中を出で、純潔なる白牛アピスとなつて再び姿を現す所であつた。

此の羅馬法王の居間に於て新約の物語が、アピスの姿を假りたボルジャ家の金牛崇拜の畫と相隣りしてゐると云ふ事は、随分奇怪に感じられるのであつたけれども、併し同じ様に一切を浸透する生の悦びが、エホバの子とジュピターの子の二つの神祕を調和してゐたのである。細いサイプレスの若木は、淋しいウムブリヤの丘を想はず長閑な丘の間で、風に幹を撓はしてゐるし、空飛ぶ小鳥は春めかしい戀の遊びに戯れてゐる。「汝の胎より生れし者は幸なり」と云つて聖母を抱いてゐる聖エリサベスの傍では、小さな小姓が犬に後足で立つ事を教へて居るし、オシリスとインドの婚約の畫では、丁度同じ様な悪戯つ子が生鸞の鸞鳥に乗つて歩いてゐる。かうしてすべての物が一様に生の悦びに呼吸づいてゐるのであつた。すべての裝飾、花環、十字架や香爐を持つた天使、酒神の杖や果物の籠を持つた半人半羊のフアウンなどの間に、黄金の獸なる神祕の牛が姿を現す様に思はれた——そして此の獸が丁度太陽の様に、かうした悦びを發散するかの様であつた。

「これは一體何だらう？」とデオワンニは考へた。「冒瀆だらうか、それとも子供らしい無邪氣

な心の現れだらうか？ 腹の中で胎兒の動き初めた、聖エリザエータの顔と、四肢を引裂かれたオシリス神を悼んで泣く、インドの顔に浮んでゐる神聖な感激の表情は、果して同じものでないだらうか？ 棺の中から出現した主の前に膝をついてゐるアレクサンドル六世の顔と、民衆に殺された後アピスと姿を變じて蘇生した、太陽の神を迎ふる埃及の行者の顔に現れた祈る様な歡喜の色は、果して同じものでないだらうか？」

人々が地にひれ伏して、讚美歌を唱ひ、香を焚いてゐる此神體は、ボルジャ家の表徴たる牡牛即ち金牛の變形したもので、取りも直さず羅馬法王自身の事である。

シーザルの世に羅馬の國は大なりき

されども今は最大のものとなりなき

アレクサンドル法王ぞ統べ給ふ

彼は人なり、これは神なり

と詩人達の神化した羅馬法王に外ならぬのである。

デオワンニに取つてはかうして神と獸とが、何の苦もなく和睦して了つたと云ふ事が、如何なる矛盾撞着にも増して恐ろしかった。

晝を眺めると同時に、彼は法王を待受け乍ら廣間に充ち満ちてゐる、大官や高僧達の會話に

耳を傾けてゐた。

「何處からお出でになりました、ベルトランドさん？」アルボレア大僧正がフェララの使節にかう訊いた。

「寺院から参りました」

「で如何でした、法王のご様子は？ お疲れの模様は無かつたですか？」

「少しも。法王は此上ない程立派に祈禱式を勤め上げられました。その莊嚴さ、神聖さ、端麗さと云つたら、まるで天使の様でしたよ！ 私は自分が地の上でなく、天國で聖者達の間に交つてゐる様な気がしました。法王が聖餐の入つた杯を上げられた時、私一人丈でなく大勢の人が有難涙に咽びました……」

「ミキエレ大僧正が死んだのは、一體どう云ふ病氣の爲めですか？」近頃赴任して來た佛蘭西の使節が訊ねた。

「何かの食物か飲物かが、あの人の胃に觸つたのださうです」と、法令官のドン・ジュアン・ロベツが小聲でかう答へた。彼はアレクサンドル六世の近臣の大多数と同じやうに、西班牙生れの人間であつた。

「何でも噂に依ると」ベルトランドが口を入れた。「ミキエレの死んだ翌日の金曜に、法王はあ

れ程待焦れてゐた西班牙使節との謁見を断つてお了ひになつた——何でも大僧正死去の悲しみと、配慮の爲めだと云ふ觸出しでね」

此の會話には表面上の意味の外に、隠れた秘密な意味があるのであつた。大僧正ミキエレ死去の悲しみと配慮と云ふのは、外でもない、法王は終日故人の遺産を勘定してゐたのである。大僧正の胃に觸つた食物と云ふのは、ボルジア家の有名な家傳の毒藥たる甘い白い粉で、何時でも豫定の期間に徐々と人を殺す力を持つてゐた。又斑蝥を乾して粉にして篩に掛けたのを、浸劑にして用ひる事もあつた。法王はかうして迅速に樂に金を手に入れる方法を發明したのである。彼はすべての大僧正の収入を正確に注視して、必要の生じた場合には、十分金を貯めたと思はれるのを一人あの世へ送つて、自分を相續者と宣言するのであつた。世間では法王が大僧正達を、まるで豚を肥して置いて殺す様に取り扱ふ、と噂し合つて居るのであつた。式部長の獨逸人ヨハン・ブルハルドは自分の日記へ教會の盛儀など記入した間々に、高僧達の頓死を冷然たる簡単な句で表してゐた。

「杯を飲み乾した——*Biberat calicem*」

「皆さん一體本當でせうか」と同じく西班牙人のペドロ・カラントツと云ふ侍従が訊ねた。「今朝夜半にモンレアレ大僧正が發病したとか云ふのは、本當の事でせうか？」

「へえ？」とアルボレアは叫んだ。「全體何事が起つたのですか？」

「はつきり知りませんが、何でも胸がむかつかいて吐氣を催すのださうです……」

「あゝ神様、神様！」とアルボレアは重々しく吐息をつき乍ら、指を折つて數へた。「オルシニ大僧正、フェララ大僧正、ミキエレ大僧正、モンレアレ大僧正……」

「此處の空氣か、それともチーベル川(川を流るる)の水が、大僧正達の健康によくないのぢやありませんか？」とベルトランドは狡さうな調子でかう言つた。

「後から後から！ 後から後から一人づつ！」とアルボレアは顔を蒼くし乍らかう囁いた。「今日まで生きてゐた人が明日はもう……」

一同は静まり返つた。

と新たに一團の貴族や、騎士や、護衛兵が、法王の甥ドン・ロトリゲツ・ボルジャヤ、侍従官や、御寢所係りや、法政官など、法王廳に仕へる多くの大官に伴はれて、パバガルロの廣々とした隣室から崩れ込んで來た。

「法王だ、法王だ」と云ふ囁きが流れたと思ふと、やがてひつそりと静まり返つた。

群集はざわ／＼と動いて左右に分れた。と、扉がぱつと開いて——法王アレクサンドル六世が謁見室へ入つて來た。

三

若い時分彼は中々の美男子であつた。人々の話に依ると、彼は一目女を見た丈で、烈しい情慾の焰を燃え立たすに十分であつた。それはまるで磁石が鐵を吸ひ寄せる様に、自分の方へ女を引寄せる力が、其目の中に含まれてゐるかの様であつた。今でも彼の輪郭は、餘り肥え過ぎた爲めにぶく／＼と縮りがなくなつたけれど、それでも氣高い端麗さを保つてゐた。淺黒い顔の色、禿げた頭、後頭部に残つた半白の髪の毛、大きな鷲鼻、垂れ下つた顎、恐しく生々した迅速に動く小さな目、そして前へ突き出た肉の厚い柔かな脣は、狡猾で淫蕩な、それと同時に小兒の様に無邪氣な表情を帯びてゐた。

デオヴンニは此男の外貌に何か恐しい處、慘忍な處はないかと探して見たが、それは無駄であつた。アレクサンドル・ボルジャは最高の意味に於て、社交的禮容を作る天賦の才能——つまり生れ乍らの優美さを有つてゐたのである。彼が何んな事を言つたり爲たりしても、それは當にさう言つたり爲たりすべき事で、外に何とも仕方がないと云つた様に感じさせるのであつた。「法王は七十歳になる」と或る使臣が書いた。「併し彼は毎日に若返つて行く。何んなに酷い悲しみでも、彼に取つては一晝夜以上續いた事がない。彼は天性快活な生れで、何をしてもそれ

を自分の利益になるやうにして丁ふ。尤も彼は我子等の名譽と幸福の外、何事も考へてゐないのである。」

ボルジア家はカスチレのムーア族の血統を引いて居る、阿弗利加種であつた。アレクサンドル六世の淺黒い皮膚の色や、厚い脣や、火のやうな眼差などから推して、彼の體内を阿弗利加人の血が流れてゐる事は疑ふ餘地が無かつた。

「全く、太陽に産み出された牡牛アピスの光榮を現す、此のピント、リキオの壁畫以上、彼に取つて適當な光輪を想像する事は出来ない」とチオヴニニは考へた。

當の老ボルジアは七十歳と云ふ高齡にも拘らず、巨大な牡牛の様に健康で強壯で、宛然自分の家の表徴たる金の牛——太陽と快樂と情慾と多産の神の後裔かと思はれた。

アレクサンドル六世は金細工師の猶太人、サロモネ・ダセツと話をし乍ら廣間へ入つて來た。これはヴレンチノの劍にジュリアス・シーザーの凱旋を描いた男である。彼は古の寶石を模してカリピゲの（美しき臀部を持ちたる）ギーナスを大きな垣い綠寶石に彫つたので、法王の殊寵を得たのである。これが恐しく法王の意に適つたので、彼は此寶石を十字架に嵌めさせて、聖ペテロ寺院の莊嚴な祈禱式の時に、これを以て人民を祝福する事にした。かう云ふ譯で、彼は磔刑の基督を接吻し乍ら、同時に美しい女神を接吻した譯なのである。

併し彼は不信心者ではなかつた。教會の儀式一切を守り行ふばかりでなく、深い心の奥底でも中々の敬神家であつた。殊に聖母マリヤを深く信心して、これは自分の保護者であり、神の大前で自分を取りなして呉れる者である、と思ひ込んでゐた。

今彼が猶太人のサロモネに注文しようとしてゐる燈明皿は、娘ルクレチヤの病氣全快のお禮として、ポポロの聖母マリヤに約束した奉納の品であつた。

法王は窓の傍へ坐りながら、寶石類を検査してゐた。彼は夢中になる程寶石類が好きなのであつた。何か美味いものでも食べてゐる様に、肉感的な表情をして厚い脣を突き出し乍ら、彼は美しい細長い指でそつと石に觸つたり、さら／＼と爪練つたりして見た。

殊に彼は綠寶石よりもつと濃い色をして、金と紫の神祕めいた光を放つ、綠玉髓が大好きなのであつた。彼は自分の寶藏から、眞珠の入つた手函を持つて來るやうに命じた。

此函を開く度に彼は娘のルクレチヤ——自分自身蒼白い眞珠の様なルクレチヤを想出すのであつた。彼は自分の婿たるフェララ王アルフォンソ・デステの使臣を、群集の中から目で探し出して、自分の傍へ呼び寄せた。

「よいかペルトランド、ルクレチヤに土産物を忘れてはならぬぞ。叔父さんの所から空手で歸つたら酷い目に合ふぞ」

彼は自分の事を「叔父さん」と呼んでゐた。それは公文書の中でルクレチヤが法王の娘でなく、姪ひまと記されて居るからであつた。羅馬法王は子を持つ事が出来なかつたのである。

彼は手函の中を探つて、胡桃のやうな形をした大きな、細長い、殆ど價の知れない位貴い薔薇色の印度眞珠を取出して、光に翳しながら眺め始めた。彼は此眞珠が光澤消しの白さを湛へたルクレチヤの胸許に——黒い着物を深く抉つた襟明きに飾られた様子を想像して、フェララ王妃と聖母マリヤの二人の中、何方へ遣つたものか決し兼ねたのである。けれど直ぐに、聖母へ約束したものを奪ふのは、罪深い事だと考へ直して、眞珠を猶太人に渡した。そして神燈の中でも一番よく目に立つ場所、土耳其王の贈物たる紅玉と、綠玉髓クリソプラスの間へ嵌めるやうに命じた。

「ベルトランド」と彼は再び使臣に向つてかう言つた。「今度妃殿下に會つたら、わしからの使言こゝろだと云つて話して呉れ——何うか達者であつて、マリヤ様に精出してお祈りするやうに、又わしはお前も見るとり主の神様と、何時も變らぬわしの保護者たる聖母様のお恵みで、此上なく息災に暮して、あれに祝福を送つて居ると云つてな——所で土産物は今晚にもお前の宿許まで届けるから」

西班牙の使者は手函の傍へ近づいて、恭しげに叫んだ。

「私は今迄嘗てこんなに澤山の眞珠を見た事がございません！ 少くも七メーラ（ハメーラ）位は

ありませうか？」

「八メーラ半ある！」と法王は得意らしく訂正した。「これ丈の眞珠があつたら一寸威張れるよ！ 二十年間集めてるのだからな。娘も中々眞珠好きだよ……」

かう言ひ乍ら左の目を細めて、奇妙な低い聲で笑ひ出した。

「あの女は中々抜目が無いから、何んな物が似合ふか自分でよく承知してゐるよ。わしはな」と彼は勝ち誇つた様に言ひ足した。「わしが死んだ後でルクレチヤの手に、伊太利中で一番いゝ眞珠が残るやうにし度いと思つてゐる！」

両手を眞珠の中へ突つ込んで、掌の中へ握り乍ら指の間から溢こぼし始めた。そして鈍い光澤消しの様な輝きを持つた華奢な粒が、さら／＼と音を立てて流れる様を、ちつと見惚みとれてゐた。

「すつかり、何もかもすつかりあれの爲めだ、わしの可愛い娘の爲めだ！」と彼は噎むせせる様な聲で繰返した。

突然彼の燃える様な目の中に一種異様の光が閃めいて、その爲めに恐怖の悪寒がデオゾンニの心臓を流れ走つた——彼は此の老ボルジアが現在自分の娘に、醜惡な情慾を燃やしてゐると云ふ、世間の噂を想ひ出したのである。

四

此時近侍の者がツューザルの参内を法王に言上した。

法王は重大な事件に關して彼を招いたのである。それは外でもない、佛蘭西王は法王宮附の大使を通じて、ツューザルが佛蘭西の保護領となつてゐるフロレンスに、良からぬ策を廻らし、てゐると云ふ事に對して不満の意を洩し、且又アレクサンドル六世が我子の計畫を幫助してゐると言つて、法王をも責めて來たのである。

我子の來訪を聞くと、法王は偷む様に佛蘭西大使の方を見やつて、其の傍へ近寄り乍ら手を取つて、何心ない様を装ひつゝ、ツューザルが待つてゐる室の戸口へ連れて行つた。それから一人で其室へ入つて行くと、矢張り何心ない様子で戸を開け放しにして置いた。それはつまり隣室で話した事が、佛蘭西の大使を初めとして、戸口に立つてゐる人の耳に入るやうにとの策略であつた。

間もなく其處から狂猛な叫聲が聞えた。ツューザルは落着いた恭しい調子で辯解しようとしたが、老人は地團太を踏み乍ら勢ひ猛に叫ぶのであつた。

「もうわしの目の前へ出て呉れるな！ お前の様な奴は犬の様に絞め殺されて了へ！ 惡黨！」

「あゝ何と言ふ事だ！ 聞きましたか？」佛蘭西の大使は自分の隣に立つてゐるゾニスゾニスの雄辯家アントニオ・ジュスチニアニに囁いた。「二人は撲り合ひするに相違ありません、法王は我子を殺して了ふかも知れませぬよ！」

ジュスチニアニは只肩を竦めたばかりである。若し何方かが對手を撲るとしたら、それは父が子を撲るのではなくて、子が父を撲る位が落たと云ふ事を、彼はよく承知してゐたのである。ツューザルが兄のガンチア公を殺して以來、法王はツューザルに對して戦々兢々してゐるのであつた。尤も彼は以前にも増して優しく我子を愛する様になつたが、その愛情の中には迷信的な恐怖と誇りが入交つて居るのであつた。年若い侍従のペロットがツューザルの烈しい怒りを避けて、法王の袍の下に隠れたとき、彼は父の胸の上でペロットを刺し殺し、血の飛沫を法王の顔へ浴せたと云ふ事實は、人々の記憶に新しいことであつた。

ジュスチニアニは又同様に、今の争論が單なる欺瞞に過ぎない、父子の者は佛蘭西大使の頭をこぐらかせて、假令ツューザルはフロレンス共和國に對して良からぬ企みを抱いてゐるとしても、法王はそれに關係してゐない、と云ふ事を證明する爲めの狂言に違ひないと察したのである。ジュスチニアニは始終口辯の様に「父子はいつもお互に助け合つてゐる。父は決して自分の言ふ事を行はないし、子は又自分の行つた事を口外しないのだ」と言つて居た。

法王は去り行く我子の後から、父としての呪咀を送るだの、教會から破門して了ふだのと云ふ威嚇を浴せ掛けて、憤怒の爲めに全身を慄はせ、はあ／＼と息を切らし、紫色になつた顔の汗を拭き乍ら、謁見室へ歸つて來た。只その目の深い底の方に、愉快さうな色が閃いてゐた。彼は佛蘭西の大使に近付いて、又彼を小傍へ引つ張つて行つた。が今度はベルエデルの庭に面した戸の陰であつた。

「猥下！」「禮儀正しい大使は詫を言ひ始めた。「私は決して猥下のお怒りの原因となり度いと思つた譯ではございません……」

「君はあれを聞いたのですか？」と法王は單純な驚きの色を浮べた。そして對手が前後を思慮する暇のない中に、彼は父親の様な優しい手付で、二本の指で對手の顎を撮み乍ら（これは特別な寵愛の印であつた、）さも抑へる事の出来ない情の激發に驅られた様な調子で、早口に滑らかに佛蘭西王に對する自分の信服の念や、ツューザルの意圖の清淨な事などを語り始めた。

大使は煙に巻かれて夢中になつて聞いて居た。彼は歴然たる偽りの證據を握つてゐたにも拘らず、法王の目、顔、聲の表情を疑ふよりも、寧ろ自分の目を信じない方がましの様に感じられた。

老ボルジアの嘘は極めて自然で、豫め自分の嘘を考へて準備する事など少しも無かつた。そ

れは丁度戀する女の様に無邪氣に、自然と彼の口先からすらくと出て來るのであつた。彼は一生涯此の才能を發達させる練習をしたので、今ではすつかり其奧秘を會得して、マキアエリの言葉に依ると、「法王は實行しようと思ふ意志が少ければ少い丈、益々餘計に誓を立てる」といふ事を承知してゐながら、皆彼の言葉を信じる程になつた。何故ならば法王は丁度藝術家のやうに、自分で自分の作り事に夢中になつて、まづ我から先に信じる——と云ふ所に此の偽りの秘傳があつたからである。

五

大使との會話を終へて、アレクサンドル六世は秘書官なるフランチェスコ・レモリノ・ダイレルダの方へ向いた。これは嘗てジロラモ・サチナロラの處刑に立會つた、ベルジアの大僧正である。彼は教會檢閲制度實施の勅令を準備して、法王の署名を得る爲めに待つてゐたのである。法王は自分で此勅令を考へて作つたのであつた。其中にはかう云ふ一齣があつた。

「眞理を永遠の物たらしめ、且萬人の所有たらしむる印刷機械發明の利益は、余も明らかにこれを認むと雖も、自由放恣なる誘惑的著述の普及に依つて生ずる害惡を未然に防がんが爲めに、如何なる書冊と雖も教會當局、即地方教區長代理又は主教の認許なくして、印刷する事を禁ず

るものとす」

勅令を聞終ると、法王は大僧正達をぐるりと見廻して、いつも定りの問を發した。

「何う思はれるかな？」

「印刷した書物の外に」とアルボレアが言上した。「あのバオロ・サエルリに宛てた無名の手紙の様な、筆寫の著述に對しても、何とか方法を講じなければなるまいと存じます」

「あゝ知つてゐる」と法王が遮つた。「イレルダがわしに見せて呉れた」

「若し貌下が最早ご存知としますれば……」

法王はちつと大僧正の目を見詰めた。アルボレアは間諜ついて了つた。

「お前は多分かう言ひ度いのだらう——何うしてそれなら搜索を始めて、犯人の發見に骨を折らないか、とな、さうだらう？ 飛んでもない事だ、アルボレア、あの手紙の中には眞實以外何物も無いのに、何うして犯人を搜索する事など出来ようか！」

「貌下——」アルボレアは慄然とした。

「さうだ」アレクサンドルは莊重な浸み入る様な聲で語を續けた。「わしを責める者の言葉は正しいのだ！ 多くの罪人の中で最も罪の深い者は取りも直さず此のわしだ——盜賊で、強慾者で、淫蕩漢で、人殺しなのだ！ わしはたゞ慄へ戦きながら、人間の裁きの前に何處へ顔を隠

していゝか分らない位だもの、況して正しき者さへ殆ど明りを立てる事の出来ない、恐しい基督の審きの始つた時には、何う云ふ事になるやら想像も出来ない……けれど主の生きてましますからは、わしの魂も生きて居るのだ！ 我が神は憎むべきわしの様な人間の爲めに、荊の冠を被せられ、頬を打たれ、磔にせられて、遂に十字架上の露と消えられたのだ！ わしの様な人間の魂を雪より白くするには、主の血一滴丈で澤山だ。おゝ人の罪を發く我が同胞よ、汝等の中の果して誰が罪人に向つて、「汝罪あり」と言ひ得る程、神のみ恵みの深さを味つたか？ 正しき者は神の裁きの前で自由に明りを立てるがよい。我等罪人はたゞ謙抑と懺悔のみに依つて許され得るのだ。何故と言つて罪なければ懺悔なく、懺悔なければ救もない、と云ふ事を辨へてゐるからである。それ故わしは罪を犯して懺悔するのだ。尙一層罪を重ねて、集税人の如く娼婦の如く、尙一層自分の罪を悔み泣かうと思ふのだ。あゝ神様、私は十字に架けられた盗人のやうに、あなたのみ名を唱へます！ 假令私と同じ様に罪深い人間ばかりでなく、天使も天の元素も力も、すべて私を罪して斥けませうとも、私は唯一の保護者たる聖母マリヤ様に向つて、聲を絞つて止み間なく一心に叫びませう——マリヤ様は屹度私を憐れんで下さるに相違ありません、私はそれを信じて居ります！」

聲を立てぬ慟哭に肥えた全身を撼ぶり乍ら、彼は扉の上なるピントリッキオの畫に描かれた、

聖母マリヤの方へ両手を差伸した。畫家は此の壁畫の聖母を、法王の希望に依つて、美しい羅馬婦人ジュリア・ファルネゼの像に似通はせたものである、とかう多數の人々は信じて居た。ジュリアはツエーザルとルクレチアを生んだ、法王の愛妾なのである。

デオヴンニは此光景を見聞きして、これは一體悪巫山戯なのか本當の信仰なのか、何方だろうと思ひ迷つた。或は兩方一緒なのかも知れぬ。

「皆の者にもう一つ言つて置く事がある」と法王は語を次いだ。「それは自己辯解の爲めではなくて、神の光榮を讃へる爲めだ。パオロ・サゼリ宛ての手紙を書いた男は、わしを異教徒だと言つてゐるが、わしは生ける神に懸けて誓ふ——こればかりは冤の罪だ！ お前達自身……いや、お前達はわしに面と向つて本當の事を言ひはすまい——ではイレルダ、お前でもいゝ。お前がわしを愛して、わしの心を知つてゐて呉れるのは、わしにもよく分つて居る。お前は諛ひものでないから、一つ言つて見て呉れ。なあフランチェスコ、何うか神様の前へ出た積りで、わしが異教徒と云はれる角があるか無いか、言つて見て呉れ」

「猥下！」と大僧正は深い情の籠つた聲でかう言つた。「私風情に猥下の事をかれこれ申されませうか。何んなに猛惡な敵でも、若し法王アレクサンドル六世の著された「神聖羅馬教會の楯」を讀んだならば、法王が異教の誹りを受くべき角の無い事を、承認する筈でございます」

「あれを聞いたか、あれを聞いたか？」イレルダを指さして子供の様に得々とし乍ら、法王はかう叫んだ。「あれがわしを辯護するなら、つまり神様が辯護して下さるのも同じ事だ。他の事は兎に角として、今の世の中の自由思想や、反逆的な知識慾や、異教的な思想などに就ては斷じて罪が無いのだ！ 假令一時の氣紛れにも、神を疑ふ大それた心持などで、わしは自分の魂を汚した事はない。わしの信仰は純潔で確乎不動の物だ。何うか此の書籍檢閲の命令が、神の教會に對する新しい金剛石の楯となりますやうに！」

彼はペンを取つて、子供らしく無器用な、併し重味のある大きな字で羊皮紙の上に、「本文を裁可す。神の奴隸の奴隸たる主教アレクサンドル六世」と記した。

印刷課の書記を務めてゐる二人の僧が、勅令の羊皮紙に絹の紐を通し、それに鉛で作つた小さな珠をつけて鐵の挟み鏝でぎゆつと挟み、法王の名と十字架の印を捺し出した。

「神よ、これより汝の奴隸を許し給へ！」イレルダは氣狂ひめいた愛慕の火に燃える、落込んだ目を天へ向け乍らかう囁いた。

彼は本當に心の底から、若し老ボルジアの悪行一切を衡の一方の皿に載せ、今一方の皿に教會檢閲の勅令を載せたならば、此勅令の方が下へ降るに相違ない、と信じてゐたのである。

此時寢室附の祕密官が法王の傍へ近付いて、何やら彼の耳に囁いた。ボルジアは心配らしい顔付をして次の間へ入つた。そして絨氈の壁掛で隠された小さな戸口を潜つて、吊ラムプに照された狭い、圓天井作りの廊下へ出た。其處では彼に毒を飲まされた、モンレアレ大僧正の家の料理人が彼を待つてゐた。それは何でも毒薬の分量が不十分であつた爲めに、病人が段々よくなつて行くと云ふ噂が、アレクサンドル六世の耳に入つたからである。

色々確かな所を料理人に訊いた上、法王は一時よくなつた様に見えても、結局二三ヶ月中には死ぬに相違ないと云ふ確信を得た。その方が却つて疑を避けるのに都合がよかつた。

「それにしても」と彼は考へた。「可哀さうな事をした。快活な交際上手な老人だし、教會に對しても忠實な人間だつたがなあ」

彼は惱ましげに吐息をついて首を俛れ、人の好ささうな表情でふつくりした、柔かい唇を突き出した。法王は全く嘘をついて居なかつた。彼は本當に此の大僧正が可哀さうだつたので、若し彼に害を加へないで金を取る事が出来たなら、法王は非常に嬉しかつたに相違ない。

謁見室へ歸る途中、時々一寸した隔てのない夕食の爲めに、食堂代りに使用される「自由な

る藝術の廣間」で、ちやんと卓の支度が出来てゐるのを見ると、彼は急に空腹を感じて來た。

地球の分割は食後に延期されて、法王は客を食堂へ招待した。

食卓は玻璃の花瓶にさした白百合の生花で飾られてゐた。これはアヌンチアツォネ基督誕生通告祭の花と稱されて、法王の特に好んでゐる花であつた。それは其純潔無垢な美しさが、ルクレチヤを聯想さすからであつた。

食事は大して贅澤なものではなかつた。アレクサンドル六世は飲食の方については、節制を守る人であつた。

チオヴニニは侍従達の群に交りながら、食卓の會話に耳を傾けてゐた。

法政官のドン・ジュアン・ロレッツは今日の法王父子の争に話を持つて行つた。そして此争ひが見せ掛けの物だと云ふ事は夢にも考へない様な調子で、一生懸命にツェーザルの辯護を始めた。其他の人々も彼と一緒になつて、ツェーザルの徳を讚美するのであつた。

「あゝもう言つて呉れるな」と法王は氣難しげな愛情を示しながら首を振つた。「お前方はあれが何う云ふ人間か知らないのだ。わしは始終絶え間なしに、今にもあれが何か無鐵砲な事を仕出來しはしないかと、びく／＼して居るのだ。わしの言つた事を覚えてゐるがいゝ。今にあればわし等一同に飛んでもない災難を振り掛けて、自分でも酷い目に會ふのが落だから……」

彼の目は父親らしい誇りに輝き始めた。

「一體あれは誰に似てあんな不具者かたはものに生れ付いたのだらう？ わしはお前方も知つての通り、單純な策略の無い人間で、腹に思つた事は直ぐ口に出して了ふ性質だが、ツェーザルはまあ何だか會體かたいが知れぬ——始終むつつりと黙り込んで、隠れるやうに隠れるやうにしてゐる。お前方は本當にしないかも知れんが、わしは時々あれを怒鳴り付けて怒りながら、その癖自分でも恐しいのだ。さうなのだ、全く現在自分の息子が恐しいのだ。何故と云つてあれは實に慇懃で、慇懃すぎると思はれる位だが、何うかした拍子にあれがちつと見ると、まるで刀で心臓を刺される様な氣がするからなあ……」

客人達は尙一層熱心にツェーザルを辯護し始めた。

「いやもう分つて居る、分つてゐる」と法王は狡猾らしい微笑を浮べ乍らかう言つた。「お前達はまるで我子の様にあれを愛してゐるので、わしに指一本ささせはしないだらうよ……」

一同は尙此上何んな讚辭たねが必要なのだらうと思つて、當惑した様に口を噤んだ。

「お前達はあれの事を、こんな人間だあんな男だと色々と言ふが、」と法王は語を續けた。もう彼の目は抑へ難い歡喜に燃えてゐるのであつた。「併しわしは敢てかう斷言する——お前達はツェーザルが何んな人間かと云ふ事を夢にも知らないのだ！ 皆よく聞くがよい、わしはお前達

に自分の胸の祕密を明かしてやる。わしはツェーザルを讚める事に依つて、自分自分を讚美するのではない、いと高き神の攝理たてを讚へるのだ——嘗て二つの羅馬があつた。第一の羅馬は劍の力の下に地上の民を集めたが、劍を取る者は劍に依つて亡ぶの道理で、羅馬は亡びた。かうして世界には統一せる權力がなくなつて、民は牧者なき羊のやうに四散して了つた。そこで新しき羅馬は精靈の權ちからの下に諸々の民を集めようと思つたが、民はこれに歸趨しなかつた。何故なれば鐵の笏しやくを以て彼等を治むべしと、聖書にも記してあるからである。唯一不二の靈の笏は權ちからを持つ事が出来ないのだ。で僧侶の主たるわしは神の教會に此の劍を與へた。民を集めて唯一の群となすべき、此の鐵の笏を與へたのだ。ツェーザルはわしの劍なのだ。かくして二つの羅馬、二つの劍は結合して一つになり、法王は皇帝ケイザーとなり皇帝は法王となるのだ。精靈の王國は最後の永遠の羅馬なる、劍の王國に實現されるのだ！」

老人は口を噤んで天井へ目を上げた。其處には眞紅の牛が太陽の如く、金色の光を放つて輝いてゐた。

「アーメン！ アーメン！ 何卒しかあらせ給へ！」と、羅馬教會の大僧正や高官達はかう繰返した。

室の中が息苦しくなつた。法王は酒の爲めといふよりも、我子の偉大さを空想する陶醉感の

爲めに、少し眩暈がして來たのである。一同はベルエデルの庭に面した露臺へ出た。

下では法王附の馬丁共が、厩から牡馬や牝馬を引き出してゐた。

「アロンゾ、さあもう放せー」と法王は馬丁頭に叫んだ。

此方は心得て命令を發した。牡馬と牝馬の交尾は法王の氣に入りの慰みであつた。厩の門がさつと開いて、鞭の音がひう／＼と鳴り出した。と樂しげな馬の嘶きが聞えて、多數の馬の群が庭に散り亂れた。牡馬は牝馬を追ひ廻して乗り掛るのであつた。法王は大僧正や主教達に取圍まれ乍ら、長い間此の光景に見とれて居た。

けれど段々と彼の顔が曇つて來た。それは幾年か前にこれと同じ光景を、娘のルクレチヤと一緒に眺めた事を想ひ出したからである。彼の目の前には娘の姿が、さながら生ける者の如く立ち現れた。髪の毛の白つぼい、目の碧い、父に似て肉感的な厚い脣をした、新鮮の氣に充ち／＼た、眞珠のやうに優しい女で、限りなく従順で音無しく、悪の中にゐて悪を知らず、罪惡のどん底に居ながら無垢で淡白な性質であつた。それと同時に彼は憤懣と憎惡の念を覺えながら、現在の彼女の良人たるフェララ王アルフォンソ・デステを想ひ起した。何故彼女を嫁にやつたのだらう？ 何故あの結婚を承諾したのだらう？

急に自分の肩に老の重荷を感じたかの様に、重々しく吐息をついて首を垂れながら、法王は謁見室へ引返した。

七

此處にはもう地球儀や、地圖や、コムパスなどが用意されて居た。それはアゾール諸島とカペ・ド・エル島から西方三百七十里隔つた地點に、偉大なる子午線を引く爲めの道具であつた。此の地點が選ばれた譯は、コロムブスの説に依ると、此處に『地球の臍』が存在するからであつた。それは女の乳首の様に、梨の形をした地球の一角に生じた突起物で、月世界まで届くと云ふ山なのである。彼は最初の航海中に、羅針盤の針が磁力を感じてその方へ廻つたので、此の『地球の臍』の存在を確信したと云ふのであつた。

一方は葡萄牙の西端から、今一方は伯刺西爾の海岸から子午線までの距離が、相等しい様に測つてあつた。其後すべて舵手や天文學者などは、船の航海日數に依つて、此の距離を決定しなければならなかつた。

法王は祈禱を唱へた後、例のカリピゲのギーナスを彫つた、綠寶石の嵌めてある十字架で地球儀を祝儀した。そして筆に赤インキを含ませ乍ら、大西洋を横切つて北極から南極へ掛けて、

平和を齎す偉大な線を引いた。此線から東に存在する島嶼陸地、及び將來發見せらるべき土地は悉く西班牙に屬し、西の方に當るものは葡萄牙に屬する事となつた。

かうして彼は只一擧手の勞に依つて、地球をまるで林檎の様に兩斷し、それを兩基督教國民に分配したのである。此の瞬間デオヴンニの目には、自分の偉大さを十分自覺してゐる、端麗莊重なアレクサンドル六世が、彼の豫言した皇帝にして法王なる世界の支配者の様に感じられた。彼はさながら地上と天上、此の世のものと此の世のものならぬ、二つの王國の統一者であつた。

その晩ツューザルは法王宮の中にある自分の室で、法王と大僧正達の爲めに饗宴を催した。その席には美しい羅馬の「高潔なる娼婦」が五十人侍つたのである。

食事の後で窓の錠戸も扉もすつかり閉め切られて、卓の上にあつた大きな銀の燭臺は床へ下された。ツューザルや法王や客人達が焼いた栗を娼婦に投げ付けると、彼女等は眞裸になつて、床の上に立つてゐる無數の蠟燭の間を、四つ這ひに匍ひ廻りながら、喧嘩をしたり、笑つたり、金切聲を上げて叫んだり、轉がつたりするのであつた。間もなく法王の足許の床には淺黒いや、白いのや、薔薇色をしたのや無數の眞裸な體が、ちら／＼と慄へる明るい蠟燭の光に下から照され乍ら、ちよ／＼と奮めき廻るのであつた。

七十になる法王はまるで子供の様に嬉しがつて、栗の實を掴んでは投げ掴んでは投げしながら、手を叩いて悦んだ。そして娼婦達を「可愛い鶉鴒」と呼ぶのであつた。

けれども彼の顔はベルエデルの庭で馬を見てゐた時と同じ様に、次第々々に曇つて來た。彼は千五百一年萬聖節（十一月）の前日に、愛する娘のルクレチヤと共に、これと同じ栗の戯れを見物した事を想ひ出したのである。

祝宴の終りに客人達は基督と處女マリヤの廣間と稱せられる、法王の居間へ下りて行つた。此處で法王の護衛の中でも一番強壯な若者と娼婦との間に、戀の競争と云ふのが行はれた。そして競争に勝つたものは賞與を頂戴した。

かうして法王宮に於ては二つの偉大なる出來事、即ち地球の分割と教會檢閲法の制定の爲めに、羅馬教會に取つて記念すべき日を祝ひ終つたのである。

レオナルドは此饗宴に列席してすべての事を見聞きした。かう云ふ祝宴に招待を受けるのは非常な恩寵の印となつてゐたので、辭退などする事は出來なかつた。其晩家へ歸ると彼は日記にかう書いた。

「セネカの言葉は正しい。すべての人間の中には、神と獸とが繋ぎ合されて住んでゐる」
その次には解剖圖と並べて、

「野卑な魂と下劣な情慾を持つた人間は、偉大なる睿智と觀照の人と同じ様に、かうした美しい複雑な肉體組織を有する價值がない様に感じられる。彼等には食物を入れるのと出すのと二つの口を持つた袋の形で十分だ。何故と言つて眞に彼等は食物の通路、肥壺充しに過ぎないからである。彼等は只顔と聲とが人間に似てゐる丈で、其他の點に於ては畜生にも劣つてゐる」

翌朝デオヴンニは、師が畫室で聖イキキネモを描いて居るのを見受けた。

獅子の棲家の様な洞穴の中で、隠者は跪いて十字架を見詰め乍ら、恐しい勢で我れと我が胸を石で打つてゐるので、手馴かされた獅子さへも大きな口を開いて、彼の目を見詰めて居るのであつた。屹度此獸さへ人間が可哀さうだと云ふ様に、物悲しげな長い咆哮を發したのであらう。

ベルトラファイオはレオナルドの描いた今一枚の畫を想ひ出した。それはあのサヲナローラの薪の山で焼かれた、白鳥を抱いてゐる眞白なレダ——情慾の女神であつた。又もや以前と同様に、此の相反した二つの深淵の中、果して何方が師の魂に近いのだらう——それとも兩つながら同じ様に親しいのだらうか、かう云ふ疑問がデオヴンニの心を惱まし始めた。

八

夏が來た。市中ではボンチアの沼地から發する腐敗性の熱病、マラリヤ熱が猖獗を極めた。

七月の終りから八月の始めへ掛けて、法王の近臣中誰か一人死なない日とは一日も無かつた。

最近法王は何となく心配らしく、悲しさうになつて來た。併しそれは死の恐怖ではなくて、遠い以前からの憂愁——ルクレチヤを懷ふ情が彼の胸を咬んでゐるのであつた。彼は前から狂氣に似た盲目的な、言葉に出す事の出來ない狂猛な慾望の發作を経験してゐた。若し今直ぐにもそれを満足させなかつたら、其の爲に息が窒つて死んで了ひさうな氣がして、自分乍ら恐しい様であつた。

彼はルクレチヤに手紙を出して、たつた四五日でいゝから來て呉れと哀願した。來たら力づくで引留めようと思つたのである。けれど彼女の所から、良人が出して呉れないと云ふ返事が來た。彼は此憎くて堪らない自分の最後の婚を、すべて是迄のルクレチヤの良人達と同様亡き者にする爲めには、何んな兇行も敢て躊躇しなかつたのであるが、併し此のフルラ王は一寸都合が悪かつた。彼は伊太利全國で最も優れた砲兵隊を有つてゐるのであつた。

八月の五日法王は郊外なるアドリアン大僧正の別荘へ行つた。そして晚餐の時醫師から禁じられてゐるにも拘らず、彼は自分の好きな生物の料理を幾皿か平らげて、それを肴に濃厚なシリヤの酒を飲み乍ら、長い間羅馬の夜の爽かな、とは云へ危険な空氣を楽しんだのである。

翌朝彼は不快を感じ始めた。後で人々の物語る所に依ると、彼が開け放した窓に近付いた時、一時に二つ迄葬式の行列が目に入つた。而も一人は自分の侍従某で、一人はグリエルモ・ライセンドで、何方も肥つた男だつたとの事である。

「我々の様に肥つた人間に取つては危険な時候だ」と法王は呟いたとの事である。

彼がかう言ふか言はないかに、一羽の斑鳩しほとが窓の中へ飛び込んで来て、壁に頭を打つ突けながら、目を暈まはして法王の足許へばかりと落ちた。

「悪い兆しるしだ！ 悪い兆しるしだ！」彼は眞蒼になつてかう呟くと、其儘寢室へ引籠つて了つた。其晩彼は胸が悪くなつて、嘔氣を催したのである。

醫師達の見立ては區々まごであつた。或者は間歇熱だと云ふし、或者は膽汁流出症だと云ひ、又或者は卒中だと云つた。市中では法王毒害の噂が擴まつた。

刻一刻と彼は衰弱して行つた。八月の十六日には最後の手段として、寶石を舂いた粉を病人に飲ませたが、病氣はその爲めに却つて悪くなるばかりであつた。

或晩ふと昏睡状態から醒めた法王は、胸の邊の肌着の下を探り始めた。アレクサンドル六世は長年の間、一つの小さな箱を身に着けてゐた。それは主の血と肉を僅かばかり收めた、玉の形をした肌守りの聖餐入れであつた。占星術師は彼が此箱を體につけてゐる間は、決して死な

いと豫言したのである。併し彼が自分で失くしたのか、又は近臣の中の誰かゞ彼の死を望んで盗み取つたのか、それは遂に分らなかつたが、何うしても見付からなかつたのである。彼はこれを聞くと、絶望した様な諦めの表情を浮べ乍ら、目を閉ぢてかう言つた。

「ぢやもう駄目だ、死ぬるのだ……」

八月十七日の朝堪へ難い衰弱を感じて、彼は一同に退去を命じて、寵愛の醫師ヴノザ主教を傍へ呼び寄せ、インノケンチイ八世の侍醫たる猶太人が發明したと云ふ、治療法の話始めた。彼は瀕死の法王の血管に、三人の幼兒の血を注射したとの事であつた。

「猥下！」と主教は言葉を返した。「此の實驗が何う云ふ結果に終つたかと云ふ事は、よくご承知の筈でございますが」

「知つてゐる、知つてゐる」と法王はしどろもどろな調子で呟いた。「あれが成功しなかつたのは、子供が七つにも八つにもなつてゐたからだ。何でも極く小さい乳呑兒でなければならぬと云ふ話だ……」

主教は何とも答へなかつた。病人の目は曇つて来て、彼は何時しか讒語を言ひ始めた。

「さうだ、さうだ、極々小さい子供がいゝのだ……さう云ふ子の血は清潔で眞赤だから……わしは小さい子供が大好きだ。何うか小さい子供がわしの處へ来るのを留めないで呉れ……」

死に瀕してゐる「基督の太守」の口から洩れる此の恐しい謔言には、あらゆる事柄に馴れた物に動じない主教も、思はず身の毛がよ立つのを覺えた。

丁度溺れ掛つたものの様に、單調な、力無い、痙攣的な、周章だしい手付で、法王は懐の邊りを掻き廻しながら、何時までも紛失した聖餐入れを探してゐるのであつた。

病氣中彼は一度も子供達の事を口にしなかつた。ツェーザルも同様危篤に陥つてゐると聞いても、彼は矢張り平氣であつた。何か息子か娘に最後の意志を傳へようと思はないかと訊ねても、彼は無言の儘顔を背けて了つた。それはまるで一生涯の間あゝ云ふ狂暴な愛を以て愛した人達が、既に存在しないものか何ぞの様であつた。

八月十八日金曜の朝、彼は自分の懺悔僧カリノラの主教ピエロ・ガムボアに懺悔をして、聖餐を受けた。日の暮れ方人々は最後の祈禱を唱へ始めた。瀕死の病人は幾度か何か言はうとしたり、手で合圖をしようと思つて空しい努力をした。イレルダ大僧正は屈み込んで、彼の口から出る力無い音に依つて、法王が「早く……早く……早く……守護神の聖母マリヤに……捧げるお祈りを……」と言つてゐるのが分つた。

教會の規則に依つて、大僧正は瀕死の人に此の祈禱を唱へる事が出来ない事になつて居たけれど、イレルダは友の最後の希望を入れる爲めに、「嘆ける聖母」を唱へ始めた。

聖母マリヤよ、君はかのゴルゴダに

我子を磔にせし十字架の

下に佇み給ひぬ——かくて

鋭き死苦の刃は

嘆ける母の胸を、さし貫きぬ

君の目は愛しき御子の

淋しくも頼りなく

死に行く様を見給ひき

……

おゝマリヤよ、我をな斥け給ひそ

我をもかの血に塗れたる

十字架の傍に、立たしめ給へ

見そなはせ、我の心は

み子の苦しみ給ひし如く

苦しまんぞ翼ふなる。

神々の復活 眞紅、歌

處女の中なる處女よ、愛の泉よ

み子の傷より落つる血を

飲ましめ給へ。かの十字架の

苦しみを心ゆくまで、味はしめ給へ

愛の火に燃え、惱み死につつ

わが神の死の中に

天國のみ榮えを見得んが爲めに。

名状し難い感情がアレクサンドル六世の目に閃いた。それはもう目の前に保護者たるマリヤの姿を、眺めてゐる様な風であつた。彼は最後の努力を奮つて、両手をさし伸し、全身をびくりと慄はせて、硬ばつた舌で繰返した。

「おゝマリヤ、我をな斥け給ひそー！」

と其儘はたりと枕の上に倒れて了つた——彼はもう此世の人でなくなつたのである。

九

此頃ツェーザルも矢張り生死の間を彷徨してゐた。

醫師のガスパレ・トレラ主教は前代未聞の荒療治を試みた。彼は驃馬の腹を裂かして、湯氣の立つ様な内臓の中へ、悪寒に慄へてゐる病人を突込んだ上、更に氷の様な冷い水の中へ浸けさせたのである。此の療治の爲めと云ふより、寧ろ底の知れない位な意力のお蔭で、ツェーザルは病を征服したのである。

かうした恐ろしい幾日かの間にも、彼は絶対に心の平静を保つて、日々の出来事に注意を拂ひ、臣下の報告を聞き、書簡を口授し、命令を發しなどした。法王逝去の報が届いたとき、彼は地下の間道を通つて法王宮から聖アンゼルの要塞へ、自身の體を運ばせたのである。

アレクサンドル六世の死去に就いて、市中ではまるで昔話のやうな、様々な風説が擴まつた。ゼニスの使臣マリノ・サヌトが共和國へ送つた報告に依ると、法王は臨終の前に一匹の猿を見つけたとの事である。其猿は室中飛び廻りながら、さまざまに法王を愚弄するので、一人の大僧正がそれを捕まへようと申出た。すると病人はさも恐しさうな聲で、「打つ棄つて置け、打つ棄つて——あれは悪魔だ！」と叫んだとの事である。又或人達の話に依ると、法王は幾度も「今行くよ、今行くよ、只もう一寸待つて呉れ！」と叫んだとの事であるが、それはインノケンチイ八世の歿後、法王を選出する爲めに招集された祕密會議で、未來のアレクサンドル六世たるロドリゴ・ボルジアは、向う二十年間法王の位を授けて貰ふと云ふ條件で、自分の魂を悪魔に賣

つた爲めだ、とかう人々は説明した。又こんな事を言ふ者もあつた——彼の死ぬ一分程前に、枕許から七匹の黒魔が現れた。そして彼が息を引取るや否や、其の死骸は直ぐ腐敗し始めて、まるで火の上に掛けた釜の様に、ぐつぐつと煮え立つて口からは泡を吹き出した。そして丈よりも身幅の方が大きい程、ぶく／＼小山の様に膨れて、人間らしい佛はまるで失くなり、皮膚の色は「炭か黒羅紗のやうに黒くなり、顔はまるで黒奴そつくりになつた」と云ふ事である。

羅馬法王の葬式前には、聖ペテロの寺院で九日間鎮魂祈禱式を行ふのが習慣であつたが、法王の遺骸が餘り恐ろしい有様になつてゐたので、誰一人勤行をしようと云ふ者がなかつた。遺骸の周りには蠟燭も、香も、讀經僧も、番人も、祈禱する人も無かつた。又棺の世話をする人が長い間見付からなかつた。やつとの事で一杯の酒の爲めには、何んな事でもし兼ねない破戸漢を六人探し出したが、棺が死骸に合はなかつたので、法王の頭から三重の冠を脱がせ、經帷衣の代りに穴だらけの毛氈を被せて、狭くて短い棺の中へ何うやらかうやら無理矢理に、死骸を押し込んで了つた。又一説に依ると遺骸は棺にさへ入れられないで、まるで馬や牛の死屍か、疫病やみの死骸の様に、足に繩をつけて穴の中へ引摺り込んだとの事であつた。

併し遺骸を埋葬して了つてから後も、彼はおち／＼と眠る事が出来なかつた。人民の間の迷信的な恐怖は段々烈しくなつて行つたのである。まるで羅馬市の空氣の中には、死を齎らすマ

ラリヤの瘴氣のほかに、新しくえたいの知れぬ、尙一層厭はしい無氣味な惡臭が漂ひ始めた様に感じられた。聖ペテロの寺院には一匹の黒犬が現れて、想像も出来ない程の速力で環を描いて走り乍ら、次第にその環を擴げて行くのであつた。ボルゴの住民は日が暮れかゝると同時に外へ出るものが無くなつて了つた。多くの人はアレクサンドル六世の死は本當のものでなくて、又再び蘇つて王座に着くに相違ない——その時は反基督の王國が始まるのだと信じてゐた。デオヴンニはかうした出来事や風説を、シニバルデイ横町なるチニク人、跛のヤンの酒場で、悉しく聞き込んだのである。

10

その間レオナルドはすべての人から遠ざかつて、平靜に或る一つの繪の製作を續けてゐた。それはフロレンスなるサンタ・マリヤ・デル・オレンチア^{アレンチア}の僧院の爲めに、セルピット派の僧から注文されて、ずつと以前に着手したものであるが、その後ツェーザル・ボルジアに招聘されてからも、いつもの癖でよろ／＼と仕事を續けてゐたものである。繪は聖アンナと處女マリアを現してゐた。

遠い山々の嶺や、靜かな湖の見渡される、高い山上の牧場で、處女マリヤは古くからの習慣

で、母アンナの膝の上に坐りながら、幼いイエスを支へてゐた。イエスは小羊の兩耳を掴んで地びたへ臥かせながら、さも悪戯らしい活潑な表情で、小さな片足を舉げて馬乗りにならうとして居た。聖アンナは永遠に若い巫女の様であつた。彼の臉を伏せた目や薄いしなやかな唇に浮んでゐる、捕捉する事の出来ない滑つて逃げさうな微笑は、丁度透明な深い水の様には神祕と誘惑に充ちて、蛇の如き睿智の微笑と云ふ様な感じがした。デオヴンニはふとレオナルド自身の微笑を聯想した。それと並んでゐる處女マリヤの幼兒の様に晴れやかな顔は、鳩の如き單純さに息づいてゐた。マリヤは完全なる愛であり、アンナは完全なる知識であつた。マリヤは愛するが故に知り、アンナは知るが故に愛した。デオヴンニは此の繪を見てゐる中に、「偉大な愛は偉大なる知識の娘である」と云ふ師の言葉が、始めて分つた様に思はれた。

それと同時にレオナルドは、種々な器械の製圖に従事してゐた。それは巨大な扛重機だの、水汲みポムプだの、針金製造機だの、非常に堅い石を切る鋸だの、鐵材に穴を開ける器械、織物機械、剪羊器械、製綱器械、製陶器械などであつた。

デオヴンニは師がかうした二つの仕事——器械圖と聖アンナの勞作を一緒にしてゐるのに一驚を喫したが、その結合は偶然なものではなかつた。

「余はかう主張する」と彼は機械學原理にかう書いて居る。「力は見えざる精神的存在である。

精神的とは其の中に無形の生命が潜んでゐるからである。見えざる存在とは、力を生ずる物體が重量をも外形をも變じないからである。」

彼は車輪、楨杆、彈條、弧線、調帶、無限螺旋、巨大な鐵の心軸、小さな齒狀突起、針、ピストン、極めて微妙な鑄型——すべてかうした見事な機械の各部分にも、生きた力が動き流れてゐるのを觀じて、孤獨な悦びを禁じ得なかつた。それと同じ様に宇宙の支持者たる精靈の力即ち愛が、天から地、母から娘、娘から孫、孫から神祕の小羊へと流れ移つてゐる。それは永久の循環運動を完成して、更に自己の本源へ歸る爲めなのである。

レオナルドの運命はツェーザルの運命と共に決した。ツェーザルは依然として冷靜と膽力とを保つてゐたにも拘らず、マキアエリの所謂「偉大なる運命の達人」も、今や幸福が自分に背を向けたのを感じた。法王の死とツェーザルの病氣を知つた敵は、聯合して羅馬カムパニヤの地を占領したのである。プロスベロ・コロンナは市の城門に迫り、ギデリはチャタヂカステロへ向つて、ヂアン・パオロ・バリオニはベルジニに向つて進んで來た。その上ウルピノには叛亂が起るし、カメリノ、カリイ、ピオムピノなどは相繼いで離反したし、新しい法王を選出する爲めに開かれた祕密會議は、ツェーザルを羅馬から遠ざける事を要求したのである。すべての物が彼に背を向け、すべての物が崩潰して了つた。

つい先頃まで彼の前で戦^たいてゐた人々も、今では彼を冷笑してその滅亡を待構へる様になつた。それは瀕死の獅子を驢馬共が蹄にかける様な趣であつた。詩人達は次のやうな諷刺詩を作つた。

ツューザルかはた無か？

恐らくはその兩者なるべし。

既にツューザルたりし彼

やがて直ちに無とならん。

ある時レオナルドは法王宮でゼニス^{ウメネツツア}の使臣アントニオ・ジュスチアニと會話を交換した事があつた。それはツューザルの全盛時代に、「あの男はやがて藁火のやうに燃え盡きて了ふだらう」と豫言した人である。話題は偶然ニコロ・マキアエリの上に轉じた。

「あの人は國家科學に關する自分の著述の事を、あなたに話した事がありますか？」と畫家は訊ねた。

「何うして、度々その話が出ましたよ。無論ニコロ氏は冗談に言つてゐるのです。決してあの本を世に發表する事はないでせう。あゝ云ふ事は大體書物に書くべき性質のものぢやありません。爲政者に忠言を與へたり、人民に政治の内幕を暴いて見せたりして、すべての國家は正義の假

面を被つた暴力に過ぎない、など云ふ事を證明するのは、何の事はない、雖に狐の惡智恵を授けたり、羊に狼の牙を箠める様なものです。そんな政治は眞平です！」

「ぢや、あなたの御意見では、ニコロ氏は迷妄に陥つてゐるから、今に其の思想を變へる様になるだらうと仰有るんですか？」

「全然違ひます。私はあの人と同意見なのです。あの人の言ふ通りに行はなくちやならないのですが、併しそれを口へ出して言つちや不可^いません。尤もあの人が其の本を發表した所で、著者自身より外誰一人迷惑する者はないでせうよ。神様はお慈悲深いですから、羊や雞はこれ迄通りに自分の君主を、つまり狼や狐を信するに相違ありません。所でその狐や狼はあの人の事を、惡魔の様な政策を宣傳する者だ、狐の様に狡猾で、狼の様に残酷な奴だと言つて非難するでせう。かうして萬事は以前の儘で繼續します。少くとも私達の生きてゐる間位は大丈夫でせう！」

一一

千五百三年の秋、フロレンス共和國の終身大統領、ピエロ・ソデリニがレオナルドを軍事技師として招聘した。それは彼をビザの陣地へ送つて、攻城機を作らせる爲めであつた。畫家は羅馬に於ける最後の幾日かを送つてゐた。

ある晩彼はパラチオの丘を逍遙した。嘗て昔アウグストゥス、カリグラ、セプティミウス・セエルス諸皇帝の宮殿の聳えてゐた處も、今はたゞ空しい廢墟に風ががう／＼と騒いで、灰色をした橄欖の間に放し飼ひの羊の啼き聲や、きち／＼といふ蝻の聲が聞えるのみであつた。無數に散亂してゐる大理石の破片から推して、丁度復活を待つ死者の様に、未知の美を藏した神々の像が、地下に休つてゐる事が想像せられた。

それは晴れやかな夕暮であつた。煉瓦で築いた拱門や、圓天井や、壁などの殘骸が夕日に照らされ乍ら、紺碧の空に赤々と燃えてゐた。秋の木の葉の緋や金は、嘗て羅馬皇帝の宮殿を飾つてゐた緋や金よりも、尙一層神々しく感じられるのであつた。

カプロニカの苑から程遠からぬ丘の北向きの斜面で、レオナルドは膝を突いて草を押分けながら、微妙な模様のついた古い大理石の破片を、注意深く檢べてゐた。

狭い徑づたひに灌木の陰から、一人の男が現れた。レオナルドはふとその顔を見ると、立上つてもう一度その顔を眺め、つか／＼と傍へ寄つてかう叫んだ。

「あなたはニ・コロさんぢやありませんか？」そして返事も待たないで對手を抱きしめ乍ら、まるで兄弟か何ぞの様に接吻した。

フロレンス共和國祕書官の着物は、ローマニヤで見た時よりも、一層古ぼけて色が褪めて

ゐた。察する所フロレンスの爲政者等は、依然として餘り彼をちやほやしないので、随分冷遇してゐるらしかつた。彼は少し瘠せた。綺麗に剃り上げた頬はげつそりこけて、頸は細長くひよろりと抜け出し、平たい鴨の嘴の様な鼻は一層鋭く前の方へ突き出して、目は熱病やみのやうに光つてゐた。

レオナルドは彼に向つて、羅馬へ來たのは長く逗留の豫定なのか、何ういふ任務で來たのか、などと訊ね始めた。畫家がツェーザルの名を口にした時、ニ・コロは彼の目を避ける様に顔を背けて、肩を練めながら、わざとらしく無頓着な態度を装つて、冷やかな調子でかう言つた。

「私は運命の神の思召しで、一生涯の間に色々變つた事を見て來ましたから、もう何んな事に出席つても驚かなくなりましたよ……」

そして話題を變へようと思ふらしく、彼も矢張レオナルドに向つて、此の頃何をしてゐるか
と訊ねた。畫家がフロレンス共和國へ仕官した事を聞くと、マキアエリは手を振つて

「餘り喜ばない方がいゝですよ！ ツェーザルの様な英雄の悪行と、我共和國の衆愚の善行と較べて、果して何方がいゝやら分つたものぢやありませんよ！ 尤も何方も同じ位のもんですからね、只お訊ねとあれば、私は人民政治の美點について幾分知つて居る所がありますよ！」と、彼は苦笑を浮べた。

レオナルドはアントニオ・ジュスチニアニが、「マキアエリは鷄に狐の狡智を教へたり、羊に狼の牙を鋭めようとして居る」と言つた事を話して聞かせた。

「眞理は何處までも眞理です！」とニココロは好人物らしく哄笑ひした。「私は鷺鳥共を怒らすのです。私が人に先立つて第一番に、皆のしてゐる事を口を出して言つた爲めに、潔白な人達は私を火炙りにもし兼ねない勢ひなんです。それは此處からちやんと見え透いてゐますよ。暴君は私を人民の煽動者と云ふでせうし、人民は暴君の手先だと罵り、偽聖人は私を無神者と呼び、善人は私を悪人と銘打つてせう。又悪人は誰よりも一番に私を憎むでせうよ。何故と言つて、私は彼等自身より一段上の悪人に見えるからです」

それから彼は静かな憂愁を浮べ乍らかう附け加へた。

「レオナルドさん、あなたは何時かローマニヤで二人で話した事を覚えて居ますか？ 私はよくあの時の話を想ひ出しますが、あなたと私とは同じ運命を背負つてゐる様な氣がして仕方がありません。今迄新しい眞理の発見は、新しい土地の発見と同じ位危険でしたが、今後も矢張りさうなのでせう。暴君の傍でも群集の中でも、小人の前でも偉人の前でも、何處へ行つても私は縁のない餘計者なのです——家のない放浪者なのです、永久の追放者なのです。萬人に似てゐない者は、つまり只一人で萬人に敵對するものです。何故と云つて此の世界は衆愚の爲め

に作られた物で、其處には衆愚より外誰一人居ないからです。それですから」と彼は尙一層低い物思はしげな聲で語り續けた。「私は此の世に生きてるのが退屈だと言ふのです。所が、人生で何より一番悪いのは、心配でもなければ病氣でもなく、貧乏でもなければ悲しみでもなく、此の倦怠といふ奴ですからねえ……」

二人は無言の儘バラチオ丘の西側の坂を下りると、狭い不潔な通りを傳つてカピトリヤ丘の麓、サチュールン神殿の廢墟に辿りついた。此處は昔、羅馬の中央廣場になつて居た處である。

一一一

セプチミウス・セゼルスセプティミウス・セザリウスの拱門アーチから、フラギウス家の圓形劇場アンフィテアトルに到る古い神聖なサクラ・ギア街の兩側には、憐れた古びた小家がごちや／＼と建つて居た。人の噂に依ると此等の小家の土臺石には、貴重なオリムピア諸神の彫像の手足が積まれて居るとの事であつた。幾世紀かの間、中央廣場は石切場になつて居たのである。異教の神殿の廢址には、基督教の教會が佗しく臆病げに巢食つてゐた。往來の塵や埃や馬糞などの堆積が、十エル以上も邊りの地面を高くして居た。併しそれでも未だ所々に古代の圓柱列が、今にも落ちさうな軒縁のきぐちを載せながら立つて居るのであつた。

ニココロは畫家に向つて、今は「牛の野」と呼ばれて居る古羅馬のクリヤ、即ち國民の集會議場を指さして見せた。此處は今家畜市場となつて居るのであつた。角の曲つた白い牡牛と黒い水牛が、二匹づゝ地びたの上に臥てゐると、豚は水溜の中で鼻を鳴らし、仔豚はひい／＼と黄色い聲で啼いて居る。そして家畜の糞が一杯まみれ付いて、銘の半分磨り耗つた平石や、倒れた大理石の圓柱などは、眞黒などろ／＼した泥土の中に沈み掛つて居る。チートゥス・エスパシアヌス帝の凱旋門には、嘗て男爵フラジパニ一族の強盜の巢であつた、古い中世騎士の塔が倒れ懸つてゐた。その凱旋門の直ぐ前には、家畜市場に集る百姓共を對手の居酒屋があつて、窓の中からは女のがみ／＼罵り合ふ聲が洩れ、焼け過ぎたバタと、揚げた魚のむつとする様な匂が、もう／＼と渦を巻きながら流れ出てゐた。洗濯繩の上にはごちや／＼したぼろが干してある。熱病に悩む様な顔付をした年寄りの乞食が、石の上に腰を掛けながら、病氣でむくんだ足をぼろ布で巻いて居た。

凱旋門の内部には左右に二つの浮彫があつた。一つにはエルサレムの征服者たるチートゥス・エスパシアヌス皇帝が、四頭立の二輪車に乗つて、凱旋行列を行つてゐる所で、今一つの方には手枷を掛けられた猶太人の捕虜と、戰勝者の戦利品たるエホバの神に供へるパンや、ソロモンの神殿の七つ枝を持つた燭臺などが彫つてあつた。上なる圓天井の眞中には、神と等しくなつ

たケーザルを、オリムピヤへ連れて行く、翼の大きな鷲が現してあつた。ニココロは門の上に漸く消え残つてゐる題銘を次の様に讀んだ。

「Senatus populusque Romanus divo Tito divi Vespasian filio Vespasiano Augusto (羅馬國民の元老院と羅馬人民の元老院が、神トウスのエスパシアヌス大帝に捧ぐ)」

太陽はカピトリアの方から拱門の下へ射し込んで、香の煙りの様に青々とした、併し惡臭鼻を衝く臺所の湯氣を透して、赤々とした最後の光線を皇帝の凱旋行列に注ぐのであつた。

ニココロが最後に中央廣場の方を振返つて、マリヤ・リベラトリチエ教會の前に、たつた三本淋しく立つて居る圓柱に、薔薇色の夕陽が反射してゐるのを見た時、彼は心臓を病的に引きしめられる様な氣がした。夕べを告ぐるアエ・マリヤの懶い、老いぼれた人の片言みたいな鐘の音は、古羅馬の中央廣場を悼む葬式の鐘のやうに感じられた。

二人はニココロの大圓形劇場へ入つた。

「さう」圓形劇場の壁になつてゐる巨大な石を眺め乍ら、ニココロはかう言つた。「かう云ふ建物を拵へる事の出來た昔の人は、到底我々の匹儔し得る所でないです。此の羅馬へ來ると始めて、我々と古の人の間に何れ位の相違があるか、と云ふ事は、つきり感じられますよ。何うして我々は古人と競争出来るものですか！ 我々には古人が何う云ふ風な人間だつたかと云ふ事

は、想像する事も出来ない位です……」

「私には何うも」やつとの事で瞑想から我に返つた様に、のろい調子でレオナルドは反駁した。「あなたの考が間違つてる様に思はれますよ。今の人間にも古人に劣らない位の力があります、尤もそれは別種なものですがね……」

「基督教的謙抑ちやありませんか？」

「さう、謙抑も其の中へ入りますね……」

「或はさうかも知れませんか」とマキアゾリは冷かに言つた。

二人は半ば崩れた圓形劇場の下の段に腰を下して休息した。

「私の考へでは」ニコロは急に勢ひ込んで語を次いだ。「人間は基督を受け入れるか斥けるか何方かに決めなければなりません。所が我々は其の何方もしなかつたのです。我々は基督教徒でもなければ異教徒でもありません。つまり此方の岸を離れて、彼方の岸へ着かないでゐるのです。善人となるには力が足らず、悪人となるのは恐しいと云ふ譯で、我々は黒くもなければ白くもなく、只灰色なのです。冷くもなければ熱くもない、只生温なまぬるなのです。もう散々嘘をついたり、卑屈な真似をしたりして、基督とゴリアル(神の神)の間を彷徨し乍ら、兩方に媚を呈して來たものですから、今では我々自身何を欲するのやら、何處へ行つてるのやら分らなくなつて

了つたのです。古の人には少くともそれ位の事は分つて居たから、すべての事を最後まで押通して、決して表面うぶを飾つたり、左の頬を打つた者に右の頬を差向けたりしなかつたです。所が天國に於ける幸福の爲めには、地上に於てあらゆる不正を忍ばなければならぬ、と云ふ事を人間が信じる様になつてから、悪人共に取つて危なつけない、自由な活動の天地が開けた譯です。えゝさうですとも、全く世界を無氣力にして、悪人共の犠牲に供して了つたのは、此の新しい教でなくて何でせう？……」

彼の聲は慄へ、目は殆ど物狂ほしい程の憎惡に燃え、顔はまるで堪へ難い痛みでも感じた時の様に歪んだ。

レオナルドは黙つてゐた。彼の心中には到底言葉に表はす事の出来ないほど單純な、子供らしい晴れやかな想念が去來してゐたのである。彼はココセウムの壁の裂目越しに輝く、碧瑠璃の空を眺めながら、半ば崩れた建物の隙間から見た時ほど、空の紺青が永遠に若々しく感ぜられる事はない、などと云ふ事を考へて居た。

嘗て羅馬を征服した北方の野蠻人等が、土の中から鑛石を採掘する事を知らない爲めに、圓形劇場の壁の石と石を繋ぐ鐵棒を抜き取つて、古い羅馬の鐵で新しい劍を鍛へたものである。所が鳥共はその跡の穴に自分の巢を食つて居た。レオナルドは黒い鴉の群が樂しげな啼聲を立

て乍ら罅をさして下りて来ては、巢の中へ隠れるのをちつと注視しながら、此の建物を作つた全世界の命令者たる皇帝達も、それを破壊した野蠻人等も、自分等が一生懸命に働いてゐるのは要するに、『彼等は時かず刈らず收穫せず、されど天なる父これを養ひ給ふ』と聖書に録された者共の爲めであるとは、夢にも思はなかつたであらう——かう云ふ様な事を考へ耽つて居た。彼は別に辯駁しなかつた。マキアエリには理解が出来ないだらうと感じたからである。彼に取つて悦びであるすべての物は、ニココロに取つて悲しみであつた。彼の蜜はニココロの苦液であつた。即ちニココロに取つては、偉大なる憎みは偉大なる知識の娘なのである。

「時にレオナルドさん」例に依つて冗談で話の結びを付けようと思つて、マキアエリはかう言つた。「私は今始めて分りましたよ——あなたを異教徒だの無神者だのと云ふ連中は、大變な思ひ違ひをして居るのです。何うか私の言つた事を憶えてゐて下さい。我々を羊と山羊に區別する恐しい審判の日に、あなたは間違なく謙抑なる基督の羊の組へ入れますよ。有難い聖者共と一緒に天國へ行かれますよ！」

「あなたも一緒ですよニココロさん！」と畫家は笑ひ乍ら、言葉尻を押へた。「若し私が天國へ行くなら、あなたも逃れつこなしです。」

「いや何うして、私は眞平ご免ですよ！ 私は前以て誰でも他の望み手に自分の座を譲りますよ。」

私は此の世の倦怠だけで澤山です……」

彼の顔は突然人の好ささうな、愉快らしい光に輝き出した。

「まあ聞いて下さい。私は或時から云ふ意味深長な夢を見ました。誰かが私を饑ゑた汚らしいぼろ／＼の乞食や、坊主や、淫賣や、奴隸や、片輪や、低能兒などの集つて居る所へ連れて来て、これが聖書に『心の貧しき者は幸なり。天國は其の人の物なるべければなり』と言はれて居る者だ、と説明して呉れました。それから私は又別な處へ連れて行かれましたが、其處には昔の元老院議員の様な、堂々たる立派な人達が綺羅星の如く居並んで、その中にはホーマー、亞歴山大帝、プラトン、マルクス・アウレリウスなどと云ふ大將軍や、皇帝や、法王や、立法者や、哲學者などが居ました。彼等は科學や、藝術や、政治などの話をして居るのです。私はこれが即ち地獄であつて、彼等は神の前に出ると狂氣の沙汰に過ぎない、此の世の智識を愛したが爲めに、神に斥けられた罪人の魂である、とかう教へられました。お前は何方へ行き度い、地獄がいゝか天國がいゝかと訊かれた時、私はかう叫びました。『地獄がいゝです。勿論賢者や英雄のある地獄へ行きます！』

「さう、若しあなたの見た夢が本當だつたら、或は私も萬更……」とレオナルドは言つた。

「いや駄目です、もう遅い！ 今となつては逃れつこありません。無理にも引つ張つて行かれ

ますよ。あなたの基督教的善行に對しては、神も必ず基督教的の天國を以て酬いるに決つてゐます」

二人がコリセウムを出た時には、もう暗くなつてゐた。大きな黄色い月が、まるで眞珠の貝の様に透明な雲の層を切り開き乍ら、コンスタンチヌス教會の黒い圓天井の陰から浮び出た。チートゥス・エスバシアヌスの凱旋門からカピトリウムへ掛けて、一面に立罩めた煙の様な鳩羽色の霧を透して、マリヤ・リベラトリチエ教會の前に立つて居る、幻の様に蒼靄めた淋しい三本の圓柱が、月光を受けて尙一入美しく見えた。そして黄昏を告ぐるアンジュラスの、老いぼれた片言のやうな鐘の音は、古羅馬の中央廣場を弔ふ哀泣のやうに響いて居た。

第十四編 モナ・リザ・ジオコンダ

レオナルドは「繪畫論」の中にかう云ふ事を書いてゐる。

「肖像畫を書く爲めには特別の畫室が必要である——それは長さ二十エル、幅十エルの長方形の庭で、壁は暗い色に塗り上げ、其の上には屋根の軒が突き出して居なければならぬ。それから別に帆布の庇を設けて、必要に應じて擴げたり縮めたりして、日光を遮る様にするのが肝腎である。帆布を張らずに書いてよいのは、只黄昏時か雲や霧の多い日だけである。これは光線として尤も完全なものである」

丁度かう云ふ風な肖像用の畫室を、彼は自分の寄宿してゐるフロレンス人の家に建てた。これは有名な元老院議員のセル・ピエロ・デバルト・マルテリと云ふ人で、數學に深い興味を持つてゐるので、レオナルドに對しても好感情を抱いて居た。彼の家はサン・チオヴンニの廣場から、パラッツォ・メデチの方をさして行くと、マルテリ街の左側から二軒目に當つてゐる。

千五百五年の春も終る頃の、静かな温い霧のぼうと立罩めた日であつた。太陽は濕り氣を帯びた雲の紗を通して、鈍い水底の様な光を以て照らし乍ら、煙の様に溶けて了ひさうな優しい影を落してゐた。それはレオナルドに言はせると、女の顔に特殊な美しさを與へる、彼の大好きな光線であつた。

「一體來ないのか知らん？」殆ど三年の間彼として異例の根氣と努力とを以て、肖像を描き續けてゐる女の事を考へて、彼はかう獨り語ちた。

彼は彼女を迎へる爲めに畫室を整へた。デオヴニはそつと彼の様子に氣を付けて、いつも平靜な師に不似合な落着きのない期待の情——と云ふより寧ろ焦燥の色に一驚を吃したのである。

レオナルドは棚の上にある様々な繪筆や、パレットや、繪具の入つた壺などを整頓した。繪具はすつかり、落着いて了つて、まるで氷でも張つた様につやつやした膠質の薄皮に表面を蔽はれて居た。それから運搬自在の三脚に載せてある肖像畫から、麻布の蔽ひを取り外した後、庭の眞中にある噴水の栓を抜いた。これは彼女の心を慰める爲めに彼が作つたもので、上から落ちて來る水が硝子の球に當つて、球はくるく／＼廻りながら、微妙な靜かな音樂を奏する仕掛けになつてゐた。噴水の周りには彼が手づから植ゑて、大切に育て上げた、彼女の好きな菖蒲の花

が咲いてゐる。彼は又小さく切つたパンを箱に入れて持つて來た。それは此の庭を徘徊してゐる牝鹿にやる爲めなので、彼女は手づから此の牝鹿に餌をやる事になつて居た。最後に彼は格子の凭り掛りと肘懸けの附いた、滑らかな檜の木で造つた安樂椅子の前なる、ふつくらとした毛氈を直した。此の毛氈の上には、同じく彼女を娛しませる爲めに買はれた、亞細亞産の珍しい白猫が、もう何時もの様にやつて來てごろ／＼喉を鳴らして居た。此の猫は右の方が黄玉の様に黄色くて、左の方が緑玉の様に青い、色の異つた二つの目を持つてゐるのであつた。

アンドレア・サライノは譜を持つて來て、ギオラの調子を合せ始めた。やがて今一人アタランテと云ふ音樂師もやつて來た。レオナルドは未だミランに居る頃から、モローの宮廷で此の男と知合になつたのである。彼は殊に畫家の發明に係る、馬の頭のやうな恰好をした、銀の琵琶で彈奏するのが上手であつた。

彼は肖像畫のモデルになる人に有り勝な倦怠を避ける爲めに、レオナルドは優れた音樂師や、歌唱ひや、話し家や、詩人や、頓智の巧い座談家などを自分の畫室へ招いて、彼女の氣を紛らすのであつた。彼は座談や、物語や、音樂などに依つて呼び醒される思想感情の變化を、彼女の顔面で研究した。

其の後かうした集りは段々少なくなつた。彼はもう其様な物の必要がない、そんな事をした

くても彼女は退屈しない、と云ふ事を知つたのである。たゞ二人の仕事を助ける音楽だけは絶えず奏せられた。何故と云つて彼女も亦、自分の肖像を描く仕事に關係して居たからである。支度はすつかり濟んだが、それでも彼女は未だ來なかつた。

「一體もう來ないのだらうか？」と彼は考へた。「今日は光線も陰影も丁度あの人に誂へ向きなだけでなほ。使でもやらうかしらん？ 併し私が何れ位待つて居るかと云ふ事は、あの人だつてちやんと知つて居る筈だ。屹度來るに相違なし」

デオブンは彼の不安な焦燥の念が、刻々募つて行くのを見て取つた。

突然軽い一陣の風が微かに噴上げの水を吹き靡かせた。硝子の球は微妙な音を立て、白い菖蒲の花弁は水煙りを受けて戦いた。敏い牝鹿は頸を伸して聞耳を立てた。レオナルドも耳を澄ました。デオブンは自分では何も聞かなかつたけれど、師の顔色に依つて彼女の來た事を曉つた。

初め謙抑な會釋をしながら、尼のカミラが入つて來た。之は彼女の家に住んでゐる女で、いつも彼女の伴をして此の畫室へ來るのであつたが、不思議に身を潜めて目に立たない様にする癖があつて、いつもつましやかに祈禱書を手にして片隅に坐つた儘、目も上げなければ口も利かないので、此の三年間レオナルドは殆ど彼女の聲を聞いた事が無い位であつた。

カミラ尼の後から、此處で皆の待ち設けてゐる人が入つて來た——それはじみな黒い着物を身に纏ひ、額の眞中邊まで黒い透き通つた紗を垂らした、年の頃三十ばかりのモナ・リザ・ジオコンダであつた。

ベルトラフィオの知つてゐる一切の事を綜合すると、彼女は嘗て富裕であつたけれど、九十五年の佛蘭西軍侵入の際家産を蕩盡した、ナポリで古い家柄のアントニオ・マラルチニの娘で、フロレンスの市民フランチェスコ・デル・ジオコンダの妻であつた。千四百八十一年彼はマリ・アノルチニの娘を娶つたが、二年経つと彼女が此の世を去つたので、トムマザ・ギラニと結婚した。けれど此の女も矢張り死んで了つた。モナ・リザは實に三人目の妻であつた。レオナルドが彼女の肖像を描き始めた時は、もう五十歳を越してゐた。そしてモナ・リザの良人ジオコンダ氏は四十五であつた。彼は十二參事員の一人に選舉されて、やがて僧院長にもなるべき人であつた。彼は何時如何なる處でも無數に見受ける事の出来る様な、極めて平凡な人間で、大して悪くもなければ大して良くもなく、非常に事務的で打算的で、勤務と農村經營に没頭し盡してゐた。優美な若い婦人は彼の目に、何より相應しい家の飾りとして映つたけれど、モナ・リザの美點は、新しいシンシリヤ種の牡牛の特長や、羊の生皮に關稅を課する利益ほどには分らなかつたのである。噂に依ると彼女が結婚したのは愛の爲めではなく、單に父の意志に反かぬ爲めに過ぎない。

そして彼女の初戀の男は失望の爲め、自ら進んで戰場で討死したとのことである。又彼女には熱烈で根氣強い、とは云へ何時も望みを遂げた事のない、崇拜者が大勢ゐると云ふ噂もあつたけれど、それは根の無い作り言かも知れない。併し口善悪ないも京童（フロレンス）にはさう云ふ連中が少くなかつたので、ジオコンダについては、何一つ悪口が言へなかつた。静かであつた。静かであつた。信心深く、教會の儀式を厳重に守り、貧民に對して憐み深い彼女は、善良な主婦であり貞淑な妻であり、十二になる少女のデアノラに對しては、繼母と云ふよりは寧ろ優しい生みの母であつた。

これが彼女についてデオヴンニの知つて居るすべてであつた。併しレオナルドの畫室へ來るモノ・リザは、まるで別な女のやうに思はれた。

三年の間にも、時は此の奇妙な感情を弱めないばかりでなく、却つて益々深めて行くのであつた。彼女が姿を現はす度に、まるで何かの幻でも見る様に、彼は恐怖に似た異様な驚きを感じるのであつた。時々彼は自分で自分に此の心持を説明して、之は屹度彼女の顔を肖像で見馴れた爲めだらう。師の藝術が餘り偉大なので、却つて生きたモノ・リザが現實の者でない様に思はれるからだらう——とも理窟をつけて見たが、併しそこには何か別な、もつと神祕的な或物があつた。

レオナルドが彼女を見得る機會は、たゞ仕事をしてゐる時だけで、其處には是非誰か他の人が居た——時とすると招待された音樂師などが大勢の事もあるし、時には必ず離れる事のない尼のカミラ一人切りの事もあつたが、二人丈け差向ひになる事は無かつた。デオヴンニはそれをよく知つて居た。がそれにも拘らず彼は二人の間に何か祕密があつて、それが二人を接近させ、且つ周圍の人々から遠ざけてゐるのを感じた。彼は又それと同時に、この祕密を決して戀ではない、少くとも人が戀と名づけてゐる物でない、と云ふ事を確かに知つてゐた。

彼は嘗てレオナルドから、すべての畫家は人の顔や體を描くときに、自分自身の顔や體を模倣する傾向がある、といふ事を聞いてゐた。レオナルドは此の理由を説明して、人間の魂は肉體の創造者であるが故に、新しい肉體を描かうとする度に、嘗て一度自分の創造したものを又繰返さうと努力するのだと説明した。此の傾向は極めて強烈なものであるから、時としては肖像畫の中に於て、描かれた當人との外部的類似の下を潜つて、畫家自身の顔——少なくとも魂が閃めいて見える事がある。

今デオヴンニの眼前で起りつゝある事は、更に不思議であつた。單に畫の上ばかりでなく、當の生きたモノ・リザまでが、長い間始終一緒に暮してゐる人に何うかすると見受けられる様に、段々とレオナルドに似て行くのであつた。尤も此の次第に著しくなつて行く相似點は全體

の輪郭でなく(尤も此の點に於ても最近驚く程酷似して來たけれど)、主として眼の表情と微笑の中には、つきりと窺はれるのであつた。彼は之と同じ微笑を、レオナルドの師エロッキオの彫刻した「基督の傷口へ手を差し入るゝ不信のトマス」にも、レオナルドが始めて描いた「智恵の木の前に立てる人類の母イヴ」にも、「窟の處女」の天使にも、「白鳥を抱けるレダ」にも、その他師がモナリザを知らない頃に作つた多くの畫にも、素描にも彫刻にも見受けたことがあるのを想ひ出して、名状すべからざる驚きを感じたのである。それは丁度レオナルドが一生涯の間すべての作品に於て、自らの美の反映を探し求めた揚句、遂にチオコンダの顔に於てそれを發見した様な工合であつた。

何うかすると、かうした二人に共通の微笑をぢつと眺めてゐる中に、チオヴンニはまるで奇蹟の前に立つたやうに息の窒る様な、殆ど恐ろしい程の氣持がして來るのであつた。現が夢か、夢が現か分らなかつた。何だかモナリザがフローレンスの市民チオコンダといふ、極めて平凡な人物の妻でもなければ、又全體として生きた人間でもなくて、師の意志に呼び起された幻のやうな存在物ではないか、といふ様な氣持がした——レオナルド自身の女性の分身ではないか、とさへ感じられたのである。

チオコンダは自分の膝へ飛び上つた、祕藏の白猫を撫でゝやつた。すると目に見えぬ閃光が、

細く優しい指の下で、あるか無きかの微かな音を立て乍ら飛び交ふのであつた。

レオナルドは仕事を始めた。が急に刷毛を置き乍ら、ぢつと注意深く彼女の顔に見入つた。此の顔に表れる極めて微細な陰影も變化も、決して彼の視線を逃れる事は出来なかつたのである。

「奥さん」と彼は言出した。「あなたは今日何か御心配事がおありの様ですね？」

チオヴンニも同じ様に、今日は彼女が何時も程自分の肖像に似て居ない様な氣持がした。

リーザは落着いた視線を上げて、レオナルドを眺めた。

「えゝ少々ばかり」と彼女は答へた。「チアノラが一寸加減が悪いので、私昨夜はまるで眠りませんでしたの」

「お疲れになつたのかも知れません。今日は屹度肖像どころでないのでせう？　いつそ止めませうか？……」

「いゝえ構ひません。だつてあなた、こんな日を勿體ないぢやありませんか？　御覽なさい、何といふ柔かい蔭でせう、何といふしつとりした太陽でせう！　私はね」一寸無言の後、彼女は言ひ足した。「あなたが待つていらつしやる事をよく承知しておましたの。もつと早く伺ひたかつたんですけれど、一寸お客様に留められました……ソフ・ニスバの奥様ですの……」

「それは一體誰ですか？ あゝさう／＼、知つてゐます。まるで廣場の女行商人の様な聲をして、香水屋の店か何ぞの様にぶん／＼匂はせてゐる人でせう？」

デオコンダは、つと薄笑ひを浮べて、

「ソフォニスバ様は」と彼女は語り續けた。「昨日大統領夫人のアルゼンチナ様が、ゴッキオ宮殿でお催しになつた夜會の事を、是非共私に話して聞かせなければ承知なさらないんです。食事の時に何んなものが出たかだの、何んな衣裳を着てゐたかだの、誰が誰の媚を得ようと骨折つたかだの……」

「あゝ矢張りさうだ！ あなたのお氣分を悪くしたのはデアニラの病氣でなくつて、あのお饒舌の無駄話なんです。全く不思議な位ですよ！ あなたお氣が付いたか何うか知りませんが、何うかすると一寸傍の人から聞いた、何の關係もない詰らない話——つまり世間の愚かしい陋劣な話なんです。そんな話の方が強烈な悲哀よりも、寧ろ餘計に魂を曇らせたり搔き亂したりするものですよ」

彼女は無言の儘首を傾けた。見受けた所二人はもうずつと以前から、物を言はないでも只一寸暗示だけで、對手を了解する習慣がついてゐるらしかつた。

彼は再び仕事を始めようと試みた。

「何かお話を聞かして下さいな」とモナ・リザが言つた。

「何にしませう？」

彼女は一寸考へた後にかう言つた。

「ギーナスの王國のお話を」

彼の話の中でリザの氣に入つたのが幾つかあつた。それは主に自分や他人の思ひ出や、旅行談や、自然の觀察や、畫の構想などであつた。彼はいつもさういふ話を、靜かな音樂の音に附れて、いつも同じ單純な、子供らしい言葉で物語るのであつた。

レオナルドは合圖をした。するとアンドレア・サライノはギオラで、アタランテは馬の頭骨の様な恰好をした銀の琵琶で、豫め「ギーナスの王國」の物語の伴奏として選ばれた曲を奏し始めた。其の時彼は持前の細い女の様な聲で、まるで古唄か子守唄でも歌ふ様な風に話し出した。「キリキヤの海岸に住んでゐる船乗りの話に依ると、波の上で死なねばならぬ運命を持つた人は、どうかすると恐しい嵐の最中に、愛の女神の王國キプロス島を見る事があります。周りに波と嵐と龍卷が荒れ狂つてゐるのに、多くの船乗は島の美しさに牽寄せられて、渦卷に圍まれた大岩に自分の船を打つ付けて死んで了ふのです。あゝ何れ位澤山の船が碎けて沈んだ事でせう！ 島の岸の上には今でも其の哀れた残骸が、半分砂に埋れて、海草に絡みつかれてゐる

1921. 6. 21.
4110

のが見えます。船を突き出してゐるのもあるし、艦を覗かしてゐるものもあり、半分腐つた死骸の肋骨みたいな、胴の丸太を露はしたのもあれば、櫓の破片を曝してゐるものもあります。それが餘り澤山あるので、丁度海が自分の懐で亡びた一切の船を出して見せると云ふ、復活の日か何ぞの様に思はれる位です。所が島の上には永遠に碧い空が連なつて、花に蔽はれた丘の上には太陽が輝き、大氣の静かな事と言つたら、神殿の前の階段に置いてある香爐からは、長い焰が真直に動かずに立昇つて、まるで鏡の様に滑らかな湖水に影を映してゐる、白い圓柱か黒い絲杉の様なのです。只噴上の水が端を溢れて、澤山な雪花石を順々に流れ傳ひながら、快くさらさらと鳴つてゐるばかりです。さうして海に溺れる人々は此の静かな海を近々と眺める譯なのです。風は彼等の鼻へ桃金娘のえならぬ香りを吹き送る——かうして海で嵐が凄ければ凄い丈け、キブリダの王國の静けさは彌々深くなつて行くのです」

彼は口を噤んだ。と琵琶とギョウの絃も鳴り止んで、すべての音に優つて美しい静寂——音楽の後の静寂が襲うて來た。たゞ噴上の水のみは半圓形の硝子に當つて、潺々と鳴つてゐるのみであつた。

するとモナ・リザはまるで音楽で眠りを誘はれて、静寂の爲めに現實から隔てられたかの様に、畫家の意志以外すべての物に何の關りもない、澄み渡つた顔付をしながら、神祕に充ちた

微笑を以て、ひたと真正面に彼を見詰めるのであつた。それは丁度静かで透明な、とは云へ深い水の様な微笑であつた。何んなに視線を凝らして、試つすがめつ眺めても底の見えない様な微笑——つまりレオナルド自身の微笑と同じ物であつた。

此の時デオヴンキには、レオナルドとモナ・リザとが、互に相反射しながら無限に深くなつて行く、二つの鏡の様に感じられた。

二 パラッポ

翌日の朝畫家はパオツタ・ゴッキオで「アンギアリの戦ひ」の勞作に従事してゐた。

千五百三年羅馬からフロレンスへ來て間もなく、彼はフロレンス共和國の終身大統領ピエロ・ソデリニから、パラツタ・ゴッキオのシニオリヤ宮殿内に新しく出來た、會議室の壁に何か後世に残すべき戦闘の繪を描いて呉れ、といふ注文を受けたので、畫家はフロレンス軍が千四百四十年アンギアリで、ロムバルチャ王フィリッポ・マリヤ・ギスコンチの指揮官、ニコロ・ピチニを打破つた、有名な戦闘を選び出したのである。

會議室の壁にはもう繪の一部分が出來てゐた。それは四人の騎士が入り亂れて、軍旗を争つてゐる處であつた。長い柄の先にはぼろ／＼の旗がひら／＼と揺へて、柄は中途から折れてゐ

る。五本の手がそれを掴んで、各々違つた方向へ引いてゐる。空中には幾本かの劍が組み合されて、人々の口が大きく開かれて居る所から推して見ると、その中から狂暴な叫び聲の發してゐるのが察しられた。ひん曲つた人間の顔は、鐵の甲を着た昔話の妖怪の様な馬の顔に、敢て劣らない位恐しかつた。人間の狂憤は動物にまで感染して、馬は後足で突つ立ち上り乍ら前足を絡み合はせて、耳を伏せ、物凄く引つ吊つた腫を輝かせ、まるで猛獸の様に齒を剥き出しつ、互に咬み合つてゐるのであつた。馬の足下の血泥の中では、一人の男が敵の髪を掴み乍ら、頭を地びたへ叩き付けて殺さうとして居る。而も二人共直ぐに踏み潰されて了ふと云ふ事に、氣が付かないのである。

それは有り丈の恐しい姿を見せた戦争であり、無意味な争闘である。レオナルドの言葉を假りると、「最も獸的な愚かしい行ひ」である。其の跡には一箇所として、血の流れぬ場所は残らない様な戦ひである。

彼がやつと仕事を始めたか始めないかに、がらんとした廣間の煉瓦床を音高く鳴らしながら、人の足音が近づいた。彼はその音を聞分けて眉を擡めた。

それは大統領のピエロ・ソデリニであつた。彼はニコロ・マキアエリの所謂、冷くもなければ熱くない只微温で、黒くもなければ白くもない、只灰色をした様な人間の一人であつた。小商

人の成上りから高位に昇つた連中の子孫である、フロレンスの市民が彼を共和國の首領に選舉したのは、彼がすべての點に於て外の者と違つた所のない、従つて誰に取つても異存もなければ危険もない、極めて平凡な人物であるからして、自分等の爲めに従順な道具となつて呉れるだらう、とかう考へたが爲めなのである。けれどもそれは間違ひで、ソデリニは貧しき者の友であり、人民の辯護人であると云ふ事が分つた。とは言へ誰もそれを重大視する者はなかつた。何故と云つて、それにしても彼は要するに、極めて取るに足らぬ人物だつたからである。彼は國家的手腕の代りに官吏式の勤勉癖を有し、英智の代りに常識的な分別を、善行の代りに善良心を持合せてゐるのであつた。彼の妻マドンナ・アルゼルチーナは、恐しく鼻柱の強い制御し難い女で、良人に對する輕蔑の情を隠さうとしずに、いつも彼を「家の鼠」とより外呼んだ事がないと云ふ事は、世間一般へ知れ渡つてゐた。全くピエロ氏はお役所の床下に巢くふ、年取つて仲間の者から尊敬されてゐる、大鼠の様な感じを與へるのであつた。何んな政治家でも、丁度機械に油が要るのと同じ様に、生れつきの機敏さと陋劣さが必要なのであるが、彼にはそれさへも無かつた。共和主義者としての潔白を持してゐる爲めに、まるで板の様に無味乾燥で、剛直堅固で、平板單調で、而も飽く迄高潔不屈なので、マキアエリの言ひ草に依ると、「まるで洗ひ立ての襯衣の様に石鹼の匂ひがぶん／＼する」のであつた。彼はあらゆる人を和解せし

めようとして、たゞすべての者を苛立たせるのみに過ぎなかつた。そして金持の御機嫌を取る事も出来なければ、貧しい者を助ける事も出来なかつた。かうして彼は一生涯二つの椅子の真中に坐つて、二つの砲火に挟まれてゐたので、謂はゞ黄金の如き中庸の殉教者であつた。

ある時ソデリニの保護を受けてゐたマキアエリイは、墓碑銘の様な體裁で彼に宛てた短嘲詩を作つた。

我がピエロソデリニの逝きし夜、

その魂は、あはや地獄へ行かんとしたり。

「何處へ行くや呆者？」ブルトンはかく彼に叫びぬ。

「寧ろ幼き子等の爲め、中の世界へ行きねかし！」

註文を引受ける際、レオナルドは非常に窮屈な契約書に署名しなければならなかつた。つまり少しでも期限が延びた場合には、損害賠償を支拂ふと云ふのである。共和國の高官達は、まるで小店商人の様に自分達の利益を守るのであつた。お役所風の文書の交換が大好きなソデリニは、足場の材木から、漆、曹達、石灰、繪具、亞麻油、その他ごたくした買物の爲めに國庫から支出した金は、一錢二錢の端た迄、正確にその用途を明かにするようにと、五月蠅い程レオナルドを責め付けるのであつた。レオナルドはモローとかツェーザルとか云ふ、大統領の所謂

暴君の宮廷に勤めた時、町人式平等の王國たる此の自由共和國に勤めてゐる時ほど、甚だしい屈辱を経験した事は嘗て一度も無かつた。それに何より困るのは、藝術の方面で何等の才能もない無知な人々の大多数と同じ様に、此のピエロも畫家に忠言を與へたがる癖があつた。

ソデリニはレオナルドに向つて、アレクサンドリヤの白色顔料三十五斤買入れの爲め支出した金が、報告書に載つてゐないが、何うしたものかと問ひ掛けた。畫家は顔料は未だ買つてない、そして金は何に費つたか覺えてゐない由を自白して、其の金を國庫へ返却する事にしようと言ひ出した。

「何を言はれるんですか、何を！ 飛んでもないレオナルド君。私は只正確に秩序を立てる爲めに言つて見た丈けぢやありませんか。何うか深く咎めないで下さい。君も御覽の通り、我々はずかしい平凡な人間なんですから、スフォルツアとかボルジアとか云ふ、立派な皇帝達の贅澤に比べたら、我々の勤儉主義は君の目に吝嗇と見えるかも知れないが、何うも仕方ありませんよ。無い袖は振れない道理ですからね。我々は専制君主ぢやなくて、單に人民の使用人に過ぎないから、一ソルヂの金も其の費途を明らかにする義務がある譯です。何故と言つて、官金といふものは神聖なもので、その中には寡婦のつましい金もあれば、正直な労働者の汗の雫もあり、兵士の血潮も籠つてゐる譯ですからね。皇帝は一人切りだけれど、我々の數は澤山ありま

す。而も我々はすべて法の前に平等なんですよ。さうぢやありませんか、レオナルド君！ 暴君は君に金貨を以て拂つたけれど、我々は銅貨を以て拂ふのです。併し自由の銅は屈辱の黄金に優つてゐます。穩かなる良心は如何なる報酬よりも貴いぢやありませんか？……」

レオナルドは賛成した様な振りをして、無言の儘聞いてゐた。丁度旅人が街道で埃の渦巻に襲はれた時、頭を垂れ目を瞑つて待つて居る様に、彼は物憂げな従順の色を浮べ乍ら、ソデリニの言葉が終るのを待つてゐた。かうした平凡な人間の平凡な言葉の中に、レオナルドは争ふ事の出来ない自然の力に似た、盲目で頑強な征服し難い力を感じた。一見した所それは平板な言葉のやうであるけれど、少し注意深くその意味に想を到らすとき、彼は恐しい空虚な、眩惑くらほくな様な深淵を覗き込む氣持がした。

ソデリニは話に夢中になつて、對手を論争に引込み度くて堪らなくなつた。彼は畫家の痛い所へ觸れる爲めに繪の話が始めた。

圓い銀縁の眼鏡を掛けて、如何にも鑑賞家らしい物々しい顔付をしながら、もう仕上げの濟んだ部分を仔細に眺め出した。

「見事だ！ 實に驚く！ 何といふ肉付けだらう、何といふ正確な遠近法だらう！ それに馬、まるで生きた馬の様だ！」

それから見込はあるけれど、何うも少し勉強の足りない生徒を見る教師の様な態度で、人の善さうな、とは云へ嚴格な目付をし乍ら、眼鏡越しに畫家をじろりと見遣つた。

「だがレオナルド君、いつも言ふ事だけれど、今日も私は繰返して言ひますよ——若し君が始めた時の様な態度で此の繪を完成したら、此の繪の効果は餘りに重苦しくて、人を壓倒して了ふ様なものになるでせう。それに、(甚だ無聊な言葉ですが、何うか腹を立てんと下さい。私は何時も面と向つて正直な口を利く質まなんだから)、我々が望んだのは違ふ様です……」

「では何を望まれたのですか？」畫家は臆病げな好奇心を浮べてかう聞いた。

「外でもありません、あなたの手で我が共和國の武威を、子孫に永久に傳へて貰はうと思つたのです。永遠に記念すべき我國の勇士の武勳を描いて欲しかつたのです——つまり何かその人の魂を向上させて、祖國に對する愛と市民の勇氣の立派な手本を示して欲しかつたのです。假令事實に於て戦争は、君が描き現された様な恐しいものであるにもせよ、何うしてそれを高尚なものとして修飾する事が出来ないものでせう。少くとも極端な點を柔らげたつていゝでせう。何故と云つて、何事につけても程度といふ事が肝腎ですからね。或は私の考へは間違つてゐるかも知れませんが、併し畫家の本當の使命は、教へ導くといふ事に依つて、人民に益を齎す點にあると思ひます……」

人民の利益といふ事を話し出した彼は、もう止まる術を知らなかつた。彼の目は平凡な常識の感興に輝いて、單調な聲の中には石を穿つ點滴の執拗さが響くのであつた。

畫家は麻痺した様に無言の儘ぢつと聞いてゐたが、時々ふと我に返つて、一體此の道德家が藝術を何と思つてるのだらうかと、一生懸命に想像して見ようとした。彼はまるで人間がどうよと溢れて、一分間もぢつとしてゐたら息の切れさうな程、むつとする様な匂ひに充ちた、室の中へでも入つた様な息苦しい氣持がした。

「人民に益を齎さない藝術は」とビエロは言つた。「閑人の娛みです、金持の見得から出た氣紛れです、暴君の贅澤です。さうぢやありませんかね？」

「勿論さうです」とレオナルドは同意した後、やつと見えるか見えないか位の微笑を目に浮べながら言ひ足した。「所で何うでせう閣下？ 二人の間の古い論争を打切つてしまふ爲めに、かうして見ようぢやありませんか。つまり此の會議室に人民の總會を催して、私の畫が人民に利益を齎し得るか何うかと云ふ事を、フローレンス共和國の市民が黒白の玉を使つて、多數決に依つて決めるのです。さうすると、二重の利益を得られる譯です。第一に只玉の數を數へさへすれば、それで眞理が分りますから、數學的に正確を期する事が出來ます。第二に、如何に事理に明るい聰明な人でも、一人だつたら誤謬に陥る恐れがありますが、假令無知な愚かな者でも一

萬二萬と一緒になつたら、決して間違ふ心配はありません。何故と言つて民の聲は神の聲ですからね」

ソデリニは直ぐには合點が行かなかつた。彼は黒白の玉の神聖なる働きに對して殆ど敬虔の念を抱いてゐたので、誰にもあれ、此の神祕を嘲笑しようなどは、夢にも考へてゐなかつたのである。やつと始めて合點が行つた時、彼は鈍い驚き——といふより殆ど憎えた様な目付で畫家を見詰めた。そして圓つこい小さな鈍い目は、まるで猫の匂ひを嗅ぎ付けた鼠の様に、くるくると廻り乍ら邊りを見廻した。

尤も彼は直ぐに氣を取直した。生れつきの性質として、彼は全體に畫家といふものを、常軌を逸した人間と見做してゐたので、レオナルドの冗談にも別に腹を立てなかつた。

けれどもビエロは氣が鬱して來た。もと／＼彼は自分で此の人の恩人だと思つてゐた。何故と言つて、レオナルドが祖國の敵たるツェーザル・ボルジャの爲めに、フローレンス附近の軍用地圖を製作したので、彼は取りも直さず國家に對する裏切人であると思ふ噂があるにも拘らず、ソデリニは自分の徳の感化に依つて、畫家を悔い改めさせ事が出來ると思つて、寛大にも彼を共和國附の畫家に招聘したからである。

やがてビエロは會話の調子を變へて、今度はもう上官らしい事務的な顔付をし乍ら、何彼の

話の序でに、ミケランゼロ・ブオナローチイが、同じ會議室の反対の壁に戦闘繪を描くやうに、註文を受けたと云ふ事を知らせると、素氣なく別れを告げて立去つた。

畫家はその後を見送つた。灰色の着物を着て、胡麻鹽の頭をして、背中が圓くて足の曲つた彼の姿は、離れて見ると一層鼠の様に思はれるのであつた。

三

ゴッキオ宮を出ると、レオナルドは廣場に据ゑられたミケランゼロの彫像「ダギデ」の前に立止つた。

此處フロレンス城塞の門の傍には、まるで見張りの番兵か何ぞの様な白大理石の巨人が、嚴めしくすらりとした塞の薄黒い石を背景に、くつきりと浮き出してゐるのであつた。

眞裸な青年の體は何方かと言へば瘠せぎすであつた。右投の道具を持つた右手は下へ垂れて血管がまさ／＼と浮出してゐるし、胸の邊まで差上げた左手には、一つの石を握つてゐた。兩の肩は八の字に寄つて、その視線はちつと狙ひを定める様に、遙か彼方へ注がれて居た。そして低い額の上には房々とした髪が、さながら冠の様に渦巻いてゐるのであつた。その時ふとレオナルドは「サムエル前書」の一節を想ひ起した

「ダビテ、サウルに曰ひけるは、僕さきに父の羊を牧るに、獅子と熊來りて其の群の羊を取りたれば、其の後を追ひて之を搏ち羊を其の口より救ひ出せり。而して其の獸我に猛り掛りたれば、其の鬚を捕へて之を撃ち殺せり。僕は既に獅子と熊とを殺せり。此の割禮なきペリシテ人もこの如くなるべし(中略)。ダビテ手に杖を取り谿間より五つの滑かなる石を拾ひて之を其の持つる牧羊者の具なる袋に入れ、手に投石索を取りてかのペリシテ人に近付く。ペリシテ人進み來てダビテに近づき汝杖と石とを持ちて來る、我あに犬ならんやと。ダビテ言ひけるは否犬よりも劣れり。今日エホバ汝を我手に付し給はん。我汝を討ちて汝の首を取り、ペリシテ人の軍勢の尸體を空の鳥と地の獸に與へて、全地をしてイスラエルに神ある事を知らしめん」

サヲナローラの彘刑にされた廣場に立つてゐるミケランゼロの「ダギデ」は、かのジッロラモが空しく呼び求めた豫言者の様にも、又マキアエリイが翹望してゐる英雄の様にも思はれた。

レオナルドは自分の競争者の此の製作の中に、殆ど自分の魂に相匹敵する程偉大であるけれど、併し永久に相反した魂を感じたのである。それは行爲と瞑想、暴風と靜寂ほどに相反した性質のものであつた。まるで自分に縁の無い此の力は彼を牽き寄せ、もつと傍へ近寄つて底の底まで見究め度いと云ふ希望と、好奇の心とを呼び醒すのであつた。

嘗てフロレンスの中央寺院マリヤ・デル・フィオレの建築場に、下手な彫刻家の爲めに傷つけ

られた、大きな白大理石が轉がつてゐた。優れた彫刻家達は、もう何の役にも立たない石として、その仕事を断つて了つたのである。

レオナルドが羅馬から來た當時、彼もその仕事を薦められたのであるが、持前の悠りした態度で、石を計つたり見込みを立てたりして躊躇して居る中に、彼より二十三年の若い今一人の藝術家ミケランゼロ・ブオナロッチイが、此の註文を横取りして、殆ど信じる事も出来ない程の速力を以て、畫の中ばかりでなく夜も灯火の下に仕事を續けながら、二十五ヶ月の間に此の巨像を完成した。レオナルドは粘土を材料としたスフォルツァの巨像の爲めに、十六年間も働き通した位であるから、こんな大きい大理石像の爲めには何れ位の歳月を要するか、考へるのも恐しい位であつた。

フロレンスの人々はミケランゼロを、藝術の上に於けるレオナルドの競争者と宣言した。でブオナロッチイは此の躊躇もなく此の挑戦を受けたのである。

今度會議室の戦闘畫に着手する事になつた時、彼はそれ迄殆ど繪筆を握つた事もない辯に、無分別としか思はれない程の勇氣を奮つて、繪畫の方でもレオナルドと競争を始めた。

競争者がつつましやかな好意に充ちた態度を示せば示す程、ブオナロッチイの憎悪は益々劇烈になつて行つた。レオナルドの落着きは彼の目に侮蔑と映るのであつた。彼は病的なほど疑り

深い態度で、市井の根なし草に耳を傾け、争論の口實を求め、機會ある毎に敵の心を刺さうとするのであつた。

ダビデが完成された時、元老達はフロレンス一流の畫家や彫刻家達を集めて、何處へ此の像を据ゑるべきかと云ふ事を協議させた。その時レオナルドは建築家ジュリヤノ・ダサン・ガロの意見に賛成して、此の巨像はシニオリヤ廣場のオルカニヤ涼廊の奥にある、中の拱門の下へ据ゑるべきだと主張した。此の話を聞いたミケランゼロは、「レオナルドは嫉妬の念の爲めに、太陽が決して大理石を照らす事のない、一番暗い隅つこへダビデを隠して、誰の目にも觸れさせまいと思つてるのだ」と公言した事もある。

ある時レオナルドがダ・コンダの肖像を描いてゐる、四方に黒い壁を廻らした庭中の畫室で、例の様に大勢の畫家が集つたとき、ボライオリ兄弟や、サンドロ・ボチチェリ老人や、フィリップポ・リ、ピイヤ、ロレンツォ・ヂ・クレイヤ、弟子のベルヂノなどの間に、繪畫と彫刻と二つの藝術の中何方が上に屬すべきかと云ふ、當時の藝術家に取つて興味のある論争が始つた。

レオナルドは無言で聞いてゐたが、人々に意見を迫られたとき、彼はかう言つた。

「私の考へるには、藝術は工藝に遠ざかれば遠ざかる程、それだけより完全なものです」
そして眞面目なのか冗談か分らない様な、曖昧な何方つかずの微笑を浮かべながら彼は言ひ足

した。

「此の二つの藝術の主なる相違點は、繪畫の方がより多く精神的努力を要するに反して、彫刻の方は肉體的努力を要求する所に在るのです。粗野な堅い石の中に丁度核心の様に閉ち籠められてゐる形を、彫刻家は鑿と槌とでこつ／＼大理石を切り進み乍ら解放するのですが、その際まるで日備取の様な肉體力の緊張と、極度の疲勞を忍ばなければなりません。彼の體は汗にまみれて、それが埃と混つて不潔な物となり、その顔は汚れて、まるでパン焼きの様に大理石の粉で眞白になり、着物は雪でも掛つた様に石の碎片で蔽はれ、家の中は石と埃で一杯になつて了ひます。所が畫家は優美な着物をきて、靜かに自分の畫室に坐りながら、快い繪の具のついた軽い繪筆をすらく／＼と動かすのです。又その住家は明るくて清潔で、美しい繪に充され、常に靜寂が領してゐる上に、彼の仕事は音樂とか、談話とか、讀書などで和らげられます。而もそれは決して槌の音とか、その他様々な不愉快な騒音の爲めに妨げられる事がありません……」

レオナルドの言葉はミケランゼロに傳へられた。彼はそれを自分に對する當てこすりと解釋したが、憤怒の情を抑へ付けて、只一寸肩を練めながら、皮肉な冷笑を浮べながらかう反駁したのみである。

「ふん、居酒屋の女中の私生兒のダギンチ君が、お上品な貴公子を氣取りたいなら、勝手にさ

うするがよい。私は古い家柄の流れだけけれど、決して自分の仕事を恥としないし、又つまらない日備持ぎの様に、汗や汚れを厭ひもしない。所で繪畫と彫刻と何方が優れてゐるか云ふ事になると、それは全く馬鹿々々しい爭論だ。すべての藝術は同じ根源から發生して、同じ目的に向つて精進してゐるのだから、皆一樣な價值をもつてゐるのだ。假令繪畫が彫刻に勝ると斷言する人が、その他の多くの事物に精通してゐるとしても、その知識は家の皿洗ひの理窟に劣るとも優りつこはありやしない」

「ミケランゼロは自分の競争者に追付かうと思つて（尤もそれは少しも困難な事ではなかつた）、まるで熱病やみの様に焦慮り立てながら、會議室の壁畫に取り掛つた。

彼はビザ戦争中の一場景を選び出した。熱い夏の日にはフロレンス軍の兵士等は、アルノ川で水浴をしてゐた。と急に警鐘が鳴つて、敵軍見ゆとの報が傳はつた。兵士等は疲れた體を冷たい水に休めてゐたが、義務に忠なる彼等は、直ちに先を争ひ乍ら岸へ這ひ上り、汗みどろの埃つぽい服を着、日光に赤熱された銅の鎧をつけるのであつた。

つまりミケランゼロはレオナルドの畫に對抗する爲めに、戰爭を單に無意味な殺し合ひ——レオナルドの所謂「最も愚かな獸的行爲」としてでなく、勇ましい功業、永久なる義務の遂行、祖國の名譽と武威の爲めにする英雄達の奮闘として描き出したのである。

フロレンスの人々は、何か珍しい見世物に集つた群衆によく見受けられる様な好奇心を持つて、此のレオナルド對ミケランゼロの決闘を注視した。そして政争のないものは、すべて胡椒と鹽のない料理の様に、味のない水つぽい物の様に感じられたので、彼等は直ぐにミケランゼロは反メヂチ派の共和黨であるし、レオナルドは反共和黨のメヂチ派であると決めて了つた。かうしてすべての人々に取つて分りよくなつた争論は、新しい力を以て燃え上つた。そして家の中から往來や廣場へ持出されて、藝術には何の關りも無い様な人達までが、それに口を入れる様になつた。レオナルドとミケランゼロの作品は、反目嫉視してゐる二つの陣地の旗印となつて了つたのである。

終ひには夜々見知らぬ人がダギデの像に、石を抛るやうにさへなつたのである。市民中の名士は此の事について人民を責めるし、人民の頭領達は名士を非難し、藝術家達は此の頃フロレンスに畫室を開いた、ベルデノ(ウムフリア族の師)の弟子達を非難した。ブオナロッチは大統領の前で、ダギデに石を抛る破戸漢(たしやもの)を買収したのは、外ならぬレオナルドだと断言した。

多くの人はそれを信じた。少くとも信じてゐる様な振りをした。

ある時デオコンダの肖像製作に没頭してゐる最中に(丁度畫室の中にはデオワンニとサライノの二人より外誰も居なかつた)、ふとミケランゼロの話が出た。その時レオナルドはモナリザ

に向つて、

「私は時々こんな氣がする事があります——若しあの人と面と向つてゆつくり話したら、何もかもすつかり自然と氷釋して了つて、こんな馬鹿々々しい争ひなどは、跡方もなくなるに相違ないんですがねえ。あの人でも決して私が敵ではない、それ所か私ほどあの人を愛し得る人は外にない、と云ふ事を合點して呉れる筈なんですよ……」

モナリザは頭を振つた。

「そんな事馬鹿々々しいぢやありませんか、そんな事があるものですか、レオナルド先生！

あの方が合點するものですか」

「合點しますよ」と畫家は叫んだ。「あゝいふ人が合點しない筈はありません！ たゞあの方があまり臆病で、自信が無さ過ぎるのが不可なのです。あの方が苦しんだり、嫉妬したり、恐れたりしてゐるのは、つまりあの方が自分の價値を知らないからです。それは全く馬鹿々々しい狂氣めいた事ですよ！ 私があの人にすつかり話して聞かせたら、あの人でも落着いて來るでせうがねえ。一體あの方が私を恐れるべきでせうか？ 奥様、此の間あの人『水浴せる兵士等』の下繪を見た時、私は自分で自分の目を信ずる事が出來ない位でした。あの方が何う云ふ畫家であるか、又將來何ういふ藝術家になるか、それを誰一人豫言出來る者はありません。私には

よく分つておます——あの人は今でも既に私に比肩し得るばかりでなく、私より優れてゐる位です。えいさうです、私より優れてゐる様な気がします！」

モナ・リザはレオナルドの目をその儘反映してゐる様な目で（とデオザンニには思はれた）ちつと畫家を見つめた。そして靜かな奇妙な微笑を浮べた。

「先生」と彼女は言つた。「あなたは、聖書の中にかういふ場所があるのを覚えていらつしやいますか。豫言者のイリヤが不信の王アカブの許を走つて、荒野の中のコリブ山へ登つた時、神様が「出でて山に上り主の前に立て。而して神過ぎ給ふ前に、山を裂き岩を砕くが如き烈しき大風あらん。されど主は風の中にましますに非ず。風の後に地震あるべし。されど主は地震の中にましますに非ず。地震の後に火事あらん。されど主は火事の中にましますに非ず。火事の後に靜かなる風吹き渡らん。そこにこそ神は居ますなれ」と仰せになりました。事に依つたらブオナロ、チ様は神の前に山を裂き、岩を砕く風の様に強いかも知れません。けれどあの人には神を孕める靜けさがありません。あの人もそれを知つてゐるので、丁度靜けさが嵐よりも強い様に、あなたがあの人より強い爲めに、あなたを憎んでゐるのでございませう」

川向ひの古いマリヤ・デル・カルミ（ミナ）の教會の中にあるブランカチの禮拜堂には、伊太利のあらゆる大畫家の流祖たるトマゾ・マザチオの有名な壁畫があつた（レオナルドも嘗て此の畫について

學んだ事がある）。ある時彼は此處で一人の見知らぬ青年といふより寧ろ少年が、この壁畫を研究したり模寫したりしてゐるのを見受けた。彼は繪の具で汚れた黒いジャケツを着、小さつぱりしてはゐるけれど、手織らしい粗地の襯衣をつけてゐた。その體はすらりとして柔靱（しなやか）かで、頸はまるで血の氣の少い處女の様（おんなじ）に優しくて長く、並外れて色白で華奢であつた。顔は透き通つた様に蒼ざめて、玉子の様に楕圓形をして、少し厭味で甘たるかつたけれど中々美しかつた。目はよく、ベルチノが自分の畫（ま）く聖母のモデルにした、ウムブリヤの田舎少女に見受けられる様な大きな黒い目で、思想などにはまるで縁の無い、大空のやうに深い空虚な表情をして居た。

暫く経つて、レオナルドは再び此の青年を、「アンギアリの戦」の下繪が陳列されてゐる、マリヤ・ノエルラ寺院の法王廣間で見受けた。彼は此の繪をもマザチオの壁畫と同じ位、熱心に研究し模寫してゐた。大方今度はもうレオナルドの顔を見知つてゐたのであらう、青年は何か話し懸け度いけれど、さうする丈けの勇氣が無い様な風付で、ちつと食ひ入る様に彼の顔を眺めるのであつた。

レオナルドはそれに氣が付いて、自分から彼の方へ近寄つた。青年は急ぎ込んで興奮して赤い顔をしたが、心持ちしつこい様な氣がするけれど、子供らしい無邪氣な、對手の心に忍び込む様な調子で、自分はレオナルドを伊太利の國中で一番偉大な畫家と思つて、心密かに我師と

頼んでゐる、そしてミケランゼロなどは「最後の晩餐」の作者の、靴の革紐を解くにも値しないと言つた。

それから又幾度かレオナルドは此の青年に出會つて、長い間話をしたり、彼の素描を見たりした。そして彼の人となりを知れば知る程、益々彼が未來の巨匠である事を確信した。まるで木精コバシの様にあらゆる聲に對して敏感で反射し易く、まるで女の様にすべての影響に動かされ易い彼は、ベルチノをもピントゥリ、キオをも（彼はつい近頃まで此の人の下について、シエンの書庫で製作してゐたのである）、殊にレオナルドを模倣した。けれどレオナルドはかうした未熟な表皮の下に、嘗て何人にも見た事のない様な、清新な感情を觀て取つたのである。併し何よりも彼を驚かしたのは、此の少年が自分で望みもしないのに、まるで偶然の様に藝術と人生の祕奥へ、易々と侵入して行つた事である。彼は何んなに困難な事でも、まるで遊び事の様にならんとして征服して行つた。彼には一切の物が無報酬で獲られたのである。それは丁度レオナルドに取つて一生の苦痛であり呪ひであつた、藝術の上に於ける無限の探究、努力、困苦、動搖、疑惑などが、彼に取つては全然存在しないかの様であつた。師が彼に向つて、徐々に辛抱強く自然を研究することの必要とか、數學的に正確な繪畫上の法則などを説明する時、青年は例の吃驚した様な、何の思ひもない大きな目付で彼を見つめた。彼は如何にも退屈さうであ

つたけれど、只師に對する尊敬の念の爲めに、注意深く聽いてゐるのであつた。

ある時彼が何の氣なしに洩らした言葉が、その深刻な味ひを以てレオナルドを驚愕させたのである。

「私がかういふ事に氣が付きました——畫を描いてゐる時には、何にも考へない方がいゝです。その方が巧く行きますよ」

それは丁度此の少年が自分の全存在を以て、レオナルドの一心に探し求めてゐる感情と理知の一致とか、愛と認識の完全なる調和とか云ふものはまるで存在しない、又し得ないのだ」と語つて居る様な具合であつた。

そのつつましやかな、穩かな、無意味な程明るい言葉に面接したとき、レオナルドはブオナロッチの憤怒と憎惡に對した時より以上に、藝術の將來と自分の一生の仕事に對する疑惑と恐怖を感じたのである。

「君、一體君は何處の生れだね？」始めて彼に會つた頃、レオナルドはかう訊いて見た。「君のお父さんは誰で、そして名前は何と云ふの？」

「私はウルビノの生れです」と青年は例の優しい、少し甘つたるい様な微笑を浮べて、かう答へた。「父は畫家のデオヴンニ・サンチオで、私の名はラファエロです」

此の頃レオナルドはある重大な用件で、フロレンスを去らなければならなかつた。フロレンス共和国は記憶にも残つてゐない程古い昔から、隣の町のピザと戦争を続けてゐた——それは双方に取つて惱ましい、果しの無い、残忍な戦争であつた。

ある時マキアエリイと話をしてゐる中に、畫家は一つの策戦方法を物語つた。外でもないアルノ川の流れを別な新しい河床へ移し、運河の助けに依つてピザの町からリヴルノの沼へ注がせ、これに依つて包圍された町を海路から遮斷した上、食料の運輸を絶つて降伏を餘儀なくせしめよう、と云ふのであつた。ニコロはすべて非凡な奇抜な事が好きな例の癖を出して、すっかり此の計畫に打込んで了ひ、これを大統領に傳へたのである。一面から言へば彼は得意の雄辯でピエロを煙に巻き、巧みにその自尊心を突つついて説き伏せたのである。なぜと言つて此の頃多くの人が、ピザ戦争が面白く行かないのは、大統領が無能な爲めだと言ひ出したからである。又一面から言へば彼は此の計畫の困難な事や、それに要する實際の費用などを隠して、彼を欺いた形でもあつた。ピエロが此の案を十人會議へ提出した時、彼は殆ど笑ひ柄わらわにされないばかりであつた。ソデリニはむづとして、自分でも外の者に劣らない位立派な常識を持つてゐる

事を、皆に思ひ知らせてやらうと決心した。そして恐しく執拗に運動した結果、遂に自分の目的を貫徹した。併しそれは反對黨の者がソデリニを破滅させようが爲めに、愚の骨頂としか思へない此の提案に對して、全力を盡して投票したお蔭なのである。マキアエリイもレオナルドには當分の間自分の奸策を隠して置く事にした。それはも少し経つてすつかり大統領を此の事業に巻き込んで了つた後、自由自在に彼を探つて、要る丈のものを絞り取らうと目論だからである。仕事の始まりは巧く行つた様に思はれた。川の水平線は目に見えて低くなつた。けれど間もなく様々な困難が暴露されて、段々と餘計に費用を要するやうになつた。所がしまつた元老達は僅かな目くされ金で押問答するものであつた。

千五百五年烈しい雷雨の後、岸を溢れた河水は、堤防の一部分を破壊した。で、レオナルドは現場へ呼び出されたのである。

出發の前日、彼は此の事件に關してマキアエリイと話をして、その自白に荒膽を挫がれた後、アルノの河向ひなる彼の家を辭して、トルナブオニ街の方角をさして、サンタ・トリニタ橋を渡り掛つた。

時刻は大分遅くなつてゐた。通行人は少かつた。静寂はボンテ・アラ・カライヤ橋の彼方なる、水車場の水音に破られるのみであつた。晝の中は随分暑かつたが、夕方に一雨降つて空氣は爽さわ

爽して来た。橋の上に立つてみると、生暖い夏の水の匂ひがして来た。サン・マキヤットの黒い丘の陰から月が差し上つてゐる。右の方ポント・ゼッキオの河岸通では、曲つた木の柱に支へられた突き出しの、不揃ひに凹凸してゐる古い小家が、堰き留められて深く静かになつた水の上に、まるで鏡か何ぞの様に姿を映してゐる。左の方仄かな瑠璃色を呈したアルバノ山の支脈の上には、只一つ星が淋しさうに慄へてゐた。

フロレンスの町の姿は、まるで古い書物の鈍い金箔の上に浮き出した表紙畫の様に、澄んだ空の上にくつきり、浮き出してゐた。それは丁度生きた人間の顔の様に親しい、世界中でたつた一つしかない姿であつた。先づ北の方へ向つてサンタ・クロッチェの古い鐘樓が聳えてゐると、それに續いてゼッキオ宮殿の眞直な、すらりとした、嚴めしい塔や、白い大理石のカムパニイロ、デオットや、まるで古くから紋章になつてゐる紅百合の蕾のやうな、マリヤ・デル・フォールの赤み掛つた煉瓦の圓屋根などが並び立つてゐる。フロレンスの町全體が夕焼と月光と二重の光を受けて、まるで一の大きな黒み掛つた銀色の花の様に思はれた。

レオナルドはすべての町が、すべての人間と同じ様に、各々固有の匂を持つてゐるのに気がついた。フロレンスは菖蒲の花の様な濕つばい埃の匂と、非常に古い畫の顔料と漆とのあるか無きかの匂とが、入り交つた様な匂を持つてゐるのであつた。

彼はデオコンダの事を考へてゐたのである。

彼は殆どデオワンニと同じ位しか、彼女の生活を知らなかつた。彼は此の女に良人があると考へても、別に腹も立たなければ不思議でもなかつた。良人のフランチェスコ氏は瘠せて背の高い、左の頬に疣のある、眉の濃い男で、シシリヤ種の牡牛の特點や、羊の毛皮の新税などを論ずるのが好きな、實際的な人物であつた。時とするレオナルドは、まるで實在しない様であり乍ら、而も此の世にあるすべての物よりも、より以上に實在性を持つてゐる、幻の様な彼女の美しさ——まるで縁の無いものの様に懸け離れた彼女の美しさを、何より嬉しく思ふ瞬間もあつた。けれど又彼女の生ける美しさを感じる瞬間もあつた。

モナ・リザは當時よく『學問のある女丈夫』と呼ばれてゐたやうな婦人ではなかつた。彼女は一度も自分の博識をひけらかした事が無い。只偶然彼はモナ・リザが、羅旬語と希臘語が讀めると云ふ事を知つたのである。彼女の言行が餘り率直なので、多くの人は彼女を餘り利口でない様に思つてゐた程である。併し實際彼女は理智——殊に女の理智よりもつと深い直觀力を持つてゐる様に、レオナルドには感じられた。彼女がふと何氣なく口にする言葉の爲めに、彼は彼女が忽然として非常に親しい、自分の知つてゐる誰よりも一番近しい人になつた様な気がした。たつた一人しか無い永遠の友達といふか、妹といふか、そんな氣持がするのであつた。かう

した瞬間に、彼は觀照と生活とを分つ魔法の圈を、踏み越して了ひ度い様な慾望を感じたが、直ぐに心の中でかういふ慾望を押しつけた。かうして生けるモナ・リザの美を殺して了ふ度毎に、彼が呼び起した畫布の上の幻の様な彼女の姿は、次第に生き／＼とし、次第に實在のものとなつて來るのであつた。

彼女も亦それに従つて彼を助けてゐる様に思はれた。つまり自分自身を自分の幻の犠牲として、彼に自分の魂を捧げながら、それを悦んでゐるかの様であつた。

一體二人を結び付けてゐたのは戀であらうか？

當時流行のプラトニック・ラブなどと云ふ謙語たはごとや、神聖なる戀人達の憎げな溜息や、ペトラルカ張の甘つたるい短詩などは、彼の心に倦怠と嘲笑を呼び起すのみであつた。又同時に多數の人が戀と名づけこゝる物も、それに劣らぬ位彼に取つて縁の無い物であつた。彼が肉を食はなかつたのは、それが禁制のものだからではなくて、忌はしい物に感じられたが爲めであるが、丁度それと同じ様に彼が女を遠ざけたのも、すべて肉體の領有といふ事が（結婚生活に在つても、姦淫の場合に在つても、何方にしても同じ事である）、罪惡といふよりつまり粗野な物に感じられたが爲めである。

「交接の行爲」と彼は自分の解剖圖の説明にかう記してゐる。「並びにそれに要する諸機關は實

に醜惡なものであつて、若し行爲者の顔面の美や、裝飾や、情慾の力などが無かつたならば、人類は滅亡するに相違ないと思はれる程である。」

彼は此の醜惡なる牡と牝との肉慾の争闘から遠ざかつた。それは丁度食む者と食まるる者との血腥い争闘から遠ざかつたと同じ様に、戀と饑餓に争闘を必要とする自然律を咎めもしなければ辯護もせず、只有るが儘のものとして容認しながら、自分自身はそれに與らうとしないで、愛と童貞との別な法則に従つてゐるのであつた。

併し假りに彼がリザを愛してゐるとしても、果して此の深刻にして神祕なる愛撫あはれより以上に、完全なる戀人との融合を希む事が出来るだらうか？ 愛撫とは外でもない不死の像すがた——新しき存在の創造である。それはまるで子供が父母の間に生れる様に、彼と彼女の間に受胎して誕生せんとして居る存在物で、彼と彼女とを打つて一丸としたものなのである。

それにも拘らず、此の至純なる結合の中にも、危険が藏せられてゐるのを、彼は感じたのである。事に依つたら、普通の肉的關係に於けるよりも、危険の度が多いかも知れない。彼等兩人は前人の嘗て足を踏み入れた事のない深淵の縁を、誘惑と牽引に打克ち乍ら歩いてゐたのである。二人の間には捕捉しがたい透明な言葉が存在して、丁度太陽が濕つぽい霧を通して見える様に、神祕がその言葉の隙から透すいて見えるのであつた。若し霧が散じて目眩めくらしい太陽が輝

き渡り、神祕も幻影も消え失せたならば……時々彼はかう考へて見るのであつた。若し彼が彼女か何方か、最後まで押し怼へる事が出来ないで、此の微妙な一線を踏み越して、観照が實生活となつて了つたら何うだらう？ その時彼は機械學や數學の法則だの、毒を注射された植物の生活だの、解剖された死體の構造などと同じ様に、冷靜無私な好奇心を以て、自分の生涯の友たり妹たる人の魂を——唯つた一つ切りの親しい生きた魂を、試験し研究する權利を果して持つてゐるだらうか？ そして彼女は憤懣を感じないだらうか？ 憎悪と侮蔑を以て彼を突き退けないだらうか？ 全く他の女なら誰でも必ずさうするに違ひないのだ。

時々彼は自分がじり／＼と残酷に、彼女を刑罰に處してゐる様な氣持がした、彼はリザの從順なのに慄然とした位である。その從順さは、彼自身の優しいけれど飽く事を知らぬ好奇心と同じ様に、際しが無いのであつた。

たゞ最近になつて、彼は自分の心中に此の限界を感じた。そして晚かれ早かれ、彼女が自分に取つて果して何者であるか、生きた人間であるか幻に過ぎないのか——女性美といふ鏡の中に映つた自分自身の魂の反射に過ぎないのか、といふ問題を解決する必要を悟つたのである。けれど別れて居れば、當分の間此の避け難い解決を延期する事が出来る、といふ事に彼は一縷の希望を繋いだ。そして寧ろフロレンスを去る事を悦んだ程である。けれど愈々別れが眼前に迫

つた今となつて、彼は自分の誤を悟つた。別離は解決を延期しないばかりでなく、却つてそれを早めさうであつた。

かうした物思ひに耽つてゐた彼は、何時の間にとある淋しい横町へ入つたのか、少しも氣が付かなかつた。で邊りを見廻したとき、自分が何處に居るのやら、すぐには一寸分らなかつた。

只家々の屋根の上に聳えてゐる、大理石で造つたデオットの鐘樓から推測して、中央寺院から程遠くない所と察しられた。細長い街の片側は漆の様な黒い蔭になつてゐたが、その反對の側は殆ど白い位明るい月光を浴びてゐた。遠くの方に小さな灯が一つ赤く光つてゐる。ある町角には瓦屋根の庇が斜めに突き出して、半圓形の迫持がすたりとした圓柱に支へられてゐる露臺——フロレンスで謂ふ涼廊があつて、その前には黒い假面の外套をつけた人達が、琵琶の音に合わせてセレナードを唱つてゐた。彼は耳を傾けた。

それはロレンツォ・メヂチ大公の作つた古い戀歌で、嘗て酒神とアリアドネ(酒神)の行列の時歌はれたものである。レオナルドは此の限り無く悦ばしく又物悲しい戀歌を、若い時しよつちう聞いた事があるので、何となしにこれが好きなのであつた。

あゝ如何に青春の日の美しく
 又果敢なき事よ！ 歌へよ笑へ
*Quanto è bella giovinezza
 Che si fugge tuttavia!*

神々の復活 モナ・リザ・ジオコンダ

幸を欲する者は幸なれや
明日の日を恃むは難し。

最後の一行は彼の心に暗い豫感を傳へた。

全く運命の神は彼が老年の闕に立つた今となつて、さながら地下の暗にも似たる彼の孤獨な生活に、懐しい生々した魂を送つて來たではないか？ 彼女を回避すべきだらうか？ これ迄も屢々経験した様に、觀照の爲めに生活を拒絶すべきだらうか？ 遠き物の爲めに近きものを、存在はしないけれど唯一の美しき物の爲めに、現實の物を犠牲にすべきだらうか？ 生けるチオコンダか、不死のチオコンダか、何れを選むべきであらう？ 「を選べば他の物を失ふ、而も二者共に彼に取つて貴重なのだ、それは彼にもよく分つて居た。又今はもうその選擇を決しなければならぬ、これ以上躊躇して苦痛を延してはならぬ、と云ふ事も矢張よく分つて居た。けれど彼の意志は無力であつた。何れが勝るかを決めるのは、氣も進まなければ出來もしなかつた。不死の者の爲めに生ける人を殺すべきか、生ける者の爲めに不死の人を滅すべきか？ 現在ある者を選ぶか、永久に畫布の上に殘る者を探るか？

それから未だ二街ばかり通抜けて、彼は自分の厄介になつてゐるマルテルリの家に近付いた。戸は閉つて灯りは消えてゐた。彼は鎖に吊してある槌を取つて、鐵で鑄た緊子を打つた。門番

は返事しなかつた——屹度何處ぞへ行つたか睡つたかに違ない。石階の圓天井の繰返した鈍い反響も静まり返つて、靜寂が襲うて來た。而も月の光が一層その靜けさを深める様であつた。突然重々しい、ゆつくりした正確な銅の音が聞えた。それは隣の塔に附いて居る時計の響きであつた。その音は聲の無い嚴めしい時の歩みと、暗澹たる孤獨な老年と、返らぬ過去とを語つて居た。

最後の響は時に弱まり時に強まり乍ら、未だ長い間慄へて、月光の中に音の波を擴げつつ漂うてゐた。それは丁度

明日の日を恃むは難し
と繰返してゐる様であつた。

五

翌日モナ・リザはいつもの時刻に彼の畫室へやつて來た。今日はいつも必ず伴いて來るカミルラ尼もなく、始めてたつた一人切りであつた。チオコンダも、これが最後の會見だといふ事を知つて居たのである。

それは太陽が輝いて、目眩しい位明るい日であつた。レオナルドは麻の日避けを引いた。と

黒い壁に囲まれた内庭の中は、優しい黄昏の様な光線が領した。それは彼女の顔に此の上ない美しさを添へる、透明な水晶のやうな陰であつた。

彼等は二人切りであつた。

彼はすつかり落着き澄して、無言の儘一心不亂に仕事をした。昨日目前に迫つた別離や、二つの中一つの選擇の避くべからざる事を考へた苦しさは忘れて了つて、もう彼に取つては過去も將來もなく、時の歩みが止つて了つた様な氣がした。まるで彼女は永久にあの靜かな奇妙な微笑を浮べた儘、かうしてぢつと坐つてゐた様に、又何時までも坐つて居さうに思はれた。彼は現實に於て實行の出来ない事を、觀照の中で行つたのである。つまり二つの像を一つに融合したのである。現實と映像と、生ける者と不死の者とを結合したのである。それが彼に偉大なる解放の喜びを與へた。彼は今彼女を哀みも恐れもしなかつた。彼女が最後まで従順で、一切を受入れ一切を忍んで、死んでも矢張り従容としてゐるに相違ない、といふ事がよく分つてゐたのである。時々彼は、以前罪人を刑場へ見送つて、その顔面に最後の苦痛の痙攣を觀察した時と、同じ様な好奇心をもつて彼女を見守るのであつた。

突然彼はモナ・リザの顔を、彼に取つて縁もなければ必要もない、従つて彼が吹き込んだ事のない生きてきた思想の影が、ちらと掠めた様な氣がした。それは丁度鏡の面に懸つた霧の様な、生ける物の呼吸に似通つてゐた。彼はそれを遮る爲めに——此の生ける影を追拂つて再び自分の幻想の境へ引き入れる爲めに、まるで魔術師が呪文でも唱へる様な、唱ふが如く命するが如き聲で、謎の様な神祕めいた物語を彼女に聴かせ始めた。彼は時々さういふ物語を日記に認めるのであつた。

「私は未だ世間の人の知らない、自然の藝術に依つて創り出された新しい物象を見度い、と云ふ希望を制する事が出来ないで、長の年月露はな暗い岩の間をさ迷ひ續けてゐましたが、到頭ある洞穴へ辿り着きました。そして入つたものか何うかと思ひ惑ひながら、その入口にぢつと立止りました。が到頭決心して首を屈め背中を曲げ、左手の掌を右足の膝に載せ、暗に馴れる爲めに右手で目を隠し乍ら、私は中へ入つて幾足か前へ進みました。眉を擧め目を細めて、視力を緊張させ乍ら、私は幾度となく方向を變へて、何か見付け度いと努力しつつ、暗の中を手探りで彼方此方とさ迷ひ歩きました。けれど暗は餘りに深かつたのです。そして暫くその中に居る中に、二つの感情が私の心中に眼醒めて相刺し始めました——それは暗い洞穴の探險に對する恐怖と、何か珍しい祕密は無いかといふ好奇心なのです」

彼は口を噤んだ。彼女の顔からは彼に取つて縁の無い生の影が、依然として消え失せなかつた。

「その二つの感情の中何方が打克つたでせうか？」と彼女は口を開いた。

「好奇心です」

「で、洞穴の秘密をお見付けになりましたか？」

「知り得る事だけは知りました」

「ではそれを世間の人達に知らせておやりになりますか？」

「みんなすつかりと云ふ譯には行きませんし、それに私も巧く聞かす腕がありません。けれど私は皆の人に強い好奇心の力を鼓吹して、何時でもそれが彼等の心中の恐怖を征服するやうにし度いと思ひます」

「だけど何うでせう、若しかしたら、好奇心ばかりでは足りないかも知れませんか」彼女は急に目を輝かせながらかう言つた。「その洞穴の一番奥の、一番珍しい秘密を知る爲めには、もつとそれ以上の別なものが必要だつたら何うしませう？」

かう言ひながら、彼女はレオナルドが今迄嘗て見た事が無い様な冷笑を浮べて、ちつと彼の目を見つめた。

「それ以外に何が必要だと仰有るのです？」と彼は訊いた。

彼女は返事しなかつた。

此の時目眩しい程鋭く細い太陽の光線が、帷になつた二つの麻布の隙間から射して来て、水底の様を薄明りは急にぱつと照らし出された。そして彼女の顔に浮んでゐた遠い音楽の様な明るい影と、暗い光りの優しい魅力が破られたのである。

「あなたは明日御出發でございますか？」とデオコンダは言ひ出した。

「いや今夜です」

「私も近い中に立ちますの」と彼女は言つた。

彼はちつとリザを見つめ乍ら、何か言ひ足さうとしたが口を噤んだ。彼女が旅行するのは、自分の居ないフローレンスに居残り度くない爲めだ、といふ事を彼は察したのである。

「うちのフランチェスコが」とモナ・リザは語を續けた。「秋まで三ヶ月ばかりの豫定で、クラブリヤまで商用で出掛けますので、私無理に頼んで、一緒に連れてつて貰ふ事にしました」

彼は後ろを振り返つて、忌々しさうに眉を擧めながら、鋭い意地悪な、餘りに正直すぎる太陽の光線を見やつた。今まで生の通つてないものの様に、白く一色に光つてゐた噴上げのしぶきが、今すべてを屈折させる此の生きた光線を浴びて、互に相反した色様々な虹となつて燃え上つた。それは生の色であつた。

突然彼は自分が臆病な弱々しい、憐れな未練がましい人間となつて、生へ歸らうとしてゐる

21. 1. 27. 4 1/2. 9. 1. 14

のを感じた。

「大丈夫ですわ」とモナ・リザが口を切つた。「帷かたびらをお引きなさいまし。未ださう遅くもないし、私も別に疲れてゐませんから」

「いや何方どこにしても同じ事です。もう澤山」と言つて彼は繪筆を抛げた。

「あなたはもう何時になつても、此の肖像をお仕上げになりませんか？」

「なぜですか？」まるで憎えた様に彼は急いで言返した。「あなたは又お歸りになつても、二度と私の所へおいでにならない積りですか？」

「参ります。けれど三ヶ月後には私がまるで別な女になつて了つて、まるでお見分けが付かないかも知れませんわ。あなたも御自分でさう仰有つたぢやありませんか、人間の顔——殊に女の顔は急に變つて了ふものだつて……」

「私は仕上げ度いのですが」彼は獨り言の様に緩ゆるり／＼かう言つた。けれど何うなるか分りません。私は時々どうかすると、自分の望んでゐる事は實行が不可能なのではないか、と云ふ様な氣持がします……」

「不可能ですつて？」と彼女は驚いて、「尤も私かういふ噂を聞きましたわ——あなたは一度も完成なすつたことがない。なぜと云つて、不可能を目指して努力していらつしやるからだつて

……」

この言葉の中には限りなくつましやかな、憐れな非難が響いてゐるのであつた。併し或は只さう感じられた丈けかも知れぬ。

「あゝこれがさうだ」と彼は考へると、何だか恐しくなつて來た。

彼女は立上つて、いつもの如く平氣な調子で言つた。

「ではそろ／＼歸りませう！ さよならレオナルド先生！ 御無事に行つてらつしやい」

彼は女に目を上げた——と再びその顔の中に、最後の望みなき非難と哀願が浮んでゐる様に思はれた。

彼はこの一瞬間が二人に取つて死の如く永遠で、又と返らないものだと思ふ事を知つてゐた。けれど最後の決心を見出さうと意力を緊張させればさせる程、彼は益々自己の無力と、二人の間に次第に深まつて行く超え難い淵を感じるのであつた。モナ・リザは以前の通り靜かな明るい微笑を浮べてはゐるけれど、その靜けさと明るさとは、丁度死人の微笑に見受けられるもの様であつた。

限り無い堪へ難い哀憐が彼の心をさし貫いて、いよ／＼力無いものにして了つたのである。モナ・リザは手をさし伸べた。彼は無言のままその手を接吻した。それは二人が相知つてか

ら始めてなのであつた——とその瞬間、彼は女が急に屈み込んで、自分の髪に唇を觸れるのを感じた。

「何うか御機嫌よろしう」彼女は依然として平氣な調子で言つた。

彼が我に返つたときには、彼女はもう居なかつた。邊りには死んだ様な夏の眞晝の靜寂が立た置めてゐたが、それは暗澹たる暗い眞夜中の靜寂より、猶一倍物凄く感じられた。

すると丁度前の夜と同じ様に、とは云へ尙一層厳めしく莊重に、ゆつくりした正確な銅の音が聞えた——それは隣の塔にある時計の響きであつた。その音は聲こそ無けれ、恐しい時の歩みと暗澹たる孤獨な老年と、返らぬ過去とを語つてゐた。

最後の響は次第に消えて行き乍ら、未だ長い事慄へてゐた。そして丁度

明日の日を待つは難し

と繰返してゐる様であつた。

六

アルノ川の水を引いて、ビザの町から遠ざける仕事を引受ける様に承諾した時、レオナルドは此の軍事上の策戦計畫が遅かれ早かれもつと違つた、もつと平和的な、もつと重大な意味を帯

びて來るだらうと確信してゐた。

彼は未だ若い時分からアルノ河に一大運河の建設を空想してゐた。それはフロレンスからピサの海まで舟行の便を與へる上に、網目の様な滋養素に富んだ無數の水脈を以て、附近の野を灌漑して土地の生産力を増し、トスカナ全州を咲き匂ふ大庭園に化さうといふ計畫であつた。

「プラト、ビストイヤ、ビザ、ルカ等は」と彼は覺書の中に記した。「此の企畫に參與する事に依つて、その運轉年額を約二十萬ド、カート増大せしむべし。アルノ川の水面と水底を支配するものは、一町歩毎に實を獲べし」

レオナルドは今この晩年に到つて、始めて運命が自分の希望を成就する機會を與へて呉れた様な氣がした。君主に仕へて成功しなかつた願望——自然に對する科學の威力を人々に示し度いと云ふ願望が、人民に仕へて漸く達しられさうに思はれたのである。

マキアエリが彼に一切を自白して、自分はソデリニを欺いて、困難な此の計畫の眞相を隠し、三萬日か四萬日の延日數があつたら十分だと云つて、大統領を説き伏せた事を告げたとき、レオナルドは自分に責任を引受け度くなかつたので、一切を赤裸々に大統領に打明けようと決心して、計算書を提出した。それに依ると深さ七呎、幅二十呎乃至三十呎、全面積八十萬平方エ

ルの運河を二條、リヴールンの沼まで引く爲めには、少くとも二十萬日の延日數を要する。又地質に依つてそれ以上になるかも知れぬ、と云ふ事が明らかになつた。元老達は吃驚仰天して了つた。ソデリニの頭上には四方八方から非難の聲が浴せられた。人々は何うして彼がこんな馬鹿々々しい事を考へ付いたか、と不審に思ふのであつた。

ニコロは依然として希望を失はないで、奔走したり、狡智を弄して欺いたり、雄辯な書面を送つたりして、一旦着手した工事の成功を保證するのであつた。けれど莫大な費用は日と共に膨脹して行くにも拘らず、工事の調子は次第々々に悪くなつて行つた。

それは丁度失敗の神がニコロ氏に宿つてゐる様であつた。彼の觸れるものは悉く豫想を裏切つて、彼の手中に溶け崩れ、單なる空言、抽象的な思想、意地悪な洒落と變化して了つて、それが誰よりも先づ彼自身に害を及ぼすのであつた。で畫家はいつも彼が骨牌の必勝法を説明しながら、自分自身負けてばかりゐる事や、マリヤ救助の失敗に終つた事や、あの運悪いマケドニヤの方陣の事などを、思はず聯想したのである。

常に實行を渴望して而も全然それに不適當な、又思想の方面に於て優れて居乍ら、實生活に於てはまるで陸へ上つた白鳥の様に無力な此の奇妙な人間の中に、レオナルドは自分自身の姿を發見した。

彼は大統領や元老達へ宛てた報告書の中で、直ぐ此の工事を斷念して了ふか、それとも如何なる費用をも恐れず完成するか、二つに一つを選むやうに進言した。けれど共和國の代表者達は例に依つて、その間を取つた。つまり既に掘り上げた運河を、ビザ軍の進出を妨げる壕として利用する事に決めたのである。それにレオナルドの餘りに大膽な工事には、誰一人信を措くものが無かつたので、フェラから他の水道や土木の技師を招聘した。けれどフローレンスの人々がありとあらゆる官衙や、集會や、議會などで、黒白の玉を以て多數決の投票を行ひながら、議論したり互に非難し合つたりしてゐる中に、敵は遠慮なしに大砲をどん／＼放つて、既に出來上つた箇所をも破壊して了つた。

到頭レオナルドは此の工事がすつかり厭になつて、嫌惡の念なしには其の話を書く事が出來ない位であつた。仕事の都合から云へば、彼はもう疾くとよにフローレンスへ歸つてもいゝのであつたが、偶然ある人から、デオコンド氏が十月の上旬にカラブリアから歸ると云ふ話を聞いたので、レオナルドはそれよりも十日ばかり遅れて歸らうと決心した。それは間違なくフローレンスでモナ・リザに會ひ度かつたからである。

彼は指折り數へてその日を待つてゐた。今はもしや別離が長引きはせぬかと考へた丈で、何とも言へぬ迷信的な恐怖と憂愁が彼の胸をしめ付けて、彼はなるべく其の事を考へまいと努

めた。そしてひよつと、誰かが「彼女はその頃までに歸らない」と言ひ出しはせぬかといふ杞憂の爲めに、誰とも其の話をせず、誰にも訊かないのでつた。

朝早く彼はフロレンスへ着いた。

灰色をした佗しい秋のフロレンスは、何となくデオコンダを聯想させて、格別懐かしく親しい様に感じられた。それに日和も彼女の日和で、霧がこめて物靜かに、水底の様に沾みを帯びてどんよりした太陽が掛つてゐた。女の顔に特殊な美を與へる太陽である。

何んな風に彼女を迎へよう、彼女に何を言はう、そしてもう永久に彼女と別れないで、デオコンダ夫人が自分の唯一な生涯の友となる爲めには、一體どうしたらいいだらうか、など云ふ様な自問自答もしなかつた。彼は何もかも自然に出来上つて行く、といふ事を知つてゐた。困難は容易となり、不可能は可能となる——只會ひさへすればいいのだ。

「何よりも考へないのが一番いい。さうすれば巧く行く」と彼はラファエルの言葉を繰返した。

「俺はあの女に訊ねて見よう。今度こそあの女も、此の前言ふ暇の無かつた事を言つて呉れるだらう。洞穴の一番奥の一番珍しい祕密に侵入する爲めには、好奇心以外に何が必要なのか、それを聞かせて呉れるに相違ない」

かう思ふと言葉に盡し難い悦びが彼の胸を充して、まるで五十四歳ではなく十六歳位の少年

で、長い生涯が前途に控へてゐる様な心持がした。けれど意識の光線のまるで射し込まぬ深い心の奥底には、此の悦びの下に不吉な豫感が潜んでゐた。

彼は運河開鑿工事に關する書類や圖面などを渡す爲めに、ニコロ氏の許へ赴いた。デオコンダ氏の所へは翌朝出掛けようと思つたけれど、到頭辛抱が出来ないで、その晩マキアエリの所から歸り途に、ルンガルノ・デレ・グラチエの方へ向けて、デオコンダ家の前を通り過ぎながら、馬丁か下男か門番かに、主人夫婦が歸つたか何うか、何も別に變りはないか、と訊いて見る事に決心したのである。

レオナルドはトルナブオニ街をサンタ・トリニタ橋の方へ下つて行つた——それは此の前出立前夜に歩いたのと同じ道だけれど、只方角が反對になつたばかりである。

フロレンスの秋の習ひとして、夕方になつて突然天候が變つた。ムニオニの峡谷からはまるで隙間風みたいで、刺すやうな冷い北風が吹いて来て、ムッゼロの頂きは急に白髪でも生えた様に、霜の爲めに眞白くなつて了つた。雨もばら／＼降り出した。丁度すばりと端を切り落された様になつて、地平線の上に澄んだ空を一條残してゐる黒雲の帷の蔭から、突然太陽の光がさつと注いで、濡れて汚れた町々や、光澤々々光る家々の屋根や、人々の顔などを、眞鍮色の冷く粗い光で照し出した。雨はまるで眞鍮の粉のやうに見えた。どこか遠くの方で、窓の硝子

が赤熱した炭の様に輝き出した。

サンタ・トリニタ教會の向ひに當つて、河岸通りとトルナブオニ街の角に、褐色がかつた灰色の自然石で造つた、巨大なスピニ宮殿が巍然として聳えてゐた。格子附の窓や銃眼のある此の建物は、丁度中世紀の要塞の様であつた。フロレンスにある多くの宮殿附近の例に洩れず、こゝでも四方の壁の廻りに巾の廣い石のベンチがずらりと並んでゐた。その上に町の老若貴賤が腰を掛けて、骸子ころ遊びや將棋を戦はしたり、新しい市井の出来事を聞いたり、商賣上の話をしたりし乍ら、冬は日和ぼつこをし、夏は物蔭で休息するのであつた。アルノ河に面した側には、此のベンチの上に瓦屋根の庇が柱に支へられて、一寸涼廊の様な工合になつてゐた。

此の庇の傍を通り掛つたとき、レオナルドは半分位見知り越の人々が集つてゐるのに氣が付いた。彼等の中の或者は立ち或者は坐つて、何やら夢中になつて話してゐたので、雨を交へた風が、烈しくどつくと吹き付けるのにも氣が付かない様であつた。

「あゝもしレオナルドさん！」と人々は彼を呼び掛けた。「まあ此處へ來て我々の爭論を解決して下さう」

彼は足をとめた。

彼等はダンテの『神曲』の地獄篇第三十四章中にある、謎めいた詩の事で議論してゐるのであ

つた。詩聖は巨人のディテが呪はれたる井戸のどん底で、胸の眞中まで水に包まれてゐる石様を物語つてゐる。彼は墮されたる天使の軍勢の頭であり、『悲しみの王國の皇帝』であつた。黒と赤と黄の彼の三つの面は、恰も神聖なる三位一體の惡魔的反映か何ぞの様に感じられた。そして三つの口には一人づゝの罪人が居て、それを永久に飲み込まうとしてゐる。黒い口には逆者ユダ、赤い口にはブルトッス、黄色い口にはカシウスを咬へてゐるのであつた。爭論の要點は、何故ダンテは人神に反抗した者、即ちジリウス・シーザアに反抗した者と、神人に反抗した最も忌はしき背教者とを、殆ど同じ方法で罰したかと云ふのであつた。なぜと云つて、兩者の相違は、單にブルトッスの方は足がディテの口の中にあつて、頭が外へ出てゐるのに、ユダのは足が外にあつて首が中にある、と云ふ丈けに過ぎなかつたからである。或者はダンテが熱烈な帝政派で、地上に於ける法王の權力に對抗して、皇帝の權力を擁護してゐたから、羅馬の帝政を羅馬の教會と同じ位、でなければ殆ど同じ位、世界救済の爲めに必要で神聖なものを見做したのだ、とかう説明した。すると他の者は、さういふ説明は何となく異教臭を帯びて、すべての詩人中最も敬虔なるダンテの、基督教的精神に一致しないと反駁した。議論すればする程、詩人の祕密は益々解き難くなつて來た。

年取つた羊毛商人が畫家に向つて詳しく論點を説明してゐる中に、レオナルドは風の爲めに

少し目を細めながら、ちつと向うの方を見つめてゐた。ルンガルノ・アチアイオリの河岸通りに沿うて、貧しげな着物を無造作に纏うた一人の男が、重苦しい無器用な、まるで熊の様な歩きぶりでやつて来た。猫背で、ごつ／＼骨張つて、頭が大きくて、黒い髪はごは／＼して縮れ上り、疎らな山羊髯は如何にも貧弱で、耳がびんと突つ立ち、顴骨の廣い顔は平つたい様な感じがあった。それはミケランゼロ・ブオナロッチであつた。彼の顔に一種特別な、人をして面を背けしめる様な醜さを與へてゐるのは、まだ極く若い時季で叩き潰された鼻であつた。彼は自分の競争者に當る一人の彫刻家を、意地の悪い皮肉で狂人の様に腹を立てさせて、到頭掴み合になつたのである。黄色が／＼つた鳶色の小さな目の瞳子は、時々奇妙な紫色の輝きを見せる事があつた。殆ど睫毛のない爛れた目蓋は赤くなつてゐた。それは晝間だけで満足しないで、夜まで額に圓い小さな灯を結へ付けて仕事をしたからである。その様子はまるで地下の暗の中で蠢動してゐる、額の真中に火の様な目を持った單眼巨人を聯想させた。かうして彼は熊の様に唸り鐵槌の音を立て乍ら、烈しい勢ひで石と戦ふのであつた。

「何うです、あなたは何とお考へになりますか」と人々はレオナルドに向つてかう訊いた。

レオナルドはいつもブオナロッチイとの諍ひが、平和に解決するものと考へてゐた。フロレーンスを去つてゐる間にも、彼は餘り此の諍ひの事を氣に留めないで、殆ど忘れて了つてゐる位であつた。

であつた。

此の瞬間彼の心は極めて穩かに澄み渡つてゐて、何か非常に優しい言葉を以て敵手に向ひ度い様な氣持がした。此の心持はミケランゼロにも分らない筈がない様に思はれた。

「ブオナロッチ君は非常なダンテ通ですから」レオナルドは慇懃な穩かな微笑を浮べながら、ミケランゼロを指さしてかう言つた。「私などよりずつと上手にこゝの處を説明されるでせう」

ミケランゼロはいつもの癖で首を垂れ乍ら、邊りを見ずに歩いてゐたので、此の集りの席へ行き當つたのにも氣付かないでゐたが、レオナルドの口から發せられた自分の名を聞き付けると、始めて立止つて顔を上げた。

野性に近い程内氣で臆病な彼に取つては、人々の視線が堪らなく重苦しく感じられた。なぜと云つて彼は如何なる時でも、決して自分の醜さを忘れた事がなく、惱ましい程それを恥ぢてゐたからである。彼は皆が自分の事を笑つてゐる様に思はれた。

不意を打たれた彼は、初め一寸間誤つて了つた。例の黄みが／＼つた鳶色の小さな目で、迂散臭さうに人々を額越に見廻し、爛れた目蓋を力無げにしよ／＼させ乍ら、日光と人々の視線に射竦められて、病的に目を瞑るのであつた。

けれど敵手の明らかな微笑と、上から下の方へ向けられた（なぜと云つてレオナルドはミケ

ランゼロより背が高かつたからである。腹の底まで見透す様な視線を認めた時、臆病は忽ち狂憤に變つた——これは彼に屢ある事であつた。長い間彼は一言も發する事が出来なかつた。やうと無理に努力して、壓付けられた様な陰に籠つた聲で口を切つた。

「自分で説明するがいゝ！ お前こそ本でも手に持つてゐるのが似合つてるよ。世界中で一番賢い人間だからな。空威張屋のロムバルヂヤ人の言ふ事を本當にして、十六年の間も泥土の巨像を弄り廻した擧句、それを青銅に鑄出す事が出来ないで、何もかも見苦しく抛り出してつたぢやないか！」

彼は自分が見當違ひな事を言つてゐるのに氣が付いて、敵を傷けるのに十分な侮辱の言葉を探したけれど、考へ付く事が出来なかつた。

一同は二人の方へ好奇の視線を注ぎながら、しんと静まり返つて了つた。

レオナルドは黙つてゐた。幾秒かの間二人は無言のまゝ互に對手を見つめてゐた——一人は依然としてつましやかであるけれど、今は只驚きと悲しみの色を帯びた微笑を含み、今一人は侮蔑した様な冷笑を浮べ乍ら……。とは云へ此の冷笑は巧く成功しないで、たゞ癡癡の様になつて彼の顔を歪め、尙一層醜く見せるのみであつた。

ブオナロッチの狂猛な力に比べると、レオナルドの處女の如き美は、限り無き弱さの様に思は

れた。

レオナルドの作品中に、龍と獅子と二つの怪物の格闘を書いた素描があつた。空中の王たる翼をもつた蛇は、翼の無い地上の王を征服してゐた。

今二人の間に意識と意志を離れて行はれてゐる事は、丁度此の格闘のやうであつた。

レオナルドはモナ・リザの言葉が當つてゐるのを感じた。此の競争者は「嵐よりも強い雷の爲めに、到底彼を許さうとはしないであらう！」

ミケランゼロは何やら言ひ足さうとしたが、只手を一つ振つたのみで、急にくるりと踵を轉じて、首を垂れ背を曲げ乍ら、陰に籠つた不明瞭な咳きを立てて、例の無器用な熊の様な足取りで、どん／＼先の方へ歩き出した。その格好はまるで計り知る事の出来ない重みが、彼の双肩を壓してゐる様であつた。が間も無く不吉な日光と雨の混じた、濁つた銅色の靄の中に、溶けるが如く隠れて了つた。

レオナルドも同じく以前の道を續けて歩み始めた。

橋の上で一人の男が彼に追付いた。それはスピニ宮殿の集りに居合した男で、こそ／＼と何處へでも顔を出し度がる、醜い小男であつた。彼は生粹のフロレンス生れであつたけれど、容子が猶太人に似てゐた。畫家は一體此の男が何者で、又何といふ名前か知らなかつたけれど、

只意地悪な金棒引だといふ事だけは分つてゐた。

橋上の風は更に吹き募つて、ひう／＼と耳の中で鳴り、まるで氷の針の様に顔を刺した。石の様に暗く低い空の下を、速く入日の方まで連なつてゐる河浪は、銅を溶かした地獄の流れの様に思はれた。

レオナルドは此の道伴れに少しも注意を拂はないで、狭い乾いた處を選つて歩いた。ところが此方は泥濘の中をびちや／＼音を立てて、まるで犬ころの様に先へちよ／＼駆け出しては、畫家の顔を覗き込んで、ミケランゼロの事を話し掛けながら、ひよい／＼飛ぶやうな足取りで隨いて來るのであつた。彼は見受けた所、何かレオナルドの言つた言葉尻を掴まへて、直ぐにそれを競争者に傳へたり、町ちうへ擴めたりしようと思つてゐるらしかつた。けれど、レオナルドは黙つてゐた。

「ねえ先生」と五月蠅い男は一向傍を離れようとしなかつた。「あなたは未だチオコンダの肖像を完成なさらないのでせう？」

「えゝ未だ完成しません」と畫家は答へて顔を擧めた。「それが一體どうしたのです？」

「いや何でもありません、只一寸聞いて見たのです。けれどまあ考へても御覽なさい。まる三年間も一つ繪で苦勞して、それで未だ完成なさらんのですからねえ。私達の様な門外漢から見

れば、あの繪は今でも立派な完成品のやうに思はれて、あれ以上想像する事も出來ない位ですよ……」

さう言つてにやりとお世辭笑ひをした。

レオナルドは嫌惡の表情で彼を見やつた。此の醜い小男が急に憎らしくつて堪らなくなつて、若し自分の思ふ存分に出來るものなら、襟髪を引つ掴んで川の中へ抛り込み度い様であつた。

「併しそれにしてもあの肖像畫は何うなるんでせう」と執拗な道伴れは言葉を續けた。「それともレオナルド先生、あなたは未だお聞きにならないのですか？」

見受けた所、彼は何か腹に一物があつて、わざと愚圖々々引つ張つてゐるらしかつた。

突然畫家は嫌惡の情の透間から、此の男に對する動物的な恐怖を感じた。それは丁度此の男の體が爬蟲類の様に澤山の關節から出來てゐて、自由自在に腕つてつる／＼して居る様な心持がしたのである。屹度對手の方も最早何やら感づいたに相違ない。その手は慄へ目はきよろつき出して、餘計猶太人に似て來たのである。

「あつ成程、本當にあなたはつい今朝ほどお着きになつたばかりで、まだ御存知ないんですね。まあ何うでせう。大變な不幸が起つたんですよ。氣の毒な事に、チオコンダ氏は三度目に又寡夫になつたのです。モナ・リザが天國へ行かれてから、もう一月になりますよ……」

レオナルドは目の中が暗くなつた。一瞬間、今にも卒倒しさうな氣持がした。小男はその刺しい目付で食ひ入る様に、ちつと彼を見つめた。

併し畫家は異常な努力をして自己を制した——彼の顔はほんの心持蒼くなつたけれど、依然として他から透視を許さなかつた。少くとも小男は何にも氣が付かなかつたのである。

すつかり失望して了た彼は、フレスコバルヂイの廣場で裸まで泥に浸つて、到頭傍を離れた。レオナルドが始めて我に返つた時、先づ頭に浮んだ考へは、あの金棒引が嘘をついたのだと云ふ事であつた。彼はわざと此の報告を考へ付いて、それが何んな印象を畫家に與へるかを見届けた後、到るところで尾緒をつけて吹聴して廻り、もう以前から市中に横まつてゐるレオナルドとデオコンダとの戀愛關係云々といふ噂に、新しい色彩を添へようと思つたに相違ない。

いつもよくある事だが、死の事實は最初の一瞬間、到底有り得べからざる物の様に思はれた。けれどその晩彼は一切の事を知つたのである。フランチェスコはクラブリヤで有利な取引に成功して、生の儘の羊の毛皮をフロレンスへ納める契約も取り結んだ後、その歸途ラゴネロといふ小さな淋しい田舎町まで來たとき、妻のモナ・リザ・デオコンダが亡くなつたのである。或者は沼地によくある熱病の爲めと云ひ、又或者は傳染性の咽喉病の爲めと云ひ傳へた。

七

アルノ河の流域をピザから遠ざける運河の工事は、慘澹たる失敗を以て終を告げた。

秋の汎濫期に洪水は、漸く緒についた工事を全滅に歸した上、花咲き盛る美しい低地を腐敗物に充ちた卑濕の土と化し、人夫達は傳染病の爲めにばた／＼斃れて行つた。多くの努力も、金も、人間の命も、みんな徒らに消え去つたのである。

フエララから來た水道工事の技師は一切の罪をソデリニと、マキアエリと、レオナルドに嫁して了つた。知人は往來で會つても彼等から顔を反けて、會釋もしないのであつた。ニコロは羞恥と落膽の餘り病氣して了つた。

その二年前レオナルドの父が死んだ。

「千五百四年七月九日午後六時過ぎ」と、例に依つて簡単な文言で彼は覺書に認めた。「余の父、即ボデスタ宮殿附公證人セル・ビエロ・ダギンチ逝く。享年八十歳。十人の男及び二人の女を残せり」

セル・ビエロは幾度となく人の聽いてゐる所で、庶子のレオナルドにも他の子供等と同じ丈けの金額を、遺産として譲るといふ意志を洩した事がある。所が彼自身死ぬ前に此の意志を翻し

たのか、それとも息子達が故人の意志を實行する事を望まなかつたのか、兎に角彼等は、庶子たるレオナルドは遺産分配に關らないと宣言した。

その時高利貸の一人が（それは敏腕な猶太人で、豫期されてゐた遺産を抵當として畫家に金を貸したのである）、弟達と訴訟を起す権利を買取らうと言出した。レオナルドは家庭内の紛擾や法廷の争ひを、心の底から恐れてゐたけれど、その頃彼の財政が非常に混亂してゐたので、彼は遂に承諾した。やがて三千フロリンの訴訟が始つたが、それは六年間續くべき運命を擔つてゐたのである。弟等は世間一般がレオナルドに對して憤懣を感じてゐるのを利用して、その火へ更に油を注いだのである。彼等は義兄の無神論や、ツニーザル・ボルジアに仕へてゐる中行つた祖國に對する裏切や、妖術や、解剖の目的の爲めに基督教徒の墓を發いた冒瀆の行爲などを非難し、二十年前に葬り去られた彼の不自然な淫行に關する風説まで復活させ、その上亡き母カテリーナ・アッカブリカの記憶さへ傷つけるのであつた。

かういふ様々な不愉快事に、搦て加へて會議室の壁畫も不成功に終つたのである。

レオナルドは壁畫を描くに當つて、油繪具を用ひ乍らゆつくり落着いて仕事をすることに馴れて、水畫具を用ひ乍ら急いで仕上げるのを深く嫌惡してゐたので、「最後の晚餐」の前職があつたにも拘らず、「アンギアリの戦ひ」も依然として油繪の具を使ふ事に決心した。尤も今度は前

と違つて、完全な繪の具だと自信してゐたのである。畫が半ば出来上つた時、彼は畫面の前に鐵の火鉢を置いて熾に火を起した。それは新に工夫した方法によつて、漆喰が繪具を吸込むのを早くする爲めであつた。けれど間もなく彼は、火が効果を及ぼすのは只下の方の部分だけで、火に遠い上の方は漆も繪具も乾かない、といふ事を確かめたのである。

様々な空しい努力をした後で、彼は油繪具を以て壁畫を描かうとする第二の試みも、第一の場合と同様失敗だ、といふ事をはつきり了解した。「アンギアリの戦ひ」は「最後の晚餐」と同じく滅亡すべきものであつた。かうして彼は再び、ブオナロッヂの言葉に従へば、「見苦しくも一切を抛棄しなければならなかつた」のである。

會議室の畫はビザの運河や、弟達との訴訟事件以上、もつと厭になつて了つた。

ソデリニは註文の履行について、役所風の四角四面な要求を頻發して彼を苦しめた。そして契約の期限までに畫を仕上げる様に急ぎ立てて、賠償金を支拂へなどと脅かすのであつた。併し何うしても結局駄目だといふ事が分ると、今度は卑劣漢だの、官金着服だのと云つて非難し始めた。所でレオナルドが友人から金を借りて、國庫から受取つた丈けのものを返さうとする時、ソデリニはそれを受取らうとしないのであつた。その間にフロレンスでは、ミラン駐劄の代表者に宛てた大統領の手紙が、ブオナロッヂの味方に依つて擴められ、人々の手から手へ

渡つてゐた。此の代表者は、當時佛蘭西王から派遣されたロムベルヂヤの太守、シャルル・ダム
ホアーズの許へ畫家を出張せしめるやうに運動してゐた人である。

「レオナルドの振舞は面白からず存ぜられ候」その手紙の中にはかう云ふ事が書いてあつた。

「大金を請求して辛じて勞作に着手するや否や、既に一切を抛棄して、共和國に對する裏切人の
如き行爲をなしたる者に御座候」

或る冬の夜、レオナルドは只一人自分の仕事室に坐つてゐた。

吹雪は煖爐の煙突の中で唸り聲を立ててゐる。嵐がどつ／＼と吹き付ける度に、家の壁はびり／＼と震へて、蠟燭の火はゆら／＼と揺めいた。航空研究の横木に結へ付けられてゐる、蟲
蝕ひだらけの兩翼を擡げた刺製の鳥は、まるで今にも飛上らうと身構へてゐる様に、ふらり／＼
とゆれて居るのであつた。自然學者プリニウスの著述の並んだ片隅の書架の上には、見馴れた
蜘蛛が巢の中を走り廻つてゐる。雨か、それとも雪溶けの雫か知らないけれど、丁度誰かそつ
と叩でもする様に、窓の硝子を打つて居た。

實生活の勞苦に一日を送つた後とて、レオナルドはまるで熱に浮かされながら夜を明した後
の様に、へと／＼に疲れ切つた自分を感じた。彼は物體の斜面を走る運動の法則探究や、まるで
沈の様に小さな鼻が上を向いて、目が豚の様にしよぼ／＼して、大きな上唇が醜く下の方へ垂

れてゐる老婆のカリカチュアや、讀書や、すべてずつと以前から考へてゐる仕事に手を着けて見
たが、何も彼も巧く興が乗らなかつた。而もまるで睡くはないのに、長い夜が前に控へてゐる
のであつた。

彼は埃まみれの古い書物や、蒸溜瓶や、レトルトや、蒼褪めた醜い生物の入つたアルコール
漬の瓶や、銅の四分儀や、地球儀や、物理學、機械學、天文學、水壓學、光學、解剖學の器械
などを見やつた——と名狀し難い嫌惡の念が彼の心を充した。

彼自身も丁度此の蜘蛛の様ではなからうか？ 暗い隅つこの微くさい書物や、人間の骸骨や、
死んだ機械の死んだ肢體の上に巢くふ、年取つた蜘蛛に似てゐないだらうか？ 誰にも理解出
來ない文字の符號で埋められた幾枚かの紙の外に、何が一體彼の生涯の仕事であらうか？ 又
何が彼を死から區別して呉れようぞ？

彼はふと想ひ起した——子供の時分アルペン山で、列をなして飛ぶ鶴の叫びを聞き、樹脂の
香高い草の匂を吸ひ込み乍ら、フロレンスの町を眺めてゐた彼は、實に幸福であつた。彼
は何一つ知らなければ、何一つ考へもしなかつた。フロレンスの町は太陽の光の漲つた霧に
包まれて、まるで紫水晶の様に透明な瑠璃色をしてゐた。そして町全體が、春此の邊の山の斜
面を蔽ひ盡す若木の林の、黄金色の花咲く二本の枝の間に入つて了ふ程、小さく見えるのであ

つた。

あゝ彼の全生涯に亘る勞作は、すべて偽りに過ぎないのか？ 又偉大なる愛は偉大なる知識の娘でないのか？

彼は吹雪の咆哮や、軋みや、轟きなどに耳を傾けてゐた。とマキアエリの言つた言葉が彼の記憶に甦つた。「人生で一番恐ろしいのは心配でもなければ、貧困でも、悲しみでも、病氣でもなく、又死でもない——只倦怠あるのみだ」

夜嵐の非人間的な聲は、人間の胸に理解する事の出来ない、而もそれと同時に縁の深い、到底避け得られぬ物の事を語つてゐた。それは此世に在る一切の物の父たる古い混沌神の懐ろの、恐ろしい盲目な暗黒に包まれた最後の孤獨である——限りなき此の世の倦怠である。

彼は蠟燭を取つて次の間の戸を開き、その中へ入つて行つた。そして重々しい髪を垂れた、棺蔽ひの様な布に包まれた、三脚臺の上の畫に近寄つて、その布を取り拂つた。

それはモナ・リザ・デオコンダの肖像であつた。

彼は最後の會見の日に此の肖像に向つて仕事をして以來、未だ一度も蔽ひ布を外つた事がない。今彼はまるで始めて此の畫を見る様な気がした。何とも云へない生の力が此の顔の中に感じられて、彼は自分自身の創造の前に立つてゐるのが、息苦しい位に感じられた。魔術を掛

けられた肖像畫を針で突き刺せば、描かれた人が死ぬるといふ、迷信的な話も想ひ出されたのである。「此の場合は丁度その反対だ」と彼は考へた。「生きたものから生命を奪つて、それを死せる肖像に與へたのだ」

その繪姿の中に在るものは着物の襷一筋から、蒼白い胸にびつたり、落ちてゐる、黒つばい着物の襟開きを縁取る細い十字架の模様に至るまで、すべての物が明瞭で正確だつた。ちつと見入つて居ると、胸が呼吸につれて高まつて行き、喉の下の凹みが脈を搏ち、顔の表情が變化するのを、見ることが出来る様な気がした。

がそれと同時に彼女は遠く離れた、何の縁故もない幻の女であつた。死を知らぬ若々しい點に於て、畫の背景になつてゐる創世紀時代のバザルトの巖より古かつた。まるで此の世のものでなくて、もう疾くに消え果てた世界のもの様な、鐘乳石めいた形をしたぼつと青い山よりも、もつと古いのであつた。巖の間を颯々として流れてゐる川は、永遠の微笑を浮べてゐる彼女の唇の曲線を想はせた。波の様な髪の毛は、丁度川の波と同じ神聖なる法則によつて、黒い紗のエールの下から流れ落ちてゐる。

丁度死が彼の目を開いて呉れたかの様に、今始めて彼は悟つたのである——モナ・リザの美は彼があれ程飽く事なき好奇心を以て自然の中に求めたすべてであつた。世界の秘密はモナ・リザ

の秘密であつた。

三七八

かくして彼が彼女を試みたのではなく、彼女が彼を試みたのである。あゝ彼の魂を反映して、その中にまるで鏡にでも映つた様に、無限に深まつて行つた彼女の視線は、一體何を意味してゐるのであらう？

「洞穴の一番奥の、珍しい秘密を知る爲めには、好奇心以上のものが必要です」と云ふ、最後の會見の時の言葉を、繰返してゐるのであらうか？

それともこれは死人が生きた人を見る時の様な、一切を透視する無關心の微笑であらうか？

彼はモナ・リザの死が偶然でないと云ふ事を知つてゐた。彼は若しその氣にさへなれば、彼女を救ふ事が出来たのである。彼は今迄嘗てこれ程までに近々と、眞正面に死の顔を見つめた事が無いやうに思はれた。デオコンダの冷たく優しい視線の下に、堪へ難い恐怖の念が彼の心を凍らすのであつた。

生れて始めて彼は深淵の中を覗いて見る勇氣がなくて、たち／＼と後退りした——又覗いて見たくもなかつたのである。

さながら盗の様な周章だしい手付で、彼は棺布の様な重々しい襲のついた蔽ひを、彼女の顔の上へ下したのである。

その春レオナルドは、佛蘭西の太守シャルル・ダムブアーズの乞に依つて、フロレンス共和国から三ヶ月の賜暇を貰ひ、ミランへ向けて出發したのである。

彼は丁度二十五年前と同じ様に、悦んで故郷を見捨てた。そして二十五年前と同じ様に、縁のロムバルヂヤ平野の上に聳えてゐる、雪を頂いたアルプスの連峯を、寄邊のない追放の人として眺めたのである。

第十五編 宗教裁判

三〇〇

レオナルドがモローに仕へて始めてミランへ来たとき、彼は未だやつと十八になつたばかりの非常に若い、けれど既に名前を世に知られた。マルク・アントニオといふ學者と一緒に、解剖學を研究してゐた。彼は學術に對する愛を代々遺傳的に受繼いでゐる、エロナの古い貴族デラ・トルレ家の出であつた。マルク・アントニオの父はパドヴァで醫學を教へてゐたし、兄弟連も矢張り學者であつた。彼自身も未だ幼い頃から學術に對する奉仕に一身を捧げた。それは昔嘗て名門の家の子弟が、愛する貴女と神に對する騎士的奉仕の爲めに、一身を捧げたのと同じ様であつた。少年の戯れも青年の熱情も、此の嚴肅な奉仕から彼を傍道へ外らすやうな事は無かつた。彼は嘗て一人の少女を愛したが、到底愛と科學の二君に仕へる事は出来ないと言ふ事を確めたので、遂に戀人を捨てて斷然此の世の執着を絶つて了つた。彼は未だ幼い時分から過度の勉強で健康を害したので、その顔はまるで峻嚴な苦行者の様に蒼褪めてゐたが、併しそれでも

依然として美しく、丁度ラファエルの顔を想ひ出させる様であつた。只それよりもつと深い思想と、憂愁の表情が窺はれるのであつた。

彼が未だ一介の少年であつたとき、北部伊太利に於ける有名なパドヴァとピザの二大學が、彼の爲めに評ひを起した程である。レオナルドが再びミラノへ歸つたときには、未だ漸く二十餘歳のマルク・アントニオは、歐羅巴に於ける第一流の學者の一人と數へられて居た。

學術の上に於ける努力の方向は、一見した所彼等二人共同一らしく思はれた。兩人共中世紀頃阿刺比亞に現れたヒッポクラテス(有名な希臘の醫家、紀元前四六〇—三七七年)やガレノス(同、紀元後一—二〇一年)などの註釋者流が説く、煩瑣哲學風の解剖學を排して、實驗と自然觀察と、生物體の組織研究などを以て之に代へた。併し外面的類似の下に深い相違が隠れてゐた。

レオナルドは知識の最極限に於てある神祕を感じた。それは丁度磁石が織物を隔ててさへ鐵を引寄せるやうに、あらゆる自然現象を透して彼を自分の方へ引寄せるのであつた。肩の筋肉を描寫しながら、彼はかう言つて居る。

「是等の筋肉は細き糸の一端に依りて、己れを容るる機關の外部の一端に固定せらる。「偉大なる工人」は彼等をして、必要に應じ伸縮短自在たるの便を與へたり。」

又大腿部筋肉の靱帶を現した畫の説明に、彼は次の様な事を記してゐる。

「是等の a、b、c、d、e の見事なる筋肉を見よ。若し此の數を多しと感ずる者は試みに之を減じ、少しと見る人は加ふべし。然らばかくの如く驚くべき機關を創造したる者に、頌歌を捧げざるを得ざらん。」

かういふ風で、彼に取つてあらゆる知識の最後の目的は、「認識を超越したるもの」、「神聖なる必然」に對する偉大なる驚異であつた。機械學に於ける「第一動力」、解剖學に於ける「第一創造者」の意志に對する絶對の讚美であつた。

マルク・アントニオも矢張り自然現象の中に神祕を感じてゐたが、その前に謙抑の頭を垂れようとしなかつた。そして斷乎として斥ける事も、亦征服して了ふ事も出来ないで、其の神祕と戦ひ且つそれを恐れたのである。レオナルドの科學は神に向つたが、マルク・アントニオの科學は神に逆行した。そして失はれたる信仰を、人智といふ新しい信仰を以て換へようと欲した。

彼は慈善心に富んでゐた。屢々富者の治療を斷つて、貧民の家を訪問して無料で診察したり、金錢上の助力を與へたりして、有りたけのものをすべて抛り出して了ふ覺悟をもつてゐた。彼は俗世間と交渉のない、冥想裡に没頭した人々に通有の、善良な心を持つて居たのである。併し一旦話頭が科學の敵たる僧侶や牧師の無智に及ぶ度に、彼の顔は歪み、目は飽く事を知らぬ憤怒にざら／＼輝き出すのであつた。でレオナルドは心の中で、若し彼に權力を與へたならば、

此の慈悲深い人間が平然として理智の名に於て、多くの人々を焚火の中へ追ひ込むに相違ないと考へた。それは彼の敵たる僧侶や牧師が神の名に於て、彼等を焼いたのと同じ譯である。

レオナルドは科學の方面に於ても、藝術に於けるが如く孤獨であつたが、マルク・アントニオは多くの弟子達に取巻かれてゐた。彼は群集を牽引し、豫言者の如く人心に火を燃やし、奇蹟を行つた。そして藥石よりも寧ろ信仰を以て病人を治療するのであつた。さうして若い聽講者達はすべての弟子の例に違はず、師の思想を極端な所まで持つて行つて了つた。彼等はどう宇宙の祕密と戦ふ様な事をしないで、何の苦もなくそれを否定して、今日明日にも科學は一切の物を征服し解決し盡して、古い信仰の建物は跡方もなく破壊して了ふだらう、などと考へて居るのであつた。彼等はまるで子供が新しい着物を自慢する様に、自分の無神論をひけらかして、小學生の様に悪巫山戯をし散らした。彼等の得々然たる惡ふさげは、小犬がきやん／＼啼き乍ら暴れ廻つてゐる様に感じられた。

レオナルドに取つては、怪しげな知識の奉仕者の狂信も、怪しげな神の奉仕者の狂信も、同じ位厭はしかつたのである。

「科學が凱歌を奏して、賤民がその殿堂へ闖入するときには」と、彼は哀愁の情を感じつつかう思つた。「彼等は丁度以前教會を潰したのと同じ様に、その承認によつて科學をも潰しはしないだ

らうか？ 群衆の知識は群衆の信仰より俗悪でないだらうか？」

以前は人體解剖が法王ボニファシウス八世の勅書によつて禁じられてゐたので、死體を手に入れるのは困難で危険な事になつてゐた。二百年ばかり前、第一流の學者たるムンデニ・デイ・ルッチが、ボロナ大學で公衆を前にして、一箇の死體解剖を行つた。その時彼は「比較的動物性に近いもの」として、婦人を選んだのである。けれど、彼自身の告白によると、それでも良心の苛責が甚しかつたので、「靈魂と睿智の宿つてゐる」頭部を解剖する丈の勇氣がなかつた程である。併し時代は變つた。マルク・アントニオの弟子達はそれ程臆病でなかつた。彼等は如何なる危険や罪惡の前にも躊躇しないで、新しい死體を手に入れたのである。單に大金を出して首切入や病院の墓掘りから買ひ取るばかりでなく、無理やりに強奪したり、絞刑臺から盗み取つたり、墓の中から掘り出したりした。若し師が許可したならば、彼等は夜間淋しい郊外で、通行人を殺しも兼ねない勢ひであつた。

死體の豊富な爲めにデラ・トルレの仕事は、畫家に取つて特に重要貴重なものとなつた。

彼はペンと赤い色鉛筆で澤山の解剖圖を作り、其の餘白に説明や注意書を記した。此の研究の態度についても、二人の研究者が正反對の位置に立つてゐる事が、一層明かに窺はれるのであつた。

一方は單に學者であつたが、今一方は學者と藝術家を兼ねてゐた。マルク・アントニオは知つてゐたが、レオナルドは知り且つ愛してゐた。そして愛が認識を深めるのであつた。彼の畫は正確を極めてゐると同時に、何とも言へない程美しく、何處で藝術が終つて科學が始つてゐるのか分らない位であつた。兩者は相交錯して、渾然たる一つの物に融合してゐるのである。

「解剖學を研究するには」と彼はある注意書の中にかう言つてゐる。「余の畫圖によるよりも死體に依るを優れりとする人に、余は次の如く答へるであらう。若し人が一回の解剖に於て、畫圖の示す所を全部觀取し得るならば、その言葉は眞理である。併し人が如何に紙背に徹する如き眼光を有つてゐても、漸く四五の血管を見るに過ぎないであらう。然るに余は完全なる知識を得る爲めに、各々年齢を異にする十箇以上の人體解剖を行ひ、凡ての部分を破壊し、血管を包むすべての肉塊を、極めて微細なる小片すら残さず除去去つて、而も毛管から溢れ出た殆ど目に入らぬ程の血の滴りを除いては、少しも血を流さなかつたのである。一箇の死體のみで足りない場合には（なぜと云つて死體は研究中に腐敗するからである）、余はその對象を完全に知る爲めに必要な丈の死體を解剖した。そして區別を發見する爲めに、同一の研究を二度繰返したのである。是等の畫圖の數を増して行き乍ら、余は見る人が各々の肢體や機關を手を取つて、それを彼方此方へ廻轉しながら、内からも外からも、上からも下からも、あらゆる方面から檢

査するが如き感を抱かしめるのである。」

畫家の明察力は學者の目と手に數學器械の正確さを與へた。組織體や粘膜の中に藏された、誰一人知る者の無い血管の支脈や、筋や腱の中に分派した微細な神経などを、彼の左手は解剖刀を以て探つては、どん／＼發いて行くのであつた。それは蹄鐵をも折曲げるほど強く、又同時にデオコンダの微笑の中に潜む女性美の祕密をも捕へるほど、優しい手なのである。

理智以外何者をも信じようとしなないマルク・アントニオすら、何うかすると此の豫言者の様な知識に對して、まるで奇蹟にでも面接したやうに困惑を感じる程であつた。

時々畫家はかう獨り言ちた。「さうあるべきだ、それでよいのだ。」又研究してゐる中に本當にさうだと云ふ事を確めた時、創造者の意志は冥想者の意志に答へて、「美は眞だ、眞は美だ」と言ふかの様であつた。

マルク・アントニオは、レオナルドが科學に没頭してゐるのはほんの一時の熱で、まるで遊戯でもする様に、他の仕事に對する餘裕をも保有してゐるのを感じたが、併しそれと同時に此の畫家の手に掛ると遊戯か慰みの様に見える仕事か、如何に無限の忍耐と「執拗なる峻嚴」を要求するか、といふ事を觀取しない譯に行かなかつた。

「假令諸子に科學に對する愛があるとしても」レオナルドはその注意書の中で讀者に向つてか

う言つてゐる。「潔癖が諸子を妨げないであらうか？ 假令その潔癖に打克つたとしても、夜間切り刻まれて血みどろになつた死骸を前にして、恐怖の念に襲はれはしないであらうか？ 若し諸子が恐怖の念を征服したならば、今度はかういふ人體の描寫に必要缺くべからざる、極めて明瞭な意匠が諸子にあるだらうか？ 若しそれがあるとすれば、次には遠近法の知識を有してゐるだらうか？ それも具備してゐるとすれば、次に諸子は筋肉の力と緊張を計るに必要な三角術的證明の方法と、機械學上の知識を備へてゐるだらうか？ 又最後に最も重要なもの——即ち忍耐と正確が諸子にあるだらうか？ 是等の資質を私が何れくらゐ領有してゐるか云ふ事は、余の著した百二十部の解剖學の書が證明するであらう。余が此の勞作を最初期待したる如く完結せしめる事が出来なかつた原因は、私利の念や怠惰でなくして、單に時日の不足に過ぎないのである」

「余より以前にプロメウスが其の宇宙誌に於て世界を描破したやうに、私は小さき宇宙たる人間の體を描寫する。これは世界の中に在る一つの世界である」

彼は若し自分の勞作が人々に認められ了解されたなら、それは學界に一大轉換を惹起すに違ひないと豫感した。そして彼が如何なる恩恵を人類に施したかといふ事を、彼の解剖圖から發見する事の出来る「追従者」、「後繼者」の出現を待つてゐたのである。

「余は機械學の原則に關する書物が」と彼は書いてゐる。「運動の法則や、人類や其の他の動物の力の研究に先んじて、世に出る事を希望する。それは機械學に準據して解剖學上の法則を、三角術的に明瞭に證明し得んが爲めである」

彼は人間や動物の四肢を、生ける槓杆として眺めて居た。彼に言はせれば、あらゆる知識は、「第一動力の驚くべき正しさ」を具體化した機械學の中に、深く根を下してゐるのであつた。「第一の創造者」の神聖なる意志は、神祕中の神祕たる「第一動力」の公平なる意志から流れ出してゐるのだ。

レオナルドには數學的な正確さと共に、推測や直感や豫言があつた。その大膽さはマルク・アントニオを驚かして、到底有り得べからざる物の様に思はれた。それは丁度始めて山を見る人の目に、遠い嶺が空中に掛つた雲の様に感じられて、この幻が地球の中心まで届くやうな、花崗岩の根を持つてゐるなどとは、信する事が出来ないのと同じ譯であつた。

妊婦の死骸に依つて、子宮内に於ける胎兒發達の順序を研究し乍ら、レオナルドは人體の組織が動物——と云つても四足獸に限らず、魚や鳥などにさへ酷似してゐるのに驚かされた。

「人間を猿及び其の他同種屬の多數動物と比較して見よ」と彼は書いた。「人間の内臓を猿、獅子、牛、魚、鳥等の内臓と比較して見よ。人間の指を熊の指、魚の鰭の軟骨、鳥の翼、蝙蝠の翼な

どと比較して見よ」

「人體の組織を完全に知悉してゐる人に取つては、一切を抱擁する心境に達する事は容易である。なぜと云つて、すべての動物の諸機關は相類似してゐるからである。」

彼は種々雑多な肉體の構造の中に唯一の發育の法則、相連絡せる唯一の自然律を遠觀したのである。

マルク・アントニオはかうした推論を、正確なる認識の精神に反した、學者としてあるまじき世迷言と稱して、熱くなつて議論を戦はした。けれど時としては言ひ破られて、まるで魔法でも懸けられた様に、口を喋みながら耳を傾ける事があつた。かういふ瞬間子供の様に優しく、僧侶の様に峻嚴な彼の顔が美しくなつた。レオナルドはいつも悲しさうな、深みを帯びた彼の目を見てゐる中に、此の學問の爲めの隱遁者も、單に科學の祭司であるばかりでなく、同時に又その犠牲でもあると感じた。彼に取つては偉大なる悲しみが「偉大なる知識の娘」なのであつた。

二

シャルル・ダムブアーズ太守と佛蘭西王との運動に依つて、畫家はフローレンスの元老院から

無期限の賜暇を得た。そして翌千五百七七年には、愈々すつかりルイ十二世の方へ移つて了つて、ミランに居を定め、只時々用事でフロレンスへ赴く丈けに過ぎなかつた。かうして四年経つた。

千五百十一年の終、當時既に腕のある畫家と評判されてゐたデオヴンニ・ベルトラフィオは、新しく出来たサン・マウリチオ教會の壁畫製作に従事してゐた。これは古い羅馬時代の競技場とジュピター神殿の廢墟へ建てられた、古いマジオレの尼寺に附屬する教會であつた。その隣りにデラ・ギニヤ街に面した高い塀を隔てて、荒れた庭があつた。庭の中には嘗て壯麗であつたけれど、もう久しい前から見棄てられて半ば崩れた、領主のカルマニオラ家の宮殿が立つて居た。尼達は此の地所と家とを、煉金術師のガレオット・サクロボスコと、その姪に賃貸してゐた。姪といふのは有名な古物蒐集家ルイジ氏の娘モナ・カッサンドラであつた。二人は近頃ミランへ歸つて來たのである。

始めて佛蘭西軍が侵入して、エルチル門外カタラナ運河の傍なる、産婆モナ・シドニヤの小家が掠奪されて後、三人はロムバルヂヤを去つて、九年の間希臘、多島海の諸島、小亞細亞、パレスチナ、シリヤなど、東方地方を放浪し乍ら過した。彼等については奇妙な風説が行はれてゐた。あるものは煉金術師が錫を金に變じる賢人の石を發見したと云ふし、或者は彼がシリ

ヤの貴族から實驗の爲めに大金を引出して、それを着服したとも云ふし、又或者はカッサンドラが惡魔と契約した上に、自分の父親の目錄に依つて、フィニキヤのアスタルタの祠ヘテロに埋めてあつた、昔の寶物を掘り當てたとも云ひ、更に又或者は彼女が君コンスタンチナ府で、スミルナの豪商を蕩し込み、魔法の酒を飲ませて金を剝ぎ取つたとも云ふのであつた。兎に角彼等はミラノを出る時は乞食の様であつたが、歸つたときに大金持に成りすまして居た。

以前はデメトリー・カルコンディアの弟子で、老魔女シドニヤの養ひ子で、魔法師であつたカッサンドラが、敬虔なる教會の娘となつたのである。少くともさう云ふ風に粧つて居た。彼女は嚴格にすべての儀式や齋モロイを守り、教會の式を訪ひ、莫大な喜捨金に依つてマジオレ寺院の尼達ばかりでなく、ミランの大僧正の特別な保護さへ受ける様に迄なつた。口の悪い連中は（尤もそれは思ひ掛けない富に對する、人間に有勝ちの美望の念から出た事かも知れないけれど）、彼女は單に長い放浪の旅から一層酷い異教徒として歸つた許りでなく、叔父の煉金術師と共に宗教裁判を避けて羅馬から逃出して來たので、遅かれ早かれ二人共焚火を通れる事は出来ない、とかう斷言するのであつた。

ガレオットは矢張依然としてレオナルドを神の如く崇めて、彼を自分の師と見做し、「偉大なるヘルメスの祕密の睿智」を領有する人と信じ込んでゐた。